令和４年度
自己点検・評価「年次報告書」

長崎女子短期大学
自己点検評価室

【目次】

部　署　名	職　名	氏　名	頁
学長	学長	玉島　健二	1
栄養士コース	コース長	太田　美代	3
ビジネス・医療秘書コース	コース長	濵口　なぎさ	6
幼児教育学科	学科長	本村　弥寿子	8
学生部	部長	織田　芳人	10
図書館	館長	森　弘行	12
自己点検評価室	室長	武藤　玲路	14
入試広報室	室長	髙井　達司	16
キャリア支援センター	センター長	原田　実輝	18
ＦＤ・ＳＤ委員会	委員長	武藤　玲路	20
ＩＲ推進室	室長	森　弘行	22
教務委員会	委員長	桑原　真美	24
教職課程委員会	委員長	本村　弥寿子	26
教育ＳＳ運営委員会	委員長	太田　美代	28
特色化推進PT会議	会議長	玉島　健二	30
募集・広報委員会	委員長	髙井　達司	32
紀要・図書委員会	委員長	南條　恵	34
学生指導委員会	委員長	織田　芳人	36
学生支援委員会	委員長	山中　慶子	38
地域連携・子育て支援センター	センター長	古賀　克彦	40
障がい学生支援委員会	委員長	織田　芳人	42
寮務委員会	委員長	前田　功	44
学生相談室	室長	荒木　正平	46
事務局	局長	前田　功	48

職　名	氏　名	頁
学長	玉島　健二	50
教授	森　弘行	51
	織田　芳人	52
	福井　昭史	53
	武藤　玲路	54
	中澤　伸元	55
	松尾　公則	56
准教授	濵口　なぎさ	57
	本村　弥寿子	58
	中村　浩美	59
	太田　美代	60
講師	古賀　克彦	61
	荒木　正平	62
	江頭　万里子	63
	南條　恵	64
	船勢　肇	65
	大徳　朋子	66

職　名	氏　名	頁
助教	桑原　倫子	67
	桑原　真美	68
	山中　慶子	69
	髙橋　秀樹	70
実習助手	一瀬　優美	71
	石橋　花琳	72
	有得　結	73
事務局長	前田　功	74
入試広報室長	髙井　達司	75
キャリア支援センター長	原田　実輝	76
事務主任	宮﨑　伸一郎	77
事務（会計）	一瀬　章子	78
〃　（教務）	森口　和美	79
〃　（教務）	林田　翔太郎	80
〃　（学生）	櫻井　縁	81
〃　（入試広報・庶務）	牧島　愛実	82
司書	伊藤　理恵子	83

令和４年度

「部署別報告書」

令和４年度　「学長・運営委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：玉島　健二（学長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．学長運営方針の目標達成
令和４年度の学長運営方針に掲げた４つの努力目標の達成に向け、入試・運営委員会が中心的役割を果たすように、リーダーシップを発揮する。

２．特色化推進プロジェクト会議での協議
特色化推進プロジェクト会議において、本学の解決すべき課題を明確にするとともに、優先順位を付けて解決に取り組む。また、学科・コースの特色化について努力する。

３．学生募集活動の推進
学生募集活動に積極的に取り組み、定員充足に努める。また、長崎女子高校からの入学生は３５名以上の確保を目指す。

４．学生満足度の向上
学生の要望等に可能な限り耳を傾け、卒業時アンケートにおける満足度の前年度以上の評価を目指す。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．①学長運営方針を常に意識して業務に取り組むとともに、教職員の年次報告書作成では学長運営方針を意識した計画となるよう指導する。
②学長運営方針の達成状況を進行管理し、定期的なチェックを行いながら業務に当たる。

２．原則として、特色化推進プロジェクト会議を月１回程度の頻度で開催し、解決（対応）可能な事案から対応していく。

３．①進学ガイダンスや高校訪問は積極的に参加する。特に、前期については、時間の許す限り参加する。
②長崎女子高校については、総合説明会や入試説明会に学長自ら出席し、アピールする。

４．①学生からの要望については、丁寧に対応し、優先順位を定めて要望実現のために努力する。
②学友自治会役員との意見交換会を１回以上行い、直接学生の意見を聴く場とする。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」
①多くの教職員が学長運営方針を念頭においた目標設定を行っていた。
②進行管理・定期的なチェックは不十分であった。達成度が不十分な項目は約３０％程度あった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・$\boxed{\text{D}}$」
・プロジェクト会議の開催は１回、プロジェクト会議関連のＳＤ研修会を１回開催したが、目指す目標達成にはほど遠い状況であった。

３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
①可能な限り対応した。
②長崎女子高関係の説明会には学長自ら出席し、次年度入学予定者は３７名確保できた。

４．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
①学生からの要望については可能な限り対応したいが、予算措置を伴うものもあり１００％は無理である。
②自治会役員からの意見聴取は直接（対面）が１回、ペーパー提出が１回であった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　各教職員の年次目標設定については、学長運営方針を念頭に置くことを更に徹底する。場合によっては、面談を行い、目標設定のアドバイスを入れたい。

２．　次年度は「特色化推進プロジェクト会議」は設定せず、必要に応じて運営委員会等で協議することとする。

３．　今年度と同様に、学生募集活動には全力を挙げ、入試広報室長をサポートする。

４．　今年度同様に、学友自治会役員との協議は継続する。

令和４年度 学長・運営委員会 年次報告

Plan 計画

1．学長運営方針の目標達成のためのリーダーシップの発揮
2．特色化推進プロジェクト会議における課題の明確化、学科・コースの特色化
3．学生募集活動の積極的推進及び長崎女子高校からの志願者３５名以上の確保
4．学生満足度向上に向け、卒業時アンケートにおける満足度の前年度以上の評価

Do 実行

1．学長運営方針の学長室掲示、教職員の年次報告書は運営方針を念頭に作成させる
2．特色化推進プロジェクト会議は原則、月１回開催し、解決可能な事案から対応する
3．進学ガイダンス等への積極的な参加、長崎女子高校へは説明会等に出向く
4．学生からの要望事項は優先順位を付けて対応、自治会役員との意見交換会を１回以上開催

Check 検証

1．多くの教職員が学長運営方針を念頭においた目標設定を行っていた
2．プロジェクト会議の開催は１回に止まった。また、８月にＳＤ研修会を開催したが、目指す目標達成にはほど遠い状況であった
3．進学ガイダンスや高校訪問等は可能な限り対応した。長崎女子高への説明会も出席し、次年度入学予定者は３７名となった。
4．学生からの要望には可能な限り対応するが、予算措置を伴うものは次年度以降となる
また、学友自治会役員との意見交換会は対面が１回、ペーパー提出での意見聴取を１回実施した

Act 改善

1．各教職員の年次目標設定は、学長運営方針を念頭に置くことを徹底する。場合によっては、面談を行い、助言する
2．プロジェクト会議は設定せず、必要に応じて運営委員会等で協議する。
3．今年度同様に、学生募集活動には全力を挙げ、入試広報室をサポートする
4．今年度同様に、学友自治会役員との協議は継続して行い、学生満足度の向上に努める

令和４年度　「栄養士コース」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：太田　美代（コース長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．コース職員が協働し、４項目の努力目標にチームとして取り組む。
２．「長崎食育学」、ゼミナールを核として本学栄養士コースならではの特色ある教育活動に取り組む。
３．専門職としての基礎的な力を養うため、栄養士実力認定試験の短大平均を上回る者６０％以上、及びA認定５０％以上を目指す。
４．学生の自己肯定感を高め、「選択してよかった」と思えるコース運営を行い、学生の満足度９０％（肯定的な評価の合計）を目指す。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．定期的なコース会議の開催を継続して実施するとともに、新たに導入した Webex 等 ICT の活用を図り、目標達成に向けて円滑な意思の疎通や協働体制の維持に努める。
２．「卓袱料理試食会」を年間二回実施し、一回目は２年生から１年生への伝承。二回目はお客様をお迎えして１・２年生が協力しておもてなしをし、学修の成果を発表する機会とする。１年生はプレ・ゼミナールとして取り扱い、先輩から栄養士コースの伝統を引き継ぎ「長崎食育学」での学びを生かす場とする。また、「ゼミナール活動報告会」を実施して活動のまとめを行う。
３．「栄養士スキルアップ特講」と並行し、学力向上の強化策として２年生に「チャレンジタイム」、１年生に「スタートアップセミナー」を設け、教育サポートスタッフを活用しながらコース職員の協働で目標達成を目指す。「チャレンジタイム」は習得度別グループ編成とし、少人数指導を実施する。
４．一人一人を大切にしたきめ細かな指導を行い、学生の卒業後の夢を叶えるための後押しとしてキャリア支援の充実を図るとともに、中高生を対象とした料理教室などに学生の活躍の場を作り、自らの成長を実感できる機会とする。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　ほぼ毎週コース会議を開催し、報告・連絡・相談を密にすることができたが、ICT の活用には至らなかった。対面での会議を密に行うとともに、日頃の伝達はメール等を活用して、意思の疎通を図ることは円滑にできた。

２．自己評価「 [S]・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　卓袱料理試食会は、新型コロナの感染状況を考慮し、１回目は当初計画の７月から１０月に変更。２回目は会食形式から弁当配布に変更して実施した。学外の関係者に配布して試食していただき、アンケートに回答していただく形で感想やご意見を賜った。本学の取組について理解を深めていただく良い機会とすることができた。一方、同時期にゼミナール活動報告会を重ねて実施したため、学生や職員の負担が大きかった。
　ゼミナール活動を通した地域貢献・情報発信活動は、各研究室で工夫した活動を行うことができた。
　また、県水産加工流通課の要請を受け、西九州新幹線開業イベントに参加。同時開催された西九州新幹線開業記念ワンハンドフードコンテストで本学から応募した「フィッシュスティックピザ」が優秀賞を受賞、「さばのゴーレンサンド」が入選した。

３．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　栄養士実力認定試験の結果、短大平均の得点を上回る者が２２名中１１名で50%、A認定が１２名で54.5%であった。あと２～３点でA認定となる学生も３名ほどいて、目標はほぼ達成することができた。次年度は、成績不振の学生もいるため、栄養士実力認定試験対策と併せて、学修支援への取組も継続する必要がある。

４．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」
　卒業時調査の「本学に入学して学んだことをどう思うか」という項目における肯定的評価は 78.3%で残り 21.7%はどちらでもないと回答していた。目標の 90%には届かなかったが、否定的な回答及び意見は無かった。「本学で学んだことが将来に活きる」と考えている学生は 86.9%いたので、本学での学びの有用性に対する評価は高かったものと考える。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．Google Classroom や KENS 等の研修を行い、実務に生かして ICT の活用を進める。 ２．「卓袱料理試食会」を年１回の実施に戻し、ゼミや公開講座の活動等で食を通した地域貢献につながる取組を充実させる中で一人一人の自己肯定感を高め、社会性を涵養する。 ３．e ラーニングを導入し、個別の反復学習を可能にして自ら学ぶ姿勢を支援する。チャレンジタイムとスタートアップセミナーの時間をゼミ・プレゼミに組み入れ、計画的に学力向上を図る。

令和４年度 栄養士コース 年次報告

Plan 計画

1. コース職員が協働し、4項目の努力目標にチームとして取り組む。
2. 「長崎食育学」、ゼミナールを核として本学栄養士コースならではの特色ある教育活動に取り組む。
3. 専門職としての基礎的な力を養うため、栄養士実力認定試験の短大平均を上回る者60%以上、及びA認定50%以上を目指す。
4. 学生の自己肯定感を高め、「選択してよかった」と思えるコース運営を行い、学生の満足度90%(肯定的な評価の合計)を目指す。

Do 実行

1. 定期的なコース会議開催と併せ、Webex等ICTの活用を図り、目標達成に向けて円滑な意思の疎通や協働体制の維持に努める。
2. 「卓袱料理試食会」を年間二回実施し、二回目はお客様をお迎えして1・2年生が協力して学修成果の発表の場とする。ゼミナール活動報告会も別途実施する。
3. 「栄養士スキルアップ特講」と並行して学力向上の強化策として2年生の「チャレンジタイム」1年生のs「スタートアップセミナー」を実施。教育サポートスタッフの活用を図りながらコース職員の協働で目標達成をめざす。
4. 一人一人を大切にしたきめ細かな指導を行い、学生の卒業後の夢を叶えるための後押しとしてキャリア支援の充実を図るとともに、中高生を対象とした料理教室などに学生の活躍の場を作り、自らの成長を実感できる機会とする。

Check 検証

1. ほぼ毎週コース会議を開催し、報告・連絡・相談を密にすることができたが、ICTの活用には至らなかった。対面での会議を密に行うとともに、日頃の伝達はメール等を活用して、意思の疎通を図ることは円滑にできた。
2. 卓袱料理試食会2回目は弁当配布に変更して学外の関係者に配布して感想やご意見を賜った。本学の取組について理解を深めていただく良い機会とすることができた。
3. 短大平均の得点を上回る者が22名中11名で50%、A認定が12名で54.5%であった。目標はほぼ達成することができた。
4. 卒業時調査の「本学に入学して学んだことをどう思うか」という項目における肯定的評価は78.3%で残り21.7%はどちらでもないと回答していた。目標の90%には届かなかったが、否定的な回答及び意見は無かった。「本学で学んだことが将来に活きる」と考えている学生は86.9%いたので、本学での学びの有用性に対する評価は高かったものと考える。

Act 改善

1. Google ClassroomやKENS等の研修を行い、実務に生かしてICTの活用を進める。
2. 「卓袱料理試食会」を年1回の実施に戻し、ゼミや公開講座の活動等で食を通した地域貢献につながる取組を充実させる中で一人一人の自己肯定感を高め、社会性を涵養する。
3. eラーニングを導入し、個別の反復学習を可能にして自ら学ぶ姿勢を支援する。チャレンジタイムとスタートアップセミナーの時間をゼミ・プレゼミに組み入れ、計画的に学力向上を図る。

令和４年度　「ビジネス・医療秘書コース」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：濵口　なぎさ（コース長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．実践型教育プログラムを活用し、検定上位級や登録販売者の合格者を増やし、就職活動支援も充実させる。

２．プレゼミナール、ゼミナール、キャリアアップセミナー、ライフプランニング、事務管理（ビジネスプランニング）等において、外部の力を活用し、より実践的な教育活動の充実を目指す。

３．課題を抱えた学生への対応は従来通りきめ細かく行い、卒業まで支援する。就職活動については、外部機関のカウンセラー等との連携を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．後期が始まった段階で、一般就職希望者で未活動の学生に対してチューターを中心に支援を強化する。登録販売者試験受験予定者が確定した段階で、コースとしての対策強化を図る。日商 PC 検定と MOS 試験については随時試験の実施回数を増やす。

２．2 年前期のゼミナールでは、(株)長崎国際テレビ等の協力により、専門家の助言による動画作成を行う。プレゼミナール、ライフプランニングでは(株)イグアスによる通年での助言・指導をお願いし、就職活動への意識づけを行う。事務管理では、専門家の助言指導により商品の企画開発を目指す。キャリアアップセミナーでは中小企業家同友会会員による面接指導を行う。

３．月１～2 回開催予定のコース会議にて、課題を抱えた学生の早期発見と課題解決を目指す。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
後期始業時（9 月末）の時点で、内定者は 3 名と低調な就活状況であったが、10 月以降は例年より順調に内定者が増加し、2 月上旬の時点で 91%の就職率となった。実践型教育プログラムを活用して就職活動を行っている。登録販売者試験は 5 名受験し 1 名合格、秘書検定準 1 級に 2 名合格。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
複数企業及び専門家による助言・指導により、PR 動画制作、商品の企画・開発・販売等で目覚ましい成果が得られた。また、就職活動においても助言・指導による意識づけができた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
欠席が目立つ学生を早期に把握し、事務局とも連携して対応したが、残念ながら 1 名が休学、1 名が除籍、経済的理由で 2 名が退学となった。就職を希望しているがコミュニケーションに課題がある学生についてはキャリアカウンセラーに相談し、地域若者サポートステーションを紹介した。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．報告・連絡・相談の徹底が必要。実践型教育では空き時間は休みではなく、各自が定めたプログラムに従って活動をするという認識のもと、チューター等への報告・連絡・相談を密に行うよう指導が必要。

２．産学連携での商品開発等、企業や専門家等外部の力を活用し、次年度も実践的な教育活動の充実を目指す。

３．課題を抱えた学生の早期発見と迅速な対応のために、コース内での情報共有をきめ細かく行う。就職活動については、外部機関のカウンセラー等との連携を図る。

令和4年度 ビジネス・医療秘書コース 年次報告

Plan 計画

1．実践型教育プログラムを活用し、検定上位級や登録販売者の合格者を増やし、就職活動支援も充実させる。

2．プレゼミナール、ゼミナール、キャリアアップセミナー、ライフプランニング、事務管理(ビジネスプランニング)等において、外部の力を活用し、より実践的な教育活動の充実を目指す。

3．課題を抱えた学生への対応は従来通りきめ細かく行い、卒業まで支援する。就職活動については、外部機関のカウンセラー等との連携を図る。

Do 実行

1．後期が始まった段階で、一般就職希望者で未活動の学生に対してチューターを中心に支援を強化する。登録販売者試験受験予定者が確定した段階で、コースとしての対策強化を図る。日商PC検定とMOS試験については随時試験の実施回数を増やす。

2．2年前期のゼミナールでは、(株)長崎国際テレビ等の協力により、専門家の助言による動画作成を行う。プレゼミナール、ライフプランニングでは(株)イグアスによる通年での助言・指導をお願いし、就職活動への意識づけを行う。事務管理では、専門家の助言指導により商品の企画開発を目指す。キャリアアップセミナーでは中小企業家同友会会員による面接指導を行う。

3．月1～2回開催予定のコース会議にて、課題を抱えた学生の早期発見と課題解決を目指す。

Check 検証

1．後期始業時(9月末)の時点で、内定者は3名と低調な就活状況であったが、10月以降は例年より順調に内定者が増加し、2月上旬の時点で91％の就職率となった。実践型教育プログラムを活用して就職活動を行っている。登録販売者試験は5名受験し1名合格、秘書検定準1級に2名合格。

2．複数企業及び専門家による助言・指導により、PR動画制作、商品の企画・開発・販売等で目覚ましい成果が得られた。また、就職活動においても助言・指導による意識づけができた。

3．欠席が目立つ学生を早期に把握し、事務局とも連携して対応したが、残念ながら1名が休学、1名が除籍、経済的理由で2名が退学となった。就職を希望しているがコミュニケーションに課題がある学生についてはキャリアカウンセラーに相談し、地域若者サポートステーションを紹介した。

Act 改善

1．報告・連絡・相談の徹底が必要。実践型教育では空き時間は休みではなく、各自が定めたプログラムに従って活動をするという認識のもと、チューター等への報告・連絡・相談を密に行うよう指導が必要。

2．産学連携での商品開発等、企業や専門家等外部の力を活用し、次年度も実践的な教育活動の充実を目指す。

3．課題を抱えた学生の早期発見と迅速な対応のために、コース内での情報共有をきめ細かく行う。就職活動については、外部機関のカウンセラー等との連携を図る。

令和４年度　「幼児教育学科」年次報告書

区分：　学科コース　・委員会等　・事務局等　・教職員個人　・その他（　　）

氏名：本村　弥寿子（学科長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．心身面、経済面及び学習面で配慮や支援が必要な学生に対し、学科全体で丁寧に対応する。
２．本学幼児教育学科の強みとして、実技系科目の一層の充実を図る。
３．学生一人一人の意欲や学力等に応じた学修体系を検討する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．チューター面談やオフィスアワーの充実、学生相談室との連携を通し、多角的に学生理解を進め、重層的なサポートを目指す。
２．保育現場での実践を意識した授業内容や保育現場と連携した授業内容を工夫する。
３．学生の求める学びや各々の学力に応じた授業内容を模索し、カリキュラムへの反映を図る。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
特別な配慮が必要な学生、学修及び生活態度に問題のある学生や家庭環境に悩みを抱えた学生等に対して、定例のチューター面談に加え、こまめに面談を行った。面談内容は教員間のみならず、事務局職員や寮監とも共有を図り、教職員全体で指導・支援の方法や機会を協議し合いながら対応することができた。結果、2名の卒業延期、7名の退学、2名の休学となったが、学生それぞれの意思を尊重しながら、前向きに新たな進路を決定する支援を行うことができた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
演習の授業においては、学外実習で即活用できる保育技術の習得や、保育の構想から実践までグループで取り組む活動など、実践的な内容を多く取り入れた授業内容を各教員で工夫した。さらに、講義形態の授業では、現代社会における保育・子育てについての課題を取り扱った動画視聴や食品無料提供ボランティアへの参加呼びかけ、そして保育現場で発生した事件・事故について授業内容に取り入れた。これにより、保育職の専門性の高さや幅広さも理解することにつながり、2年次のゼミナールにおける保育施設の見学や現職保育者への調査などの主体的な学びに発展していると思われる。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
時間割のスリム化が行われ、学生が求める保育実践力を身に付けられる授業をカリキュラムに組み込んだ。昨年度に続き取り入れた「保育と音楽表現【ピアノ初心者向け】」の授業では、年度当初1年生の40%である36名が受講を申し込み、自信持てるまで受講を続けていた。「ダンスセラピー論」では、1年生の66%に当たる57名が受講し、うち55名がダンスセラピー・リーダー資格を取得した。また、学外実習も見直しを行い、事前学習の効率化と、学生の学外実習に対する意識づけを早い段階から図るため、1年次から保育施設長講演会を年に1回ずつ行うことにした。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．特別な配慮を必要とする学生、課題を抱えた学生等、一人一人への対応を丁寧に行い、学生に応じた学びや就職支援を行う。

２．保育実践力向上に向けた授業内容の改善を継続する。

３．学生の「学ぶ意欲」を高めるゼミナールの運営・活動の在り方を模索する。

４．学外実習の事前・事後指導の見直しを継続し、学外実習に係る学修内容を整理する。

令和４年度 幼児教育学科 年次報告

Plan 計画

1．心身面、経済面及び学習面で配慮や支援が必要な学生に対し学科全体で丁寧に対応する。
2．本学幼児教育学科の強みとして実技系科目の一層の充実を図る。
3．学生一人一人の意欲や学力等に応じた学修体系を検討する。

Do 実行

1．チューター面談やオフィスアワーの充実学生相談室との連携を通し、多角的に学生理解を進め、重層的なサポートを目指す。
2．保育現場での実践を意識した授業内容や保育現場と連携した授業内容を工夫する。
3．学生の求める学びや各々の学力に応じた授業内容を模索し、カリキュラムへの反映を図る。

Check 検証

1．チューター面談に加えこまめに面談を行った。面談内容は教員、事務局職員や寮監とも共有を図り、教職員全体で指導・支援の方法や機会を協議し合いながら対応し、前向きに新たな進路を見つける支援ができた。
2. 演習の授業は、実践的な内容を多く取り入れた授業内容を各教員で工夫した。さらに、講義形態の授業では、保育・子育てについての課題を取り扱った動画視聴や食品無料提供ボランティアへの参加呼びかけ、そして保育現場で発生した事件・事故について授業内容に取り入れた。これにより、保育職の専門性の高さや幅広さも理解することにつながったと思われる。
3．「保育と音楽表現【ピアノ初心者向け】」の授業では、年度当初1年生36名が受講した。「ダンスセラピー論」では、1年生57名が受講し、うち55名がダンスセラピー・リーダー資格を取得した。また、学外実習も見直しを行い、事前学習の効率化と、学生の学外実習に対する意識づけを図った。

Act 改善

1．特別な配慮を必要とする学生、課題を抱えた学生等、一人一人への対応を丁寧に行い学生に応じた学びや就職支援を行う。
2．保育実践力向上に向けた授業内容の改善を継続する。
3． 学生の「学ぶ意欲」を高めるゼミナールの運営・活動の在り方を模索する。
4．学外実習の事前・事後指導の見直しを継続し、学外実習に係る学修内容を整理する。

令和４年度　「学生部」年次報告書
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）
氏名：織田　芳人（学生部長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．学生支援委員会と緊密に情報共有をしながら、区切りとなる時期の委員会に出席して、可能な範囲の限りで意見を述べ、円滑な運営に協力する。 ２．障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営に努める。 ３．学生指導委員会と情報共有をしながら、円滑な運営に協力する。
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．学生支援委員会の中心的業務であるスポーツフェスタや弥生祭等の円滑な運営に協力していく。 ２．障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしていく。 ３．学生指導委員会と情報共有をしていく。
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」 学生支援委員会と情報共有をしながら、可能な範囲で円滑な運営に協力した。 ２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 障がい学生支援委員会の運営を円滑に行った。 ３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学生指導委員会として、学生指導の事案に適切に対処した。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．学生支援委員会と情報共有をしながら、可能な範囲で円滑な運営に協力する。 ２．障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営を行う。 ３．学生指導魚委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営を行う。

令和４年度 学生部 年次報告

Plan 計画

１．学生支援委員会と緊密に情報共有をしながら、区切りとなる時期の委員会に出席して、可能な範囲の限りで意見を述べ、円滑な運営に協力する。

２．障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営に努める。

３．学生指導委員会と情報共有をしながら、円滑な運営に協力する。

Do 実行

１．学生支援委員会の中心的業務であるスポーツフェスタや弥生祭等の円滑な運営に協力していく。

２．障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしていく。

３．学生指導委員会と情報共有をしていく。

Check 検証

１．学生支援委員会と情報共有をしながら、可能な範囲で円滑な運営に協力した。

２．障がい学生支援委員会の運営を円滑に行った。

３．学生指導委員会として、学生指導の事案に適切に対処した。

Act 改善

１．学生支援委員会と情報共有をしながら、可能な範囲で円滑な運営に協力する。

２．障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営を行う。

３．学生指導委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営を行う。

令和４年度　「図書館」年次報告書

区分：　学科専攻　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：森　弘行（図書館長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 学術機関リポジトリの整備

2. 新型コロナウイルス感染症への対策を行いつつ、図書館利用の活性化を図る

3. 書庫狭隘化対策

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. JAIRO Cloud の WEKO3 への移行が予定より遅れており、WEKO3 稼働を確認後、導入を進めるとともに、試行的に紀要の登録を行い、問題点等を確認する。

2. 換気や除菌など新型コロナウイルス感染症への対策を徹底する
   マスコットキャラクター、ライブラリーラバーズ、図書館ブログ等の活用

3. 電子書籍の導入、未活用洋書などの除籍

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
   （ア）WEKO3 のサービス提供が度々延期され、令和 5 年 11 月以降になる見通し。

2. 自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
   （ア）ライブラリーラバーズへの参加など、イベント開催を行う
   （イ）引き続き 新型コロナ感染症の対策を実施
   （ウ）入館者数（前年比 148%）、貸し出し数（前年比 104%）が増加

3. 自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
   （ア）学内の Wi-Fi 環境が整ったことから電子書籍サービス d マガジン for BIZ を正式導入。
   （イ）未活用蔵書 75 冊を除籍。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 学術機関リポジトリの整備
   （ア）JAIRO Cloud の WEKO3 導入準備

2. 図書館利用の活性化
   （ア）お話会などの企画
   （イ）授業での図書館利用支援

3. 図書館サービスの拡充
   （ア）図書館閉館時の返却ボックスの設置
   （イ）未利用蔵書の除籍

令和４年度 図書館 年次報告

Plan 計画

1. 学術機関リポジトリの整備

2. 新型コロナウイルス感染症への対策を行いつつ、図書館利用の活性化を図る

3. 書庫狭隘化対策

Do 実行

1. JAIRO CloudのWEKO3への移行が予定より遅れており、WEKO3稼働を確認後、導入を進めるとともに、試行的に紀要の登録を行い、問題点等を確認する
2. 換気や除菌など新型コロナウイルス感染症への対策を徹底する
   マスコットキャラクター、ライブラリーラバーズ、図書館ブログ等の活用
3. 電子書籍の導入、未活用洋書などの除籍

Check 検証

1. WEKO3のサービス提供が度々延期され、令和5年11月以降になる見通し

2. ライブラリーラバーズへの参加など、イベントを開催
   引き続き 新型コロナ感染症の対策を実施
   入館者数（前年比148%）、貸し出し数（前年比104%）が増加

3. 学内のWi-Fi環境が整ったことから電子書籍サービスdマガジン for BIZを正式導入
   未活用蔵書75冊を除籍

Act 改善

1. 学術機関リポジトリの整備
   - JAIRO CloudのWEKO3導入準備

2. 図書館利用の活性化
   - お話会などの企画
   - 授業での図書館利用支援

3. 図書館サービスの拡充
   - 図書館閉館時の返却ボックスの設置
   - 未利用蔵書の除籍

令和４年度　「自己点検評価室」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：武藤　玲路（室長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．評価項目と評価基準の見直しについて
①学修成果の評価項目や評価基準のルーブリックを含む具体的なアセスメントプラン（評価計画）を完成する。全科目について、学務システム上のシラバスに評価の観点と尺度、基準を示すルーブリックを掲載する。
②また、改定した評価項目・評価基準とルーブリックについて、年度末のＦＤ研修会で、意見交換をする。
③一人の受験生が本学に興味を持った瞬間から「志願―合格―入学―在学―卒業―同窓」までを、各種調査等のＩＲデータに基づいて一貫してサポートする「エンロールメント・マネジメント体制」の構築について、教務委員会およびＩＲ推進室と連携して検討する。

２．今年度の本学の教学マネジメント体制や学修成果、学生満足度について、外部評価委員の評価を受ける。

３．今年度の本学の部署別・個人別の総括資料として、「自己点検・評価の年次報告書」を作成・配付する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．評価項目と評価基準の見直しについて
①全学的なアセスメントプラン（評価計画）を作成し、学修成果の評価項目を１０項目に改定した。また、全科目のシラバスに、評価項目ごとの到達目標、評価項目別・評価方法別の配点比率、５段階評価のルーブリックを掲載した。これらの評価基準は、すべて学務システム上で入力・閲覧できるようバージョンアップした。
②また、改定した評価項目・評価基準とルーブリックについて、年度末のＦＤ研修会で、意見交換をした。
③エンロールメント・マネジメント体制の構築について、教務委員会およびＩＲ推進室と連携して検討した。

２．外部評価委員会を開催し、本学の教育研究活動の入口・中味・出口の成果と課題について評価を受けた。

３．今年度の本学の部署別・個人別の総括資料として「年次報告書」を作成し、学内の全教職員に配付した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
①全科目の評価項目と評価基準のルーブリックをシラバスに掲載し、②ＦＤ研修会で意見交換をした。
③エンロールメント・マネジメント体制とアセスメント BOOK の構想について、本学の紀要に掲載した。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
産学官を代表する４名の外部評価委員の方々を招いて、主に募集活動・教育支援・就職支援について、今年度の成果の賞賛と課題の改善に関する多くの貴重な意見をいただいた。

３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
全部署と全教職員の「年次報告書」を年度内に作成し、次年度の４月上旬に全教職員に配付する準備ができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．評価項目と評価基準のルーブリックとエンロールメント・マネジメント体制について、継続して検討したい。

２．今後は、外部評価委員会の配付資料について、成果検証が明確となるような可視化データを作成したい。

３．今後も継続して自己点検・評価の PDCA 報告書を作成し、新たに認証評価の簡易報告書を作成したい。

令和４年度 自己点検評価室 年次報告

Plan 計画

１．評価項目と評価基準の見直しについて
①学修成果の評価項目や評価基準のルーブリックを含む具体的なアセスメントプラン（評価計画）を完成する。全科目について、学務システム上のシラバスに評価の観点と尺度、基準を示すルーブリックを掲載する。
②また、改定した評価項目・評価基準とルーブリックについて、年度末のＦＤ研修会で、意見交換をする。
③一人の受験生が本学に興味を持った瞬間から「志願―合格―入学―在学―卒業―同窓」までを、各種調査等のＩＲデータに基づいて一貫してサポートする「エンロールメント・マネジメント体制」の構築について、教務委員会およびＩＲ推進室と連携して検討する。
２．今年度の本学の教学マネジメント体制や学修成果、学生満足度について、外部評価委員の評価を受ける。
３．今年度の本学の部署別・個人別の総括資料として、「自己点検・評価の年次報告書」を作成・配付する。

Do 実行

１．評価項目と評価基準の見直しについて
①全学的なアセスメントプラン（評価計画）を作成し、学修成果の評価項目を１０項目に改定した。また、全科目のシラバスに、評価項目ごとの到達目標、評価項目別・評価方法別の配点比率、５段階評価のルーブリックを掲載した。これらの評価基準は、すべて学務システム上で入力・閲覧できるようバージョンアップした。
②また、改定した評価項目・評価基準とルーブリックについて、年度末のＦＤ研修会で、意見交換をした。
③エンロールメント・マネジメント体制の構築について、教務委員会およびＩＲ推進室と連携して検討した。
２．外部評価委員会を開催し、本学の教育研究活動の入口・中味・出口の成果と課題について評価を受けた。
３．今年度の本学の部署別・個人別の総括資料として「年次報告書」を作成し、学内の全教職員に配付した。

Act 改善

１．評価項目と評価基準のルーブリックとエンロールメント・マネジメント体制について、継続して検討したい。

２．今後は、外部評価委員会の配付資料について、成果検証が明確となるような可視化データを作成したい。

３．今後も継続して自己点検・評価のPDCA報告書を作成し、新たに認証評価の簡易報告書を作成したい。

Check 検証

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
①全科目の評価項目と評価基準のルーブリックをシラバスに掲載し、②ＦＤ研修会で意見交換をした。
③エンロールメント・マネジメント体制とアセスメントBOOKの構想について、本学の紀要に掲載した。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
産学官を代表する４名の外部評価委員の方々を招いて、主に募集活動・教育支援・就職支援について、今年度の成果の賞賛と課題の改善に関する多くの貴重な意見をいただいた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
全部署と全教職員の「年次報告書」を年度内に作成し、次年度の４月上旬に全教職員に配付する準備ができた。

令和４年度　「入試広報室・入試委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：髙井　達司（室長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．昨年度に引き続き「大学入学共通テスト利用選抜」における志願実績の確保（20 名目標）及び歩留り 3 割を目標とする。
２．今後 2 年間は本県 18 歳人口が大きく減少していく中で、短大・専門学校と同様に、四年制大学においても志願者囲い込みに追随していくことが想像される。早期入試における志願者の囲い込みを図るためにも、長崎女子高校との連携強化に最善を尽くす。
３．進学説明会への積極参加を継続するとともに、対面接触した生徒の歩留まり（志願率）を向上させる。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．県内外高校は元より、広く九州管内への募集告知を徹底して実施する。検定料を他学に比べ大きく引き下げたたことで受験生の負担軽減を、また入学動機を促すため、合格者に対し小島奨学金 C 免除採択を明確に示した。
２．長崎女子高校の 3 年生本学志願希望者は、年度当初において 37 名を数える（本年入学 22 名）。この数値を減少させないとともに、志願希望者の少ない 2 年生への対策を、高大連携講座を通じて実施する。
３．本学の募集活動上、本説明会の影響は想像を越えて大きい。特に長崎短大、長崎こども医療専門学校との競合地区となる県央地区への資金投資は原則惜しまないものとする。対面接触した 3 年生徒の志願率は比較的高いので、これまで以上に生徒との信頼関係を深めるよう努めたい。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
受験料を大幅に減額したにも関わらず、志願者数は４名に終わった。県内各高等学校に対し共通テスト周知の呼びかけを行ったにもかかわらず実績を上げられなかったことは誤算であった。
然しながら一般選抜志願者が遂に皆無となったことを考えれば、これへの積極的な取組みは今後も必要である。また志願者のうち入学手続き者は 2 名であった。
２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
長崎女子高の出願者は、当初予定通り 37 名であった。当初よりこれが減ずることの無いよう当校進路指導部との連絡を重ねてきたことが奏功した。また在籍数の少ない 2 年生に対しては、2 回の体験学習を通じ魅力ある楽しい授業内容の実施を各コースに要請した。このこともあり、特に栄養士コースは志願者の増加が顕著であった。
３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
本年度、会場型 29 箇所、校内型 60 校の説明会へ参加した。県北地区を除き殆どの説明会へ参加したが、何れの会にも、長崎短大と長崎こども医療専門校は参加していた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．本選抜の利用者は、一定の基礎学力を有していることから一人でも多くの入学者確保に期待したい。今般 2 名が入学手続きに繋がったが、次年度の歩留まり向上に向け、一歩踏み込んだ施策が求められる。
次年度も継続して、志願者数の確保（20 名目標）及び歩留り 3 割を目標とする。
２．現 2 年生は在籍数の少ない学年であることから、これまで以上に進路指導部、学年主任との情報交換に努めたい。
３．事務局長との兼務となることで、次年度以降は本年度並みの参加は難しくなる。募集広報委員への協力要請を行いたい。

令和４年度 入試広報室・入試委員会 年次報告

Plan 計画

1．昨年度に引き続き「大学入学共通テスト利用選抜」における志願実績の確保（20名目標）及び歩留り3割を目標とする。
2．今後2年間は本県18歳人口が大きく減少していく中で、短大・専門学校と同様に、四年制大学においても志願者囲い込みに追随していくことが想像される。早期入試における志願者の囲い込みを図るためにも、長崎女子高校との連携強化に最善を尽くす。これにより、前年同時期における志願者数の上積みを達成する。
3．進学説明会への積極参加を継続するとともに、対面接触した生徒の歩留まり（志願率）を向上させる。

Do 実行

1．県内外高校は元より、広く九州管内への募集告知を徹底して実施する。検定料を他学に比べ大きく引き下げたたことで受験生の負担軽減を、また、小島奨学金制度の紐づけを明確に示すことで、出願への動機を促す。
2．長崎女子高校の3年生本学志願希望者は、年度当初において37名を数える（本年入学22名）。この数値を減少させないとともに、志願希望者の少ない2年生への対策を、高大連携講座を通じて実施する。
3．本学の募集広報活動上、本説明会の影響は想像を越えて大きい。特に長崎短大との競合地区となる県央地区への投資は原則惜しまないものとする。対面接触した3年生徒の志願率は比較的高いので、これまで以上に信頼関係を深めるよう努めたい。

Check 検証

1．受験料を大幅に減額したにも関わらず、志願者数は４名に終わった。県内各高等学校に対し共通テスト周知の呼びかけを行ったにもかかわらず実績を上げられなかったことは誤算であった。
然しながら一般選抜志願者が遂に皆無となったことを考えれば、これへの積極的な取組みは今後も必要である。また志願者のうち入学手続き者は2名であった。
2．長崎女子高の出願者は、当初予定通り37名であった。当初よりこれが減ずることの無いよう当校進路指導部との連絡を重ねてきたことが奏功した。また在籍数の少ない2年生に対しては、2回の体験学習を通じ魅力ある楽しい授業内容の実施を各コースに要請した。このこともあり、特に栄養士コースは志願者の増加が顕著であった。
3．本年度、会場型29箇所、校内型60校の説明会へ参加した。県北地区を除き殆どの説明会へ参加したが、何れの会にも、長崎短大と長崎こども医療専門校は参加していた。

Act 改善

1．本選抜の利用者は、一定の基礎学力を有していることから一人でも多くの入学者確保に期待したい。今般2名が入学手続きに繋がったが、次年度の歩留まり向上に向け、一歩踏み込んだ施策が求められる。
次年度も継続して、志願者数の確保（20名目標）及び歩留り3割を目標とする。
2．現2年生は在籍数の少ない学年であることから、これまで以上に進路指導部、学年主任との情報交換に努めたい。
3．事務局長との兼務となることで、次年度以降は本年度並みの参加は難しくなる。募集広報委員への協力要請を行いたい。

令和４年度　「キャリア支援センター」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：原田　実輝（センター長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．最終就職率100％を目指して就職支援を行う。

２．令和２年度入学生を対象に、就職先調査を実施する。

３．キャリア支援体制の見直しを図り、学生一人一人に寄り添った丁寧な支援を行い、学生の満足度向上に努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．就職ガイダンス等を通じて早めに行動するように促して全体的な流れを作ると共に、動きの遅い学生に対しては学科担当者と情報共有し、見守りながら適切なタイミングで支援する。

２．前回調査時の改善点に対しキャリア支援委員会で検討を重ねて実施する。

３．キャリア支援センターと各学科・コースのキャリア委員との役割・業務分担を見直し、効果的な支援体制を構築する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

3月1日現在の全体の内定率は93.0％で、昨年同期比3.9ポイント減である。未内定者は9名。
今年度は特に本人の希望が2月の時点でも不明確で、何度話をしても本人達には全く響いている気配がなく、支援に苦慮する事が多かった。本人たちのやる気のスイッチを見逃さず、引き続き未内定者9名の就職先が決まるよう支援していく。

２．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

余裕を持って準備に当たることはできなかったが、目標としていた1月中に97件162名を対象に調査票を発送することができた。今年度までは前回同様6項目による評価とし、1年目の職員としての評価をして頂くよう注釈をつけた。2月末現在の回答率は56％である。回収した評価を基に各学科・コースで検討し、改善につなげていきたい。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

卒業時調査による就職支援に対する学生の満足度は全体で5段階評価中4.1ポイントであった。今年度は学科・コースによるばらつきがなく、特にＬの「満足」と回答した学生の割合が倍増した。（17.4％→33.3％）
キャリア支援センターと各学科・コースとの連携支援、全教職員で学生の就職を全力で支援するという観点からは上手く連携できていたとは言い難い状況であった。業務分担が曖昧なまま今まで進めてきたので、再度きちんと見直しを図り、効果的な支援体制を構築していきたい。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．最終就職率100％を目指して就職支援を行う。

２．学生一人一人に寄り添った丁寧な支援を行い、学生の満足度向上に努める。

３．キャリア支援体制の見直しを図り、重層的で効果的な支援体制を構築する。

令和４年度 キャリア支援 年次報告

Plan　計画

1. 最終就職率100％を目指して就職支援を行う。
2. 令和2年度入学生を対象に、就職先調査を実施する。
3. キャリア支援体制の見直しを図り、学生一人一人に寄り添った丁寧な支援を行い、学生の満足度向上に努める。

Do　実行

1. 就職ガイダンスを通じて早めに行動するように促して全体的な流れを作ると共に、動きの遅い学生対しては学科・コース担当者と情報を共有し、見守りながら適切なタイミングで支援する。
2. 前回調査時の改善点に対し早めにキャリア支援委員会で検討を重ねて実施する。
3. キャリアセンターと各学科・コースのキャリア委員との役割、業務分担を見直し、効果的な支援体制を再構築する。

Check　検証

1.3月1日現在の内定率は93.0％で昨年比3.9ポイント減。未内定者は9名。今年度は本人の意思が不明確で、支援に苦慮するケースが多かった。

2.97事業所162名の卒業生を対象に調査票を発送し、2月末現在の回答率は56％であった。得られた回答を今後の支援に活かしていきたい。

3.卒業時調査による就職支援に対する学生の満足度は4.1ポイントであった。今年度は学科・コースのばらつきがなく、特にLの満足度の割合が増加した。　各学科・コースとの連携、全員での支援体制を強化し、学生への支援漏れがないよう丁寧な支援を強化していきたい。

Act　改善

1.最終就職率100％を目指して就職支援を行う。

2.学生一人一人に寄り添った丁寧な支援を行い、学生の満足度の向上に努める。特に就活に消極的な学生への支援法を検討する。

3.引き続きキャリア支援体制の見直しを図り、ガイダンスの時期、内容を検討して効果的な支援体制を構築する。

令和４年度　「ＦＤ・ＳＤ委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：武藤　玲路（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．夏季の FD 研修会で「アクティブラーニングの効果的な実践法」をテーマとした研修会を実施する。

２．夏季の SD 研修会で「特色と魅力のある短大にするための提案」をテーマとした研修会を実施する。

３．春季の FD 研修会で、新たに考案した「10 の力とルーブリック」をテーマとした研修会を実施する。

４．春季の SD 研修会で「部署別年次報告会による情報共有と相互支援」をテーマとした研修会を実施する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．夏季の FD 研修会で、栄養士コースによるアクティブラーニングの実践法について、研修会を実施した。

２．夏季の SD 研修会で「特色と魅力のある短大にするための提案」について、多種多様な方策案を議論した。

３．春季の FD 研修会で、「10 の力とルーブリック」について、作成したシラバスを持ち寄って意見交換した。

４．春季の SD 研修会で「部署別年次報告会による本学の特色と強み」について、具体的な報告がなされた。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 S・A・B・C・D 」
栄養士コースの太田准教授によるアクティブラーニングの講習会を開催し、文科省が提唱するアクティブラーニングの趣旨と具体的な実践法について、多彩な根拠資料に基づいて説明があり、有用性が高い研修となった。

２．自己評価「 S・A・B・C・D 」
学生募集の戦略会議をワールドカフェ形式で実施し、参加者全員の意見を集約して、対応策を多数提案した。しかしながら、その提案を具体的に検討する組織体制や作業工程が確立していないため実現には課題が残る。

３．自己評価「 S・A・B・C・D 」
各学科・コースで、全科目のシラバスに掲載されている評価項目と基準を見直し、成果と課題を見出した。

４．自己評価「 S・A・B・C・D 」
主要な部署の成果と課題と改善点を把握でき、他の部署や教職員個人の改善計画や行動計画の参考になった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．今後もアクティブラーニングについて、学科・コースのローテーションで継続的に研修会を実施したい。

２．今後も全学的な問題について、ワールドカフェ形式で多くの教職員と自由に情報や意見の交換をしたい。

３．今後も多くの先進事例を参考にして、本学独自の評価基準を構築し、学生の学習支援を促進していきたい。

４．各部署の年次報告の後に、本学の特色ある教育や校風、事業、イベントなどについて、討論していきたい。

５．多くの教職員が外部の FD・SD の研修会やセミナーに積極的に参加して、最新の情報を共有していきたい。

令和４年度 ＦＤ・ＳＤ委員会 年次報告

Plan 計画

1．夏季のFD研修会で「アクティブラーニングの効果的な実践法」をテーマとした研修会を実施する。

2．夏季のSD研修会で「特色と魅力のある短大にするための提案」をテーマとした研修会を実施する。

3．春季のFD研修会で、新たに考案した「10の力とルーブリック」をテーマとした研修会を実施する。

4．春季のSD研修会で「部署別年次報告会による情報共有と相互支援」をテーマとした研修会を実施する。

Do 実行

1．夏季のFD研修会で、栄養士コースによるアクティブラーニングの実践法について、研修会を実施した。

2．夏季のSD研修会で「特色と魅力のある短大にするための提案」について、多種多様な方策案を議論した。

3．春季のFD研修会で、「10の力とルーブリック」について、作成したシラバスを持ち寄って意見交換した。

4．春季のSD研修会で「部署別年次報告会による本学の特色と強み」について、具体的な報告がなされた。

Check 検証

1．自己評価「 **S**・A・B・C・D 」
栄養士コースの太田准教授によるアクティブラーニングの講習会を開催し、文科省が提唱するアクティブラーニングの趣旨と具体的な実践法について、多彩な根拠資料に基づいて説明があり、有用性が高い研修となった。

2．自己評価「 S・A・B・**C**・D 」
学生募集の戦略会議をワールドカフェ形式で実施し、参加者全員の意見を集約して、対応策を多数提案した。
しかしながら、その提案を具体的に検討する組織体制や作業工程が確立していないため実現には課題が残る。

3．自己評価「 S・**A**・B・C・D 」
各学科・コースで、全科目のシラバスに掲載されている評価項目と基準を見直し、成果と課題を見出した。

4．自己評価「 S・**A**・B・C・D 」
主要な部署の成果と課題と改善点を把握でき、他の部署や教職員個人の改善計画や行動計画の参考になった。

Act 改善

1．今後もアクティブラーニングについて、学科・コースのローテーションで継続的に研修会を実施したい。

2．今後も全学的な問題について、ワールドカフェ形式で多くの教職員と自由に情報や意見の交換をしたい。

3．今後も多くの先進事例を参考にして、本学独自の評価基準を構築し、学生の学習支援を促進していきたい。

4．各部署の年次報告の後に、本学の特色ある教育や校風、事業、イベントなどについて、討論していきたい。

5．多くの教職員が外部のFD・SDの研修会やセミナーに積極的に参加して、最新の情報を共有していきたい。

令和４年度　「ＩＲ推進室」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　IR 推進室　）

氏名：森　弘行（室長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1.　学修成果の評価、カリキュラムスト、学修成果の可視化について検討する。

2.　各種調査の実施、分析と公表。

3.　学務システムの効果的な活用法を検討し、業務の改善を図る。

4.　IR に関する環境整備の推進。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

1.　他大学の取組等を参考にしながら、教務委員会と連携してルーブリック、学修ポートフォリオの構築を図る。

2.　社会人基礎力調査、卒業生調査、授業アンケートなどの分析し、活用する。

3.　学務システムに実装されている面談記録、高校訪問記録、連絡事項管理機能などを活用し学内業務の改善を図る。

4.　Wi-Fi 環境など IR に関する環境整備を行う。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1.自己評価「S・[A]・B・C・D 」
R5 年度入学生向け、教務委員会とともに 10 項目の学修成果、評価方法、評価基準を示したルーブリックを策定。学修ポートフォリオの構築については継続。

2.自己評価「S・[A]・B・C・D 」
自己点検評価、FD 研修会資料として提供。

3.自己評価「S・[A]・B・C・D 」
連絡事項管理機能を Google Class Room のメールへ移行。
学生情報データベースに面談日の一覧表示機能を追加。

4.自己評価「S・[A]・B・C・D 」
体育館を除く校舎のほぼ全域で Wi-Fi 環境整備完了。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1．学修成果の可視化、学修ポートフォリオの検討

2．各種調査データの統合、クレンジングおよび分析。

3．アセスメント NOTE・BOOK の検討。

令和４年度 IR推進室 年次報告

Plan 計画

1. 学修成果の評価、カリキュラムスト、学修成果の可視化について検討する。
2. 各種調査の実施、分析と公表。
3. 学務システムの効果的な活用法を検討し、業務の改善を図る。
4. IRに関する環境整備の推進。

Do 実行

1. 他大学の取組等を参考にしながら、教務委員会と連携してルーブリック、学修ポートフォリオの構築を図る。
2. 社会人基礎力調査、卒業生調査、授業アンケートなどの分析し、活用する。
3. 学務システムに実装されている面談記録、高校訪問記録、連絡事項管理機能などを活用し学内業務の改善を図る。
4. Wi-Fi環境などIRに関する環境整備を行う。

Check 検証

1. R5年度入学生向け、教務委員会とともに10項目の学修成果、評価方法、評価基準を示したルーブリックを策定。学修ポートフォリオの構築については継続。
2. 自己点検評価、FD研修会資料として提供
3. 連絡事項管理機能をGoogle Class Roomのメールへ移行。
   学生情報データベースに面談日の一覧表示機能を追加。
4. 体育館を除く校舎のほぼ全域でWi-Fi環境整備完了。

Act 改善

1. 学修成果の可視化、学修ポートフォリオの検討。
2. 各種調査データの統合、クレンジングおよび分析。
3. アセスメントNOTE・BOOKの検討。

令和４年度　「教務委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：桑原　真美（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．学務システムの連絡事項管理機能が、現在、教職員からの通知だけに限定されていて、学生からの連絡を受け取れないので、Google 提供の通知システムも検討する。
２．基礎科目の韓国語と中国語について検討し、必要に応じて見直しを行う。「基礎科目」という呼称の検討も含めて、基礎科目全体の確認及び見直しを行う。
３．カレッジ・ライフに記載されている教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）について、IR 推進室と連携協力して、令和５年度へ向けて、改訂を検討する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．Google Workspace の導入による新たな学習支援の在り方を検討する。また、学務システムについて、令和５年度導入予定のアセスメントプランの策定に伴う改修を含めて、適宜 IR 推進室と連携の上、開発に取り組む。
２．基礎科目の必要性について検討の上、開設科目の整理を行う。また、基礎科目の科目区分上の名称についても併せて検討する。
３．IR 推進室と協力して、現行のカリキュラム・ポリシーに定める科目領域と実際の教育課程における科目領域との整合性を図る。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1.自己評価「S・A・B・C・D 」
Google Workspace の導入により教職員および学生のアカウントを作成することでメールでの連絡を相互に行うことができるようになった。学務システムにおいては、令和５年度導入予定のアセスメントプランに伴う改修を実施済みである。

2.自己評価「S・A・B・C・D 」
令和５年度の基礎科目については名称を「教養科目」に変更した。また、教養科目のうちこれまで通年２単位であった語学系の科目を 15 回１単位、15 回２単位であった講義科目を一部８回１単位に変更し、学生の科目選択の幅を広げるための整備を実施した。中国語、韓国語については令和５年度も開講予定となった。

3.自己評価「S・A・B・C・D 」
カリキュラム・ポリシーに定める科目領域と実際の教育課程における科目領域については名称を揃える等の改訂を行った。その他、学則変更に伴う規程の整備も実施した。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1．Google Workspace についてメール機能は十分に活用しているが、使われていない機能も多い。IR 推進室で検討中のポートフォリオの整備において有効活用ができる可能性もあることから、積極的な利用を推進する。また、学務システムにおいては引き続き整備を行うとともに IR 推進室と連携して機能の追加・改修を実施したい。

2．令和５年度より教養科目の単位数および時間数の変更等を行っている。科目選択の幅が広がったことによる学生への影響や時間割の圧迫具合など、実際に運用しての評価を行う。また、中国語については令和５年度の受講者数を踏まえて見直しを行う。

3．今後も必要に応じて、学則、規程の改訂を検討する。また、次年度は成績評価の異議申し立てに関する制度についても検討を行う。

令和４年度 教務委員会 年次報告

Plan 計画

１．学務システムの連絡事項管理機能が、現在、教職員からの通知だけに限定されていて、学生からの連絡を受け取れないので、Google提供の通知システムも検討する。

２．基礎科目の韓国語と中国語について検討し、必要に応じて見直しを行う。「基礎科目」という呼称の検討も含めて、基礎科目全体の確認及び見直しを行う。

３．カレッジ・ライフに記載されている教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）について、IR推進室と連携協力して、令和5年度へ向けて改訂を検討する。

Do 実行

１．Google Workspaceの導入による新たな学習支援の在り方を検討する。また、学務システムについて、令和５年度導入予定のアセスメントプランの策定に伴う改修を含めて、適宜IR推進室と連携の上、開発に取り組む。

２．基礎科目の必要性について検討の上、開設科目の整理を行う。また、基礎科目の科目区分上の名称についても併せて検討する。

３．IR推進室と協力して、現行のカリキュラム・ポリシーに定める科目領域と実際の教育課程における科目領域との整合性を図る。

Check 検証

１．Google Workspaceの導入により教職員および学生のアカウントを作成することでメールでの連絡を相互に行うことができるようになった。学務システムにおいては、令和5年度導入予定のアセスメントプランに伴う改修を実施済みである。

２．令和5年度より「基礎科目」の名称を「教養科目」に変更した。また、教養科目のうちこれまで通年2単位であった語学系の科目を15回1単位、15回2単位であった講義科目を一部8回1単位に変更する等、学生の科目選択の幅を広げるための整備を実施した。中国語、韓国語については令和5年度も開講する。

３．カリキュラム・ポリシーに定める科目領域と実際の教育課程における科目領域については名称を揃える等の改訂を行った。その他、学則および規程の整備も実施した。

Act 改善

１．Google Workspaceについてメール機能は十分に活用しているが、使われていない機能も多い。IR推進室で検討中のポートフォリオの整備において有効活用ができる可能性もあることから、積極的な利用を推進する。また、学務システムにおいては引き続き整備を行うとともにIR推進室と連携して機能の追加・改修を実施したい。

２．令和5年度より教養科目の単位数および時間数の変更等を行っている。科目選択の幅が広がったことによる学生への影響や時間割の圧迫具合など、実際に運用しての評価を行う。また、中国語については令和5年度の受講者数を踏まえて見直しを行う。

３．今後も必要に応じて、学則、規程の改訂を検討する。また、次年度は成績評価の異議申し立てに関する制度についても検討を行う。

令和４年度　「教職課程委員会」年次報告書
区分：　学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）
氏名：本村　弥寿子（委員長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．保育者養成に係る新カリキュラムの教育効果について、評価・改善を図る。 ２．　関係省庁等からの通知・連絡への対応の迅速化を図る。 ３．関係省庁等が主催する説明会や研修会へ積極的に参加する。
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．　学生の授業への取り組み状況や成績、授業評価アンケート等により、授業の評価・改善に取り組む。 ２．　関係省庁や県のホームページ、通知等に目を通し、関係教員・職員で速やかに対応を図る。 ３．全国保育者養成協議会開催の研修会や説明会、保育学会等に参加し、得た情報を教職員間で共有する。
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 全ての学生が無理や負担なく単位取得を目指せるよう、時間割をスリム化し授業を進めた。しかし、今年度は卒業延期者２名、退学者８名、休学者１名という結果となった。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 各領域の指導法の授業内容に情報通信技術の活用を含めることについて、昨年度教員間で情報共有がなされ、現在、各教員で授業内容を模索しているところである。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 各教員が専門及び担当分野についての説明会や研修会に進んで参加した。事後の教員間の共有は十分ではなかった。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．新カリキュラムでの学生の実態を成績やアンケートで把握し、学生が無理や負担なく単位取得できるよう授業内容の工夫に活かす。 ２．関係省庁等からの通知・連絡に速やかに対応する。 ３．関係省庁等が主催する説明会・研修会に参加し、教職員間で共有を図る。

令和４年度 教職課程委員会 年次報告

Plan 計画

１．保育士養成に係る新カリキュラムの教育効果について、評価・改善を図る。
２． 関係省庁からの通知・連絡への対応の迅速化を図る。
３．関係省庁が主催する説明会や研修会へ積極的に参加する。.

Do 実行

１．学生の授業への取り組み状況や成績、授業評価アンケート等により、授業の評価・改善に取り組む。
２． 関係省庁等や県のホームページ、通知等に目を通し、関係教員・職員で速やかに対応を図る。
３．全国保育者養成協議会開催の研修会や説明会、保育学会等に参加し、得た情報を教職員間で共有する。

Check 検証

1. 全ての学生が無理や負担なく単位取得を目指せるよう、時間割をスリム化し授業を進めた。しかし、今年度は卒業延期者2名、退学者8名、休学者1名という結果となった。
2. 各領域の指導法の授業内容に情報通信技術の活用を含めることついて、昨年度教員間で情報共有がなされ、現在、各教員で授業内容を模索しているところである。
3. 各教員が専門及び担当分野についての説明会や研修会に進んで参加した。事後の教員間の共有は十分ではなかった。

Act 改善

1. 新カリキュラムでの学生の実態を成績やアンケートで把握し、学生が無理や負担なく単位取得できるよう授業内容の工夫に活かす。

2.関係省庁等からの通知・連絡に速やかに対応する。

3．関係省庁等が主催する説明会・研修会に参加し、教職員間で共有を図る。

令和４年度　「教育ＳＳ運営委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：太田　美代（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．教育サポートスタッフを適切に任命する。

２．ＴＡ・ＰＳの活動を計画的に行い、１年生の学習支援を円滑に進める。

３．ＴＡ・ＰＳが事故無く支援活動を実践できるよう教職員が適切にサポートする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　ＴＡ２名、ＰＳ２名をコース教職員の推薦により人選し、活動の様子や実施報告書の記録から適性を判断して課題がみつかれば指導を行う。

２．　ＴＡは前期「食品学基礎実験」後期「食品衛生学実験」で補助業務を行う。ＰＳは時間割の中に位置づけた「スタートアップセミナー」の時間を中心に１年生の学習支援を行う。

３．　実験補助では、とくに安全に業務が遂行できるよう留意してＴＡと事前の打ち合わせを実施する。「スタートアップセミナー」では、ＰＳが安心して業務に当たれるよう事前に課題と解答を渡す。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　ＴＡ・ＰＳともに、ボランティア精神を発揮してよく後輩の指導に当たってくれた。１年生との関係も良好であった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　ＴＡは前期後期それぞれ１５回の授業で実験補助を実施。「食品学基礎実験」では５６％、「食品衛生学実験」では８４％の学生がＡ以上の好成績をあげることができた。ＰＳは時間割の一部が重複したため、前期１５回後期１５回実施した「スタートアップセミナー」の全ての回に参加することはできなかったが、授業の合間を縫って積極的に１年生の支援にあたってくれた。前期の初回アチーブメントテストと最終回まとめテストの結果の比較では、どの教科も概ね成績の向上が見られた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　１年間の活動を事故やトラブルなく終えることができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．教育サポートスタッフの人選については、教職員の推薦による方法を継続する。

２．時間割の都合で、２年生の空き時間と合わせることが難しいが、次年度も実験補助が必要な時間は裏を２年生の空き時間とすることができた。１年生の人数が増えるため、事故防止の観点からもＴＡの重要性は増すものと思われる。次年度は、スタートアップセミナーをプレゼミナールの時間を使って実施するため、ＰＳの業務を履修指導の補助と定期試験対策を中心に進めることとする。

次年度は、効果検証のための調査も併せて実施する。

３．栄養士コース内では教育サポートスタッフの活動が定着しつつあるが、他の学科コースでも取り組む意向があれば、運営について支援を行う。

令和４年度 教育ＳＳ運営委員会 年次報告

Plan 計画

1. 教育サポートスタッフを適切に任命する。
2. TA・PSの活動を計画的に行い、1年生の学習支援を円滑に進める。
3. TA・PSが事故無く支援活動を実践できるよう教職員が適切にサポートする。

Do 実行

1. TA2名、PS2名をコース教職員の推薦により人選し、活動の様子や実施報告書の記録から適性を判断して課題がみつかれば指導を行う。
2. TAは前期「食品学基礎実験」後期「食品衛生学実験」で補助業務を行う。PSは時間割の中に位置づけた「スタートアップセミナー」の時間を中心に1年生の学習支援を行う。
3. 実験補助では、とくに安全に業務が遂行できるよう留意してTAと事前の打ち合わせを実施する。「スタートアップセミナー」では、PSが安心して業務に当たれるよう事前に課題と解答を渡す。

Check 検証

1. TA・PSともに、ボランティア精神を発揮してよく後輩の指導に当たった。1年生との関係も良好。
2. TAは前期後期それぞれ15回の授業で実験補助を実施。「食品学基礎実験」では56%、「食品衛生学実験」では84%の学生がA以上の好成績をあげることができた。PSは時間割の一部が重複したため、前期15回後期15回実施した「スタートアップセミナー」の全ての回に参加することはできなかったが、授業の合間を縫って積極的に1年生の支援にあたってくれた。前期の初回アチーブメントテストと最終回まとめテストの結果の比較では、どの教科も概ね成績の向上が見られた。
3. 1年間の活動を事故やトラブルなく終えることができた。

Act 改善

1. 教育サポートスタッフの人選については、教職員の推薦による方法を継続する。
2. 時間割の都合で、2年生の空き時間と合わせることが難しいが、次年度も実験補助が必要な時間は裏を2年生の空き時間とすることができた。1年生の人数が増えるため、事故防止の観点からもTAの重要性は増すものと思われる。次年度は、スタートアップセミナーをプレゼミナールの時間を使って実施するため、PSの業務を履修指導の補助と定期試験対策を中心に進めることとする。次年度は、効果検証のための調査も併せて実施する。
3. 栄養士コース内では教育サポートスタッフの活動が定着しつつあるが、他の学科コースでも取り組む意向があれば、運営について支援を行う。

令和４年度　「特色化推進ＰＴ会議」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：玉島　健二（会議長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　原則として、月１回の開催・協議を柱として、会議を行う。
２．　前年度からの協議を土台とし、現段階での対応状況及び課題をメンバー全員で洗い出し、挙げられた課題を分野別・項目別に整理し、課題の共有化を図る。
３．　学生支援策としての施設・設備の充実、奨学金の見直し等、新たな取組について模索する。
４．　１人１台のパソコン保有に向けた協議を継続し、課題を洗い出すとともに、課題解決に向けた取組を推進する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　６月以降の月１回開催とし、会議は教授会後または空き時間で行う。
２．　前年度の資料をベースとして、現段階での対応状況をまとめ、必要に応じてアンケートを実施する。
３．　これまでにできた事項と、これからの学生支援策に分けて協議を行う。内容によっては、理事長・学園本部長等とも協議を行う。
４．協議あるのみと考える。場合によっては、理事長・学園本部長とも協議する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
７月に会議を１回開催し、９項目にわたって協議した。その後、８月下旬にＦＤ研修会を開催し、フリートーキングにより意見集約を行った。集約した意見は、学園合同会議や１２月の学園理事会・評議員会でも報告した。
２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
アンケートは実施していない。それに代わり、８月にＳＤ研修会にて意見交換を行った。
３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
８月のＳＤ研修会で出された意見等については、集約し、学園合同会議や学園理事会・評議員会で報告した。耐震化や男女共学化等については、理事長代行（相談役）からは意見表明がなされた。
４．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
１人１台のパソコン保有に関する協議は全く進展していないが、情報管理センター職員を令和５年度から雇用することが決まり、採用内定を行った。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　次年度は、「特色化推進プロジェクト会議」は組織上は設定しない。必要に応じて、運営委員会等で協議する。

令和４年度 特色化推進PT会議　年次報告

Plan　計画

1．原則として月１回の開催を目指す
2．前年度の協議を土台とし、現段階での対応状況・課題を明確にして、整理する。
3．施設・設備の充実、奨学金制度の見直し等、学生支援策について新たな取組を模索する。
4．１人１台のパソコン保有に向けた協議を継続し、課題解決に向け取り組む。

Do　実行

1．６月以降から月１回開催とする。
2．前年度の資料をベースとして、現段階の対応状況をまとめ、必要によりアンケートを実施する。
3．これまでに実現した事項と、これからの事項に分けて協議する。場合により、理事長・学園本部長とも協議する。
4．とにかく協議することが必要である。場合により、理事長・学園本部長とも協議する。

Check　検証

1．７月に会議を１回開催し、９項目について協議。８月にＳＤ研修会を行い、意見集約を行った。集約した意見は学園合同会議や理事会等で報告した。
2．アンケートは実施せす。８月にＳＤ研修会にてフリートーキングで意見交換を行った。
3．８月のＳＤ研修会で出された意見は集約し、学園合同会議や理事会等でペーパーにて報告した。耐震化や男女共学化については、理事長代行（相談役）より意見表明がなされた。
4．１人１台のパソコン保有に関する協議は全く進展していない。ただし、情報管理センター職員を令和５年度から雇用することは決定し、採用内定を行った。

Act　改善

次年度は「特色化推進プロジェクト会議」は組織上は設けず、必要に応じて運営委員会等で協議していく予定である。

令和４年度　「募集・広報委員会」年次報告書

区分：　学科専攻　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：髙井　達司（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．オープンキャンパスの動員向上、及び参加者の満足度を上昇させる。
２．アンバサダーとなって良かったと思わせるような、業務委託に努めたい。
３．本学志願への一歩となる「資料請求者」に対する対応を、より丁寧なものにする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．参加者数の増減は、常に入試広報室の責に帰することから実施可能なあらゆる手段を用いこれに対応した。また、生徒・保護者の満足度向上のためには、学生スタッフの対応力が不可欠である。アンバサダーを中心とした学生スタッフへの事前指導は、徹底したものとしたい。
２．本年度も学生スタッフを巻き込んだ情報発信を実施するが、学生が主体的に行動し、本学に対する帰属意識やロイヤリティを高める運営に当たる。そのことが結果として、「雰囲気の良い大学」として高校生への評価に繋がると期待する。
３．これまで事務的に発送していた入試資料（学校案内、募集要項等）は、３年生に限り個人宛ての文書を添えることとした。本学が志願者一人ひとりに対し、丁寧に寄り添った対応をしてくれる印象を与えたい。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
参加者数の増加に加え、満足度の上昇が顕著であった。特にコースごとの体験学習の評価が上昇したことは入学率を高めるために必須である。このことは募集広報委員会を中心に、事前の申合せが行き届いたものと思料する。
２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
アンバサダーとの信頼関係は、近年稀にみる強固なものへと変わった。各種イベントの運営やSNSへの投稿を始め、任期終了後、卒業間際の出張オープンキャンパスにまで労苦を厭わぬ協力を見せてくれた。
短大との信頼関係により、学生たちの満足度も高いものであったと推察する。
３．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
３年生との接触は特に丁寧な対応に努めた。本人のミスマッチを防ぐとともに、本学への入学歩留まり率向上に大きく貢献した。また、令和３年度より継続する毎週土曜日の個別進学相談会を経由した受験生は、本年度７名を数えた。特に課題を抱えた生徒も多く、これを解消させる支援や助言に努めた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．オープンキャンパスの在り方を再考したい。教員による模擬授業と入試説明会だけではない、女子短ならではの新しいプログラムの可否を委員会で検討したい。
２．早期より次年度の人選を図ったことから、優秀なチームとなった。既に県内大学出張オープンキャンパスから積極的に取組んでおり、前年以上の活動に期待したい。特にオープンキャンパスの運営スタッフとして、自ら企画に参画できるような体制を構築したい。
３．次年度より更に業務多忙となることが予想されるが、可能な限り効率良く業務遂行に努めたい。個別進学相談会をさらに充実させ、これを総合型選抜出願への動機付けとしたい。

令和４年度 募集・広報委員会 年次報告

Plan 計画

1、オープンキャンパスの動員向上、及び参加者の満足度を上昇させる。
2、学生アンバサダーとなって良かったと思わせるような、業務委託に努めたい。
3、本学志願への一歩となる「資料請求者」に対する対応を、より丁寧なものにする。

Do 実行

1、継続する「コロナ禍」に関わらず、参加者数の増減については、常に入試広報室の責に帰する。実施可能なあらゆる手段を用い、これに対応したい。また、生徒・保護者の満足度向上のためには、学生スタッフの対応力が不可欠である。アンバサダーを中心とした学生スタッフへの事前指導は、徹底したものとしたい。
2、本年度も学生スタッフを巻き込んだ情報発信を実施するが、学生が主体的に行動し、本学に対する帰属意識やロイヤリティを高める運営に当たる。そのことが結果として、「雰囲気の良い大学」として高校生への評価に繋がると期待する。
3、これまで事務的に発送していた入試資料（学校案内、募集要項等）は、3年生に限り個人宛ての文書を添えることとした。本学が志願者一人ひとりに対し、丁寧に寄り添った対応をしてくれる印象を与えたい。

Check 検証

1、参加者数の増加に加え、満足度の上昇が顕著であった。特にコースごとの体験学習の評価が上昇したことは入学率を高めるために必須である。このことは募集広報委員会を中心に事前の申合せが行き届いたものと思料する。
2、アンバサダーとの信頼関係は、近年稀にみる強固なものへと変わった。各種イベントの運営やSNSへの投稿を始め、任期終了後、卒業間際の出張オープンキャンパスにまで労苦を厭わぬ協力を見せてくれた。短大との信頼関係により、学生たちの満足度も高いものであったと推察する。
3、3年生との接触は特に丁寧な対応に努めた。本人のミスマッチを防ぐとともに、本学への入学歩留まり率向上に大きく貢献した。また、令和3年度より継続する毎週土曜日の個別進学相談会を経由した受験生は、本年度7名を数えた。特に課題を抱えた生徒も多く、これを解消させる支援や助言に努めた。

Act 改善

1、オープンキャンパスの在り方を再考したい。教員による模擬授業と入試説明会だけではない、女子短ならではの新しいプログラムの可否を委員会で検討したい。
2、早期より次年度の人選を図ったことから、優秀なチームとなった。既に県内大学出張オープンキャンパスから積極的に取組んでおり、前年以上の活動に期待したい。特にオープンキャンパスの運営スタッフとして、自ら企画に参画できるような体制を構築したい。
3、次年度より更に業務多忙となることが予想されるが、可能な限り効率良く業務遂行に努めたい。個別進学相談会をさらに充実させ、これを総合型選抜出願への動機付けとしたい。

令和４年度　「紀要・図書委員会」年次報告書
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）
氏名：南條　恵（委員長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．感染症対策をおこないながら、利用しやすい図書館の環境づくりに努める。 ２．紀要論文における倫理規定案を検討する。 ３．紀要論文の向上と学術リポリトジの運用をおこなう。
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．入館者の手指のアルコール消毒やマスク着用、また観覧者同士の間隔を取り私語を慎むこと、利用後は使用した机等のアルコール消毒の徹底をおこなう。 ２．　他大学の倫理規定等を収集し検討する。 ３．本学紀要への積極的な投稿を呼び掛ける。投稿にあたっては、規定順守のチェックシートを作成する。
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１.自己評価「 S・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 新型コロナ感染症対策として、入館時の手指消毒等の徹底、館内の消毒などを確実におこなうことができた。 ２．自己評価「Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・D」 倫理規定に関しては倫理委員会に移行し、作成に至った。 ３．自己評価「Ｓ・Ａ・Ｂ・C・Ｄ」 投稿に関する規定順守のチェックシートは作成途中である。 学術リポリトジの運用については計画途中である。 紀要ならびに抜き刷りの印刷冊数について、変更した。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．新型コロナ感染症の拡大予防を踏まえつつ、返却ボックスの設置、絵本会の実施など、より一層の図書館利用に向けての取り組みを検討したい。 ３．投稿に関する規定順守のチェックシートの作成について引き続き検討する。 学術リポリトジの運用について引き続き検討する。

令和４年度 紀要・図書委員会 年次報告

Plan 計画

1．感染症対策をおこないながら、利用しやすい図書館の環境づくりに努める。

2．紀要論文における倫理規定案を検討する。

3．紀要論文の向上と学術リポリトジの運用をおこなう。

Do 実行

1．入館者の手指のアルコール消毒やマスク着用、また観覧者同士の間隔を取り私語を慎むこと、利用後は使用した机等のアルコール消毒の徹底をおこなう。

2．他大学の倫理規定等を収集し検討する。

3．本学紀要への積極的な投稿を呼び掛ける。投稿にあたっては、規定順守のチェックシートを作成する。

Check 検証

1、新型コロナ感染症対策として、入館時の手指消毒等の徹底、館内の消毒などを確実におこなうことができた。

2、倫理規定に関しては倫理委員会に移行し作成に至った。

3、投稿に関する規定順守のチェックシートは作成途中である。
学術リポリトジの運用については計画途中である。
紀要ならびに抜き刷りの印刷冊数について変更した。

Act 改善

1．新型コロナ感染症の拡大予防を踏まえつつ返却ボックスの設置、絵本会の実施など、より一層の図書館利用に向けての取り組みを検討したい。

3、投稿に関する規定順守のチェックシートの作成について引き続き検討する。
学術リポリトジの運用について引き続き検討する。

令和４年度　「学生指導委員会」年次報告書
区分：　学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）
氏名：織田　芳人（委員長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会等と緊密な情報共有に努める。 2. 学生の生活指導が緊急に必要になった場合、速やかに委員会を開いて検討する。 3. 学生の生活指導に関して、事例をまとめて保存していく。
DO（実行）：目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会等と情報共有していく。 2. 学生の生活指導が必要な場合、速やかに委員会を開く。 3. 学生の生活指導に関する事例をまとめる。
CHECK（検証）：成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1.　自己評価「 S ・ A ・ B ・ C ・ D 」 学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会等と概ね情報共有できた。 2.　自己評価「 S ・ A ・ B ・ C ・ D 」 後期末定期試験における「マナー学」の再試験で、幼児教育学科１年生３名に不正を疑われる行為が見られたので、試験終了後に学生部長が個別に面談して状況確認を行い、本委員会で処分を検討した。結果的には学長訓告とした。 3.　自己評価「 S ・ A ・ B ・ C ・ D 」 処分を行った事例は上記１件であり、報告書としてまとめた。
ACT（改善）：課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1.　学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会等と緊密な情報共有を行う。 2.　学生の生活指導が緊急に必要になった場合、速やかに委員会を開いて検討する。 3.　学生の生活指導に関して、事例をまとめて保存する。

令和４年度 学生指導委員会 年次報告

Plan 計画

１．学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会等と緊密な情報共有に努める。

２．学生の生活指導が緊急に必要になった場合、速やかに委員会を開いて検討する。

３．学生の生活指導に関して、事例をまとめて保存していく。

Do 実行

１．学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会等と情報共有していく。

２．学生の生活指導が必要な場合、速やかに委員会を開く。

３．学生の生活指導に関する事例をまとめる。

Check 検証

１． 学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会等と概ね情報共有できた。
２．後期末定期試験における「マナー学」の再試験で、幼児教育学科1年生3名に不正を疑われる行為が見られたので、試験終了後に学生部長が個別に面談して状況確認を行い、本委員会で処分を検討した。結果的には学長訓告とした。
３．処分を行った事例は上記1件であり、報告書としてまとめた。

Act 改善

１．学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会等と緊密な情報共有を行う。
２．学生の生活指導が緊急に必要になった場合、速やかに委員会を開いて検討する。
３．学生の生活指導に関して、事例をまとめて保存する。

令和４年度　「学生支援委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：山中　慶子（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 学生生活全般、並びに学友自治会活動に関する事項について、学生の自主性を尊重し適切な支援活動を行う。

2. 学友自治会の活動に関しては、担当教員を中心にして連絡をとりつつ、学生の主体性を養い学友自治会役員・実行委員の運営能力向上が図られるような支援を行う。

3. 新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐ策を講じながら、在学生の要望を参考にし、満足度向上のための行事運営を行う。

DO（実行）：目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 定期総会、スポーツフェスタ、弥生祭、学友自治会選挙などの行事については、準備段階から学生の意思を尊重し、学生主体の活動となるよう関わる。教員のさせたいことではなく、学生の「やってみたい」を支援する。学生・教員の行事参加は（定期総会・選挙を除き）任意とする。

2. 自治会役員から各担当教員への報告・連絡・相談を徹底させる。学生には、社会人となる準備としてメールを活用するよう指導する。自治会役員・各実行委員が主体的に年間・月間の流れを構築し、効率よく魅力的な活動を行うための能力を身に付けられるよう支援する。

3. 今年度も新型コロナウイルス感染拡大のため、行事運営の変更を余儀なくされる恐れがある。予防策を講じながらも在学生の満足度向上に向けた取り組みを学友自治会役員と協議し実行する。

CHECK（検証）：成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「Ｓ・ A ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」
行事については、準備段階から学生の意思を尊重し、学生主体の活動となるよう関わることができた。それぞれの担当になった学生は、より良い運営を目指して取り組んでいたが、他学生をまきこんで盛り上げていく力は不足していたように思う。

2. 自己評価「Ｓ・Ａ・ B ・Ｃ・Ｄ」
自治会役員から各担当教員への報告・連絡・相談を行えている部署と、そうでない部署があった。担当学生自身が、年間・月間の流れを把握し、順序立てて活動を計画していくことが難しく、教員の関りが必須の状況であった。

3. 自己評価「Ｓ・ A ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」
全ての行事において、コロナ感染の予防策を講じながら実施した。具体的な感染レベルによる中止の可能性を示したことも、良かったと思う。結果的に、今年度は学生の意向に沿った行事を実施することができた。

ACT（改善）：課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 今後も、学生の自主性を尊重し適切な支援活動を行う。学友自治会役員と他学生との温度差をなくすための取り組みについて、新役員で協議するよう働きかける。

2. 担当学生自身が、年間・月間の流れを把握し、順序立てて活動を計画していくことができるよう、アッセンブリ予定表の有効な活用の仕方を伝える。

3. 今後の社会の動向に沿いながらも、感染予防対策を講じながらの行事の実施を進める。

令和４年度 学生支援委員会 年次報告

Plan 計画

1. 学生生活全般、並びに学友自治会活動に関する事項について、学生の自主性を尊重し適切な支援活動を行う。

2. 学友自治会の活動に関しては、担当教員を中心にして連絡をとりつつ、学生の主体性を養い学友自治会役員・実行委員の運営能力向上が図られるような支援を行う。

3.新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐ策を講じながら、在学生の要望を参考にし、満足度向上のための行事運営を行う。

Do 実行

1. 定期総会、スポーツフェスタ、弥生祭、学友自治会選挙などの行事については、準備段階から学生の意思を尊重し、学生主体の活動となるよう関わる。教員のさせたいことではなく、学生の「やってみたい」を支援する。学生・教員の行事参加は（定期総会・選挙を除き）任意とする。

2. 自治会役員から各担当教員への報告・連絡・相談を徹底させる。学生には、社会人となる準備としてメールを活用するよう指導する。自治会役員・各実行委員が主体的に年間・月間の流れを構築し、効率よく魅力的な活動を行うための能力を身に付けられるよう支援する。

3. 今年度も新型コロナウイルス感染拡大のため、行事運営の変更を余儀なくされる恐れがある。予防策を講じながらも在学生の満足度向上に向けた取り組みを学友自治会役員と協議し実行する。

Check 検証

1.　自己評価「Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ」
行事については、準備段階から学生の意思を尊重し、学生主体の活動となるよう関わることができた。それぞれの担当になった学生は、より良い運営を目指して取り組んでいたが、他学生をまきこんで盛り上げていく力は不足していたように思う。

2.　自己評価「Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ」
自治会役員から各担当教員への報告・連絡・相談を行えている部署と、そうでない部署があった。担当学生自身が、年間・月間の流れを把握し、順序立てて活動を計画していくことが難しく、教員の関りが必須の状況であった。

3.　自己評価「Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ」
全ての行事において、コロナ感染の予防策を講じながら実施した。具体的な感染レベルによる中止の可能性を示したことも、良かったと思う。結果的に、今年度は学生の意向に沿った行事を実施することができた。

Act 改善

1.今後も、学生の自主性を尊重し適切な支援活動を行う。
学友 自治会役員と他学生との温度差をなくすための取り組みについて、新役員で協議するよう働きかける。

2.担当学生自身が、年間・月間の流れを把握し、順序立てて活動を計画していくことができるよう、アッセンブリ予定表の有効な活用の仕方を伝える。

3.今後の社会の動向に沿いながらも、感染予防対策を講じながらの行事の実施を進める。

令和４年度　「地域連携・子育て支援センター」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：古賀　克彦（センター長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．公開講座については、地域ニーズの把握・精緻化をすすめるとともに、新型コロナ対策も適切に行い、参加人数の増加や満足度向上につなげる。

２．子育て支援（親育ち講座）、高大連携を含む地域連携活動については、学内全体として取組む意識の共有をさらに高める。そのために、各学科・コースの特色を生かした事業の実施のみならず、実施した活動についての情報共有・公開体制の整備を進める。

３．ボランティア担当委員の配置を今年度も継続し、スムーズな受付・活動支援の実施が可能な体制を定着させ、コロナ禍においてもさらなる活動の充実を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．公開講座の新型コロナ流行下における着実な実施と参加者数増加および満足度向上

- 新型コロナ対策の実施（内容の検討および開催日時の柔軟な対応）
- 各学科コースへの公開講座実施依頼（幼教２～３講座、食物２～３講座、情報１～２講座）
- 新型コロナ流行下に実施可能な公開講座内容の検討

２．親育ち講座の実施と高大連携の強化

- 新型コロナ対策を行ったうえで、親育ち講座の対面式での実施（Web 併用）
- 県内３高校（長崎明誠、長崎玉成、長崎女子）との連携体制の強化
- 長崎女子高との連携と情報共有体制の構築

３．ボランティア活動の実施

- 担当委員の継続配置により、受付対応・学生への呼びかけ等のスムーズな実施
- 新型コロナ感染拡大の影響下で、実施可能なボランティアの在り方の検討

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

令和４年度は幼児教育学科が２講座、栄養士コースが３講座、計５講座を実施したが、新型コロナの影響により全ての学科コースで実施することは出来なかった。出席率に関しては定員の 140%を超えるものから、60%を切るものまでさまざまであったが、新型コロナの影響が大きかったと思われる。満足度に関しては各講座の報告書からは高い結果となった。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

南島原市親育ち講座については７月から 12 月にかけて講座を６日間(12 回)実施し、参加者はのべ 49 名であった。なお、この親育ち講座は新型コロナウイルス感染に配慮しながら対面で実施した。高大連携に関しては、県内３高校（長崎明誠、長崎玉成、長崎女子）との間での連携体制をさらに強化することができた。

３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

令和４年度のボランティア活動は新型コロナ流行下であったが、フードドライブ袋詰め（７月、Y4 名参加）、長崎特別支援学校での生きものと関わる経験の提供（７月、Y10 名参加）、障害児対象のクリスマスコンサート（Y、12 月参加）、NAGASAKI しごとみらい博の学生実行委員（L6 名）、子ども食堂運営（S2 名）のボランティア活動を行った。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．公開講座に関してはアフターコロナの状況下でも開催できる講座形態や開催時期についての検討を進める。また、引き続き地域ニーズの把握・精緻化を行い、参加者の満足度の高い企画の立案・実施する。

２．親育ち講座については、引き続き参加者の満足が得られ、安心して参加できる講座の企画立案および実施を進める。高大連携に関しては、更なる連携体制強化を目指す。

３．引き続き、ボランティア参加希望学生が安心して参加できるような支援体制の整備・連携強化を進めたい。

令和４年度 地域連携・子育て支援センター 年次報告

Plan 計画

1. 公開講座については、地域ニーズの把握・精緻化をすすめるとともに、新型コロナ対策も適切に行い、参加人数の増加や満足度向上につなげる。
2. 子育て支援（親育ち講座）、高大連携を含む地域連携活動については、学内全体として取組む意識の共有をさらに高める。そのために、各学科・コースの特色を生かした事業の実施のみならず、実施した活動についての情報共有・公開体制の整備を進める。
3. ボランティア担当委員の配置を今年度も継続し、スムーズな受付・活動支援の実施が可能な体制を定着させ、コロナ禍においても活動の充実を図る。

Do 実行

1. 公開講座の新型コロナ流行下における着実な実施と参加者数増加および満足度向上
   - 新型コロナ対策の実施（内容検討含む）
   - 各学科コースへの公開講座実施依頼
2. 親育ち講座の実施と高大連携の強化
   - 親育ち講座の対面式での実施（Web併用
   - 県内3高校との連携体制の強化
   - 長崎女子高との密接連携と情報共有体制の構築
3. ボランティア活動の実施
   - 受付対応・学生への呼びかけ等の円滑な実
   - 新型コロナ流行下のボランティアの在り方検討

Check 検証

1．自己評価「Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」
公開講座は幼児教育学科が2講座、栄養士コースが3講座、合計5講座を実施した。出席率に関しては定員の140％超から60％を切るものまで様々であった。満足度に関しては各講座とも高い結果となった。

2．自己評価「Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」
南島原市親育ち講座は7～12月にかけて12回実施し参加者は49名であった。高大連携については県内３高校との間での連携体制をさらに強化することができた。

3．自己評価「Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」
今年度は新型コロナ流行下であったが、フードドライブ支援（Y4名）、長崎特別支援学校生物教室実施（Y10名）、障害児対象クリスマスコンサート（Y）、NAGASAKIしごとみらい博の学生実行委員（L6名）、子ども食堂運営（S2名）のボランティア活動を行った。

Act 改善

1. 公開講座に関してはアフターコロナの状況下でも開催できる講座形態や開催時期についての検討を進める。また、引き続き地域ニーズの把握・精緻化を行い、参加者の満足度の高い企画の立案・実施する。

2. 親育ち講座については、引き続き参加者の満足が得られ、安心して参加できる講座の企画立案および実施を進める。高大連携に関しては、更なる連携体制強化を目指す。

3. 引き続き、ボランティア参加希望学生が安心して参加できるような支援体制の整備・連携強化を進めたい。

令和４年度　「障がい学生支援委員会」年次報告書
区分：　学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）
氏名：織田　芳人（委員長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．「入学予定者」用の合理的配慮申請書に学籍番号を記入する欄を設けて、新年度始めに各学科コースで整理しやすい様式に改善することとする。 ２．前期後半（7 月下旬～8 月上旬）及び後期後半（1 月中旬～下旬）に、各学科コースで可能な範囲の合理的配慮が行われているか、また、申請者以外に気になる学生がいないかを確認し、必要に応じて追加の配慮等を実施することとする。 ３．入学前（3 月末まで）に入学予定者の合理的配慮申請書を確認して、新年度に入って合理的配慮ができるようにする。
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．「入学予定者」用の合理的配慮申請書に学籍番号を記入する欄を設けて、新年度始めに各学科コースで整理しやすい様式に改善する。 ２．前期後半（7 月下旬～8 月上旬）及び後期後半（1 月中旬～下旬）に、各学科コースで可能な範囲の合理的配慮が行われているか、また、申請者以外に気になる学生がいないかを確認し、必要に応じて追加の配慮等を実施する。 ３．新年度に入って直ちに合理的配慮ができるように、令和 5 年 3 月末までに、できる限り入学予定者の合理的配慮申請書を確認して検討する。
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 「入学予定者」及び「在学生」用の「合理的配慮申請書」を「合理的配慮調査書」として、入学後も半期ごとに修正・追加等が可能なように、新たな様式に改善した。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 前期後半（7 月 28 日）及び後期後半（11 月 30 日）に本委員会を開催し、各学科コースでの合理的配慮の状況を確認した。合理的配慮を大いに必要とする学生は増えなかった。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学生課の多大な協力を得て、令和 5 年 3 月末（3 月 29 日）に入学予定者の 9 割以上について「合理的配慮調査書」を確認し、新年度からの各学科コースでの対応を円滑に検討することができた。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．新たな様式である「合理的配慮調査書」の不都合や不便等を確認し、もしあれば随時修正して、次年度に反映させる。 ２．年度始めに、非常勤講師を含む各学科コースの先生方へ、前年度末にまとめた合理的配慮に関する情報を提供する。 ３．2 年生に対しても、従来の「合理的配慮申請書」に適宜書き加えてもらい、合理的配慮の確認に努める。

令和４年度 障がい学生支援委員会 年次報告

Plan　計画

１．「入学予定者」用の合理的配慮申請書に学籍番号を記入する欄を設けて、新年度始めに整理しやすい様式に改善することとする。
２．前期後半及び後期後半に、可能な範囲の合理的配慮が行われているか、また、申請者以外に気になる学生がいないかを確認し、必要に応じて追加の配慮等を実施することとする。
３．入学前（3月末まで）に入学予定者の合理的配慮申請書を確認して、新年度に入って合理的配慮ができるようにする。

Do　実行

１．「入学予定者」用の合理的配慮申請書に学籍番号を記入する欄を設けて、新年度始めに各学科コースで整理しやすい様式に改善する。
２．前期後半及び後期後半に、可能な範囲の合理的配慮が行われているか、申請者以外に気になる学生がいないかを確認し、追加の配慮等を実施する。
３．新年度に入って直ちに合理的配慮ができるように、令和5年3月末までに、できる限り入学予定者の合理的配慮申請書を確認して検討する。

Check　検証

１．「入学予定者」及び「在学生」用の「合理的配慮申請書」を「合理的配慮調査書」として、入学後も半期ごとに修正・追加等が可能なように、新たな様式に改善した。
２．前期後半（7月28日）及び後期後半（11月30日）に本委員会を開催し、各学科コースでの合理的配慮の状況を確認した。新たに合理的配慮の必要な学生はいなかった。
３．令和5年3月末（3月29日）に入学予定者の「合理的配慮調査書」を確認し、各学科コースでの対応を検討した。

Act　改善

１．新たな様式である「合理的配慮調査書」の不都合や不便等を確認し、もしあれば随時修正して、次年度に反映させる。
２．年度始めに、非常勤講師を含む各学科コースの先生方へ、前年度末にまとめた合理的配慮に関する情報を提供する。
３．新2年生に対しても、従来の「合理的配慮申請書」に適宜書き加えてもらい、合理的配慮の確認に努める。

令和４年度　「寮務委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：前田　功（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　今年度は寮監業務を 5 人のシダックスの方々に任せているので、その円滑な業務遂行に向けて連絡相談体制を構築していく。

２．　寮務委員会は前後期最低各２回ずつ行い、短大生や高校生の日頃抱えている問題点や悩みなどを共有できるようにしていく。

３．若竹寮の省エネルギー推進のために各寮監との連携のもとに不要な電気を消したり、壊れた設備などを更新したりしていくとともに愛宕小学校との連携活動などに取り組む。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　毎日最低１回は若竹寮に足を運び、寮監との面談を通して問題が生じていないか確認を行うとともに、寮務日誌のチェックを細かく行い不測の事態に備える。

２．　寮務委員会の計画的な実施と長崎女子高校担当者との連絡を密に行い、それぞれの立場からの問題点の提示と対策を協議していく。

３．　寮生集会や寮長・副寮長との協議を通して省エネルギーに取り組む姿勢を育てていく。また愛宕小学校との連携のために見回り活動や放課後交流の講師として寮生に協力を依頼していく。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

基本的に毎日１回は寮監との面談を行うことができた。問題が生じていないかの確認については寮務日誌を通して行うことができた。寮務日誌については毎日高校へ FAX したので情報の共有はできたと思われる。

２．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

寮務委員会については５月と２月に委員を招集しての実施することができた。他に寮監長より「振り返り」ということで短大生・高校生それぞれの生活状況を把握することができた。コロナ禍で心配されたが、大きな事故もなく順調に生活を送ることができたように思われる。

３．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

寮生集会、寮長・副寮長との協議による省エネルギーについては十分できたと思われる。諸般の事情により光熱費の額が大きくなったことは残念である。愛宕小学校との連携も最後まで短大１年生が講師として参加しその役割を果

たしてくれた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．基本的に毎日１回は寮監との面談を行うことは継続していく。そのことによって日々の寮生の生活ぶりが理解でき、学業にプラスになると思われる。寮務日誌の回覧、高校への FAX 送信も継続していきたい。

２．寮務委員会については年４回の実施に向けて努力していきたい。ただし、寮務委員の方々の委員としての自覚が必要になると思われる。通知を出しても集会等に参加しないなどの行動も見られたので、積極的な委員としての活動について促していきたい。

３．省エネルギーを図ることは大切なことであり、何かにつけて啓蒙を図っていく必要がある。特に高校生についてあまり自覚がないと思われるので高校の関係者との連携を図りながら徹底していく。

令和４年度 寮務委員会 年次報告

Plan 計画

1．基本的に毎日1回は寮監との面談を行うことは継続する。そのことにより日々の寮生の生活ぶりを理解し、学業にプラスになると思われる。寮務日誌の回覧、高校へのFAX送信も継続していきたい。
2．寮務委員会については年４回の実施に向けて努力していく。ただし、寮務委員の方々の委員としての自覚が必要になる。通知を出しても集会等に参加しないなどの行動も見られたので、積極的な委員としての活動について促していきたい。
3．省エネルギーを図ることは大切なことであり、啓蒙を図っていく。特に高校生について自覚がないので高校の関係者との連携を図りながら徹底していく。

Do 実行

1．今年度から寮監業務を5人のシダックスの方々に任せているので、その円滑な業務遂行に向けて連絡体制を構築していく。

2．寮務委員会を前後期最低各2回ずつ行い、短大生や高校生の日頃抱えている問題点や悩みなどを共有できるようにしていく。

3．若竹寮の省エネ推進のために各寮監との連携のもとに不要な電気を消したり、壊れた設備などを更新したりしていくとともに愛宕小学校との連携活動に取組む。

Check 検証

1．毎日最低1回は若竹寮に足を運び、寮監との面談を通して問題が生じていないか確認を行うとともに、寮務日誌のチェックを細かく行い不測の事態に備える。

2．寮務委員会の計画的な実施と長崎女子高校担当者との連絡を密に行い、それぞれの立場からの問題点の提示と対策を協議していく。

3．寮生集会や寮長・副寮長との協議を通して省エネルギーに取り組む姿勢を育てていく。また愛宕小学校との連携のために見回り活動や放課後交流の講師として寮生に協力を依頼していく。

Act 改善

1．基本的に毎日1回は寮監との面談を行うことができた。問題が生じていないかの確認については寮務日誌を通して行うことができた。寮務日誌については毎日高校へFAXしたので情報の共有はできた。
2．　基本的に毎日1回は寮監との面談を行うことができた。問題が生じていないかの確認については寮務日誌を通して行うことができた。寮務日誌については毎日高校へFAXしたので情報の共有はできた。
3．寮生集会、寮長・副寮長との協議による省エネルギーについては十分できた。諸般の事情により光熱費の額が大きくなったことは残念である。愛宕小学校との連携も最後まで短大１年生が講師として参加しその役割を果たした。

令和４年度　「学生相談室」年次報告書
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）
氏名：荒木　正平（室長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．学生に関する情報共有を各学科コース長と行う。 ２．学生相談委員会の実施を定期的に行い、また広報についてはインスタグラム等のSNSを用いる。 ３．学生に対する支援を充実させる。
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．必要に応じ、担当者を介して各学科コースの長と情報を共有することができている。 ２．相談室の担当教員間で、また関係職員や他の委員会とも連携しての情報共有を実施した。 ３．相談に来た学生に対しては、各担当、受容的・共感的態度で支援に臨んでいる。
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学生に問題が発生した場合には、各学科コースの担当者がそれぞれの長と連絡を取り、学生の情報を共有した。今後もより一層の情報共有が必要となる。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 相談室の担当教員間での連携、また関係職員や他の委員会との情報共有は実施できたが、広報活動については今後さらに充実させていく必要がある。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 相談に来た学生に対しては、各担当、受容的・共感的態度で支援に臨み、特に問題はなかった。今後さらに支援体制や連携の在り方の見直しを行い、支援を充実させる必要がある。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．各学科コースとの情報共有を充実させる。 ２．学生相談室の広報活動を行う。 ３．学生に対する支援を充実させる。

令和４年度 学生相談室 年次報告

Plan 計画

１．学生に関する情報共有を各学科コース長と行う。

２．学生相談委員会の実施を定期的に行い、また広報についてはインスタグラム等のSNSを用いる。

３．学生に対する支援を充実させる。

Do 実行

１．必要に応じ、担当者を介して各学科コースの長と情報を共有することができている。

２．相談室の担当教員間で、また関係職員や他の委員会とも連携しての情報共有を実施した。

３．相談に来た学生に対しては、各担当、受容的・共感的態度で支援に臨んでいる。

Check 検証

１．学生に問題が発生した場合には、各学科コースの担当者がそれぞれの長と連絡を取り、学生の情報を共有した。今後もより一層の情報共有が必要となる。

２．相談室の担当教員間での連携、また関係職員や他の委員会との情報共有は実施できたが、広報活動については今後さらに充実させていく必要がある。

３．相談に来た学生に対しては、各担当、受容的・共感的態度で支援に臨み、特に問題はなかった。今後さらに支援体制や連携の在り方の見直しを行い、支援を充実させる必要がある。

Act 改善

１．各学科コースとの情報共有を充実させる。

２．学生相談室の広報活動を行う。

３．学生に対する支援を充実させる。

令和４年度　「事務局」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：前田　功（事務局長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　円滑な事務局運営のために各種取り組みを引き続き行っていく。コロナ感染症については感染者や濃厚接触者が依然として一定数出ているのでその対策を行っていく。事務局の業務体制は一人二役の徹底を図る。

２．　教務（学務）システムの完成を目指すとともに学内における各種工事の円滑な実施を目指して業者や法人本部との連携を図っていく。

３．　ＳＤ研修会の計画的な実施と事務局内の報告連絡相談体制をより強固なものにしていくことで業務の効率化や学生サービスの向上に努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　新型コロナ感染症対策として手指の消毒や検温の徹底をさらに強めていくとともに、コロナ対策としてあらゆる方策の実施を目指す。事務局内業務の一人二役体制の徹底を図り一人が欠勤してもスムーズに対応できる体制を築いていく。

２．　学内における各種工事の円滑な実施に向けて業者との連携や日程調整に努める。教務システムの完成やGメールの導入など懸案の解決に向けてできることを実施していく。

３．　課題解決に向けたＳＤ研修会の計画的な実施に向けて教授会終了後などの空き時間を利用した実施を図っていくとともに朝礼時の連絡などを通して業務の効率化と学生サービスの向上を図っていく。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・ $\boxed{\text{A}}$ ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

新型コロナ感染症対策として手指の消毒や検温の徹底を図るなど、コロナ対策としてあらゆる方策を実施した。その結果、クラスターの発生はなく、延べ 80 人ほどの感染者が出たが、その多くが家庭内感染であり、学内感染の発生は十分抑えることができた。事務局内業務の一人二役体制の徹底を図り一人が欠勤してもスムーズに対応できる体制を築いていくことができた。

２．自己評価「 Ｓ・ $\boxed{\text{A}}$ ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

学内における各種工事の円滑な実施に向けて業者との連携や日程調整に努めることができた。教務システムの完成やGメールの導入など懸案の解決に向けて現時点でできることは実施できた。

３．自己評価「 Ｓ・ $\boxed{\text{A}}$ ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

課題解決に向けたＳＤ研修会の計画的な実施に向けて教授会終了後などの空き時間を利用した実施については道半ばであった。朝礼時の連絡などを通して業務の効率化と学生サービスの向上を図っていくことはある程度できたと思われるが、徹底できていない面があった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　新型コロナウィルス感染症対策については今後も徹底していく。検温機の追加や消毒設備の充実については勿論であるが、感染症としての２類から５類指定への変更を受けてマスクの着用義務化をどうするかなど今後検討していくことが多いと思われるので機動的に対処していく。

２．　学内の修理営繕活動については学内環境に目を光らせておいて、不備なところがあったら迅速に対応していく。学内環境の整備について、本部との連携を図っていくことで学生の顧客満足度を上げていく。

３．　事務局員の練度を挙げていくためのＳＤ研修会の実施に向けて、自己点検評価室と今後とも連携をとってその実施を目指していく。朝礼時の連絡を重視し、課題の共有を図ると同時に学生へのサービス提供の視点から丁寧な対応に心がけていく。

令和４年度 事務局 年次報告

Plan 計画

1．　新型コロナウィルス感染症対策については今後も徹底していく。感染症の２類から５類指定への変更を受けてマスクの着用義務化をどうするかなど今後機動的に対処していく。
2．学内の修理営繕活動については学内環境に目を光らせておいて、不備なところがあったら迅速に対応していく。
3．　ＳＤ研修会の実施に向けて、自己点検評価室と今後とも連携をとって事務局員に特化した実施を目指していく。朝礼時の連絡を重視し、課題の共有を図ると同時に学生へのサービス提供の視点から丁寧な対応に心がけていく。

Do 実行

1．円滑な事務局運営のために各種取り組みを引き続き行っていく。コロナ感染症については感染者や濃厚接触者が依然として一定数出ているのでその対策を行っていく。事務局の業務体制は一人二役の徹底を図る。
2．教務（学務）システムの完成を目指すとともに学内における各種工事の円滑な実施を目指して業者や法人本部との連携を図っていく。
3．ＳＤ研修会の計画的な実施と事務局内の報告連絡相談体制をより強固なものにしていくことで業務の効率化や学生サービスの向上に努める。

Act 改善

1．新型コロナ感染症対策として手指の消毒や検温の徹底を図るなどあらゆる方策を実施した。その結果、クラスターは発生せず、延べ80人ほどの感染者の多くが家庭内感染であり、学内感染の発生は十分抑えることができた。事務局内業務の一人二役体制の徹底を図り一人が欠勤してもスムーズに対応できる体制を築いていくことができた。
2．学内における各種工事の円滑な実施に向けて業者との連携や日程調整に努めることができた。教務システムの完成やＧメールの導入など懸案の解決に向けて現時点できることは実施できた。
3．課題解決に向けたＳＤ研修会の計画的な実施は道半ば。朝礼時の連絡などを通して業務の効率化と学生サービスの向上を図っていくことは、徹底できていない面があった。

Check 検証

1．新型コロナ感染症対策として手指の消毒や検温の徹底をさらに強めていくとともに、コロナ対策としてあらゆる方策の実施を目指す。事務局内業務の一人二役体制の徹底を図り一人が欠勤してもスムーズに保管ができる体制を築いていく。
2．学内における各種工事の円滑な実施に向けて業者の要望や日程調整に努める。教務システムの完成やＧメールの導入など懸案の解決に向けてできることを実施していく。
3．課題解決に向けたＳＤ研修会の計画的な実施に向けて教授会終了後などの空き時間を利用した実施を図っていくとともに朝礼時の連絡などを通して業務の効率化と学生サービスの向上を図っていく。

令和４年度

「個人別報告書」

令和４年度　「玉島　健二」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：大学運営	職名：学長

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．授業運営
「初年次セミナー」（「現代社会と女性」）、「長崎観光入門」等の授業において、学生の社会人基礎力の向上・充実を目指すとともに、授業評価アンケートの「全体的な満足度」において４．３以上を目指す。

２．大学運営
学長運営方針で掲げた４つの努力目標及びその取組について、実現に向けた取組を推進する。

３．学生募集
学生募集に繋がる取組（進学ガイダンスや高校訪問等）に積極的に関わり、令和５年度入学生１７０名の定員確保を目指す。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．授業運営
①「初年次セミナー」（２年生は「現代社会と女性」）は、学科・コースの担当教員の協力を得ながら、講師との打ち合わせを綿密に行うとともに、受講後の満足度向上と実践力に繋がるような運営とする。
②「長崎観光入門」・「長崎観光概論」は、授業内容の工夫と教材の充実を図るとともに、学生自らが調べたり、まとめたりする授業構成とする。

２．大学運営
①運営委員会、入試委員会での協議を充実させ、目的達成のための取組とする。
②各学科・コース長及び学長が会議に出席しない委員会（教務委員会）の長に対し、会議開催後の報告を求め、必要に応じて指示を出す。
③特色化推進プロジェクト会議において、本学の課題を取り上げ、その解決に取り組む。

３．学生募集
①進学ガイダンス、高校訪問、短大見学会に積極的に関わり、本学の良さを高校生等にアピールする。
②募集広報委員会に必ず出席し、必要に応じて、提案や学長としての意見表明を行う。
②入試広報室が作成するパンフレット等には必ず目を通し、必要な指導・助言を行う。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
・授業評価アンケートにおける「全体的な満足度」は、「現代社会と女性」（２年生）が４．３、「初年次セミナー」（１年生）が４．３、「長崎観光入門」が４．６、「長崎観光概論」が４．７であった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」
①学長運営方針の中で示した、「休・退学者ゼロを目指す」については、年度途中で休学者３名、退学者 11 名を出してしまった。経済的事情、家庭環境、病気等の理由もあるが、中には目的意識の希薄化が要因となった者も見られた。
②関係者からの報告は概ね良好であった。
③特色化推進プロジェクト会議はほとんど機能させることができなかった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」
①～③については、可能な限り対応した。ただし、入学予定者数は前年度をやや下回る状況である。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1.授業運営
各科目とも「全体的な満足度」４．５以上を目指し、学生がわかりやすい授業を工夫する。そのための教材研究等に時間をかけたい。

２．大学運営
各教職員の理解と協力が不可欠である。そのためにコミュニケーションを取ることを第１としたい。

３．学生募集
入試広報室と連携と取り、可能な限り、支援していきたい。

令和４年度　「森　弘行」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 授業について
   統計理論など、学生の理解度が低い領域の授業改善
2. 学務について
   - 学術機関リポジトリの整備
   - 学内情報システムの維持管理
3. 研究活動について
   (ア) 学外との研究協力の継続

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 授業について
   - 演習課題の改善
2. 学務について
   - JAIRO Cloud の WEKO3 への移行が遅れているが、稼働後リポジトリ運用を試行
   - 学生データベースの継続的な改修、学務システムとの連携
3. 研究活動について
   - ハザード分析に関するシミュレーションプログラムの開発（共同研究）
   - JITAI 評価のための MRT（共同研究）

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
- 数的理解での反転授業の拡大、ウェブデザイン専用サイトにより授業アンケート結果が回復

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
- WEKO3 のサービス提供が度々延期され、令和５年 11 月以降になる見通し
- 学生データベースの面談記録チェック機能追加など、改修を実施

３．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
- ハザード分析に関するシミュレーションプログラムの開発（共同研究）では国際学会発表 2、国際学会誌論文投稿 1
- 「JITAI 評価のための MRT」は科学研究費不採択

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 授業について
   - 反転授業の拡大、ウェブサイト、Google Workspace の活用
2. 学務について
   - JAIRO Cloud の WEKO3 への移行が遅れているが、稼働後リポジトリ運用を試行
   - 情報管理センター業務の引継ぎ
3. 研究活動について
   - 学外との研究協力の継続

令和４年度　「織田　芳人」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．①ICT 活用によるオンデマンドと対面を組み合わせたブレンド型授業の可能性を模索する。
②情報科学の授業内容を見直し、必要に応じて、選択科目として内容を拡充することも検討する。

２．学生部及び障がい学生支援委員会の業務を継続し、学生指導委員会の業務を新たに遂行する。

３．①知育玩具による体験学修とヴィジュアル・プログラミング学修を組み合わせた授業の効果を検討する。
②保育で使われる漢字の分析対象として『保育所保育指針』について検討する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．①オンデマンド授業のための配布資料の作成、動画撮影の方法について効率化を検討する。
②情報科学の授業内容を現在の学生に対応できる内容に見直していく。

２．障がい学生支援委員会の業務として、合理的配慮事項申請書の様式を見直す等、改善を行った。新たに設置された学生指導委員会の業務を遂行していく。

３．①知育玩具による体験学修とヴィジュアル・プログラミング学修を組み合わせた授業のアンケート調査を実施する。
②『保育所保育指針』について漢字の分析を行う。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
①コロナ禍の懸念が薄らいでオンデマンド授業を実施する必要性が低下したため、スライドを用いた配布資料の作成に止めた。
②情報科学の授業内容を従来よりも精選する形で見直しを行った。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
障がい学生支援委員会の業務として合理的配慮に関する書式を改善し、また、学生課の多大な協力を得ることができたため、入学予定者の検討を比較的容易に行うことができた。後期末の定期試験再試験で不正を疑われる行為があったため、学生指導委員会の業務を遂行した。研究倫理規程等の原案を作成した。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
①知育玩具による体験学修とヴィジュアル・プログラミング学修を組み合わせた授業のアンケート調査を実施したが、結果をまとめるまでに至らなかった。
②『保育所保育指針』について漢字の分析を行い、その結果を本学紀要に掲載した。
③「情報科学」の授業の一部である Microsoft Word の学修の動機付けについて検討し、学会発表及び学会誌への論文投稿を行った。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．①1 年次必修科目「情報科学」と連続性を図ることで、2 年次必修科目「保育方法論」の一部としての ICT 活用に関する授業内容をより充実させる。
②2 年次選択科目「生活とアート」の授業内容を 8 回実施へ向けて見直す。

２．障がい学生支援委員会、学生指導委員会、さらに、新たに設置された研究倫理委員会の業務を遂行する。

３．①知育玩具による体験学修とヴィジュアル・プログラミング学修を組み合わせた授業のアンケート調査をまとめる。
②Microsoft Word 学修の動機付けの検討に倣って、Microsoft PowerPoint の学修について検討する。

令和４年度　「福井　昭史」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：幼児教育学科	職名：教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　保育者養成における音楽教育の課題とその解決のための指導方法を研究する。

２．　音楽実技の科目において、ピアノ初心者の技能に対応した指導の在り方の究明と教材開発を行う。

３．　音楽教育の指導方法と評価、教材の研究を行う。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．保育者として身に付けるべき音楽の知識、技能等を明らかにし、その育成カリキュラムを開発する。
２．昨年度作成した初心者用ピアノテキストを本年度より活用し、それを用いた指導方法の開発とその検証に当たる。
３．初等・中等・高等教育の音楽教育の教育課程、教育方法、評価、教材等の研究を行う。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

授業時数が半減した「子どもと音楽表現」では、音楽の基礎的な理論、音楽の感受と表出、それによる教育の在り方、創造的な表現活動とその教育効果に内容を精選するとともに、体験を通して知識を身に付けることができるような指導計画を作成し授業にあたった。

音楽の表現技能に関する授業科目の「子どもの歌と伴奏法」（２年）が選択教科となったことから、１年次の「保育と音楽表現」で基礎的な技能の定着が課題となった。そこで、担当する学生の能力や技能に合った教材を用い、各々の技能の向上を主として評価する縦断的な個人内評価の視点で学習を展開し、学生が意欲をもって学習に取り組めるように努めた。その結果、学生の授業評価では概ね好評であった。

２．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

音楽の表現技能向上を目指す１年生の授業科目「保育と音楽表現」では、ピアノ演奏について能力別のクラス分けによる指導体制とし、その中の未経験者を担当した。それらの学生は、学習課題の楽曲を既製の楽譜で演奏することが困難なことから、令和４年度からは授業で使用する独自の初心者用のピアノテキストを作成し、それを活用しての指導にあたった。その結果、学生は技能の向上を自覚でき、授業評価では概ね好評であった。

テキストは、演奏が容易な旋律の子どもの歌25曲とそのための基礎練習曲による構成で全60頁である。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」

本学の２年生を対象とする「保育と音楽表現」では、後期の課題の一つとしてピアノ連弾を課しているが、学生の好みとする楽曲で技能のレベルに合ったものが少ないことから、選曲に苦労していた。そこで、演奏が容易で学生が満足できる楽曲を目標にピアノ連弾曲を創作した。曲目は、よく知られた歌、ディズニーや宮崎駿監督の映画音楽等の「ドレミの歌」「翼をください」「星に願いを」「もののけ姫」「いつも何度でも」「春や秋の歌のメドレー」などであり、この中の数曲を学生が演奏した。

本年度の取組みはピアノ実技の専門教育における教材開発が主なものであった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学生の音楽的な能力や技能の実態を調査し、それに合った指導の計画と方法を検討する。選択教科となる「子どもの歌と伴奏法」については、カリキュラムの見直しが求められている。
２．作成した初心者用のピアノテキストを活用し、その有効性を検証するとともに改善に努める。
３．音楽教育に活用する教材楽曲の研究と教材開発を引き続き実践する。

令和４年度　「武藤　玲路」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．授業について

①講義科目の社会心理学と臨床心理学について、成績評価のＳとＡの評価が７０％以上になるようにする。また、授業評価アンケートで全項目が４の評価以上になるようにする。

②演習科目のビジネスデータ活用１・２・３、ライフプランニング、プレゼミナール、ゼミナール、キャリアアップセミナー、インターンシップ、病院実習、フィールドワークについても同様である。

２．学務について

①学外実習（インターンシップと病院実習）について、３割以上の学生を参加させて就業体験をさせる。

②キャリア支援では、外部講師によるセミナーと実践型教育プログラムで、就職率９５％以上を達成する。

３．研究活動について

「短期大学の学修成果の可視化と学修支援の体系化」について、調査研究の成果を紀要等で３本以上発表する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．授業について

①心理学の講義科目では、アクティブラーニングで学生に考えさせる時間を設けた。授業の冒頭では前回の授業のポイントを質問し、授業の最後には理解度と感想を確認するリアクションペーパーの提出を求めた。

②表計算ソフト・エクセルの演習科目では、前半の授業でテキストに沿った基本的操作法を修得させ、後半の授業で応用問題と自由課題を与え、問題解決能力と論理的思考、主体性と学習意欲の育成に努めた。

２．学務について

①学外実習のインターンシップと病院実習の体験が就職活動や就職後の業務に役立つことを数回説明した。

②キャリア支援では、２年前後期のキャリアアップセミナー２の全体的な支援と面談による個別支援に加え、２年後期に実施した実践型教育プログラムにおいて、就職活動の具体的な行動計画と経過報告を随時実施し、クラス全体が就活に真剣に取り組む雰囲気を作り、早期に内定を勝ち取る意識づけを高めた。

３．研究活動について

「短期大学の学修成果の可視化と学修支援の体系化」をテーマとして、エンロールメント・マネジメント体制とアセスメントプランについて、本学の紀要に投稿した。また、短期大学コンソーシアム九州（JCCK）発足20周年記念の紀要に、これまでの調査研究のレビューを報告し、フォーラムにおいてもその成果を発表した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

講義科目の心理学の授業では、成績評価のＳとＡの割合が全体の約７０％あり、授業評価アンケートの全項目が４．６以上であることから、当初の目標は十分達成できた。しかしながら、演習科目のビジネスデータ活用では、成績分布に二極分化の傾向があり、理解度が不十分な学生が約４０％であることから、今後の課題が残った。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

①学外実習は、１年生１名／１８名中（５．６％）、２年生５名／２４名中（２０．８％）のみの参加だった。

②就職状況は、２年生２１名／２３名中（就職率９１．３％）が、例年になく早期に内定することができた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

「短期大学の学修成果の可視化と学修支援の体系化」をテーマとした研究成果を３本報告した。しかしながら、先行研究の検索や統計処理の手法、考察に関しては、学術的な論文のレベルに達しているとは言えなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学生の学習意欲と自己効力感を促進するような授業の目標設定や教授法、評価方法を工夫していきたい。

２．学外実習の参加を促進し、実践型教育プログラムを更に進化させて、就職支援と就職率を向上させたい。

３．学生の学習意欲を促進するようなエンロールメント・マネジメント体制の構築に取り組んでいきたい。

令和４年度　「中澤　伸元」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：教授　中澤　伸元
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．学生の自主的なイメージ、発想力を磨く。 ２．右脳を重要視した未来志向に切り替える。 ３．学生が臨場感、リアリティを磨いていけるような授業を展開する。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．人と違った考え方、発想力を提案させ、それを実践してみて自らの感覚に磨きをかける。 ２．左脳中心の常識的な考え方を右脳重視に切り替える。 非合理な表現の訓練を楽しみ、無限能力を引き出す。 ３．臨場感、リアリティを磨くために、一つ一つの言葉を、喜びながら、怒りながら、悲しみながら、様々な感情の違いを学ぶ。 以上を毎回の授業の中で取り入れていく。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学生全員の名前を憶えていたので、学生一人一人に対する言葉の投げが的確でスムーズにいった。 積極的に授業に取り組んでくれ一人一人が自分と向き合っている姿勢が見えた。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」 意識を過去現在の自分ではなく未来意識の非合理世界をリアルにイメージし表現することには課題が残った。。 ただ意識改革はできたと思う。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」 イメージ力を楽しむ訓練に慣れていなかったが、台詞の反応、相手との会話等はうまく表現できた。 訓練には慣れていなかったが学生たちが楽しんで取り組む姿にはやる気を感じた。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．歌詞の世界に自分が存在しているかのように詞を読ませる。 ２．無限能力の出し方を理解しやすく実践を含め指導する。 ３．喜怒哀楽の表現練習の徹底。リアルな表現。臨場感のわかりやすい訓練を徹底する。	

令和４年度　「松尾　公則」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：幼児教育学科	職名：教授　特専教授　松尾公則

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．「栄養士の科学」は、 化学の基礎を理解させる。
「ヒトと生物」は、生物への関心を高めることで地球の生態系について考えさせる。

２．　ゼミでは、保育園において環境教育を実践できるような人材の育成を目指す。

３．　中庭庭園にある池の保護に努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．モル濃度を理解させることを目的として、丁寧に時間をかけて説明する。
学生の知っている生物の話題を中心にして講義を展開させる。そのことで生態系を守ることの重要性を認識させる。

２．今年の学生は、動物などの生き物に対する興味関心が少ない。そのような学生に幼児教育における小動物の果たす役割について理解させ、少しでも関心を持てるように活動する。

３．池の生物調査を実施する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
栄養士の科学では、基礎的な学力を十分につけることができたと思う。
ヒトと生物では、就職後の勤務先で役立つ知識や生き物とのかかわり方について十分に学ぶことができたと思う。

２．自己評価「 [Ｓ]・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
子どもと自然環境のゼミ生として、自然とのかかわり方や自然の中での遊びについて学ばせることができた。コロナ禍ではあったが、特別支援学校のカエルの授業を通して、障害を持つ子どもとのかかわり方も体験させることができた。興味関心の少ない学生の集団ではあったが、一年間の活動を通して、それぞれが大きく進歩したと思われる。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
池の中には、コイとメダカぐらいしか生息していないが、ヒキガエルの産卵によりオタマジャクシが５月いっぱいまで見ることができた。まだ、アメリカザリガニが生息しているので、今後の推移も見守っていきたい。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　栄養士の科学では、学力の差が大きいので基礎学力のない学生に焦点をあてて指導していきたい。
ヒトと生物では、身近な興味のある生物に焦点をあて、興味関心を増大させたい。

２．　生き物に対する興味関心を増大させながら、現場で役立つ知識や技能を学ばせたい。

３．　池の自然度が高くなっていくように努めていきたい。

令和４年度　「濵口　なぎさ」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．講義・演習などに関わらず、全ての授業で学生の理解度を把握するよう心掛け、より効果的な授業を目指す。

２．配慮が必要な学生に対する観察を怠らず、コース会議で積極的に情報共有を図る。

３．日商 PC 検定と MOS 試験の合格者を増やす。登録販売者試験の合格者を出すために対策講座の充実を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．学生の理解度を把握するため、提出物のチェックは次回の授業までに行い、早めにフィードバックを行う。リアクションペーパーを活用する。

２．月１～２回実施予定のコース会議にて、課題のある学生・配慮が必要な学生について情報共有を行い、問題の早期発見と解決を図る。

３．日商 PC 検定は早めに検定実施日を明示し、学生たちが受験計画を立てやすくする。MOS 試験は前期末からの実施を目指す。登録販売者試験では 2L に対して後期の実践型教育プログラム期間を有効に活用し、合格者が出るように対策講座の充実を図る。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 [S]・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
提出物のチェックとフィードバックは計画通り実施できた。特に前期では分かれていた初心者クラスと経験者クラスが一緒になる「ビジネス文書作成 2」では、課題提出の際、全員にリアクションペーパーを提出させ、学生一人一人の理解度を把握してフォローすることができた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」
2 週間に 1 回程度のコース会議にて、欠席が続く学生については情報共有を行いその都度チューターを中心にフォローしてきた。メンタル面での課題を抱えた学生への対応は難しく、コース内だけでは不十分だと感じている。事例によっては学生相談室等、専門家によるカウンセリングへの引継ぎ方法などを、具体的に考える必要がある。

３．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
日商 PC 検定については、取得を希望する学生全員が合格することができた。また、登録販売者試験にも 1 名が合格した。毎月 1 回の受験実施日を明示し、受験を促したが、随時試験可であることで「準備が間に合わないので来月受けたい」という学生が多くなり、受験意欲の継続にマイナスに働いている面があると感じる。いつまでに合格するという明確な目標を設定して受験するよう学生たちに指導する必要があると感じる。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．演習系の科目では、今年度と同様に丁寧な提出物チェックと学生の理解度把握に努める。講義系の科目では、双方向の授業になるよう心掛け、学生の理解度を把握するためにも意見収集の方法を工夫する。

２．課題のある学生・配慮が必要な学生については、コース内での情報共有を行い、必要に応じて学生相談室や外部機関との連携を図り、問題の早期発見と解決を図る。

３．学生たちが 2 年後期の実践型教育プログラム期間を有効に活用し、卒業までに希望する検定に合格でき、さらに上位級にも挑戦するような意欲の継続を促す指導を行う。

令和４年度　「本村　弥寿子」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：幼児教育学科	職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　授業内容及び方法の改善を図り、担当科目のすべてにおいて学生満足度 80%を目指す。

２．　学生対応弥授業内容及び方法等について、学科内の情報区間や情報共有を丁寧に行う。

３．　保育に関連する情報収集及びに努め、授業改善に生かす。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．配慮の必要な学生や学力の低い学生の理解度を把握し、必要に応じて丁寧に対応する。

２．　学科教員間のグループラインや学科会議を利用し、細やかな情報共有を図る。

３．保育者養成校及び保育現場教職員との意見交換や情報共有を行い、学生の実態と保育現場の要望を踏まえた授業内容を考える。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

授業全般において進める速度を緩めたり繰り返し伝えたりして、理解に時間がかかる学生を取りこぼさないよう配慮した。また、できるだけ現場の様子を具体的に話し、保育の実際を学生がイメージしやすいように心がけた。そのため、学生の自己評価における理解度は平均 89.1%と高く、それゆえ授業に対する満足度も 87.6%であった。教員側の評価では、C 評価の学生が平均 12%、カリキュラム論においては 30%強であった。C 評価が 1 割以下になるよう、カリキュラム論においてもせめて 2 割程度になるよう授業内容の改善が必要である。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」

急な連絡もグループラインを使用することで、そして、月に 2 回学科会議を行うことで、細やかに情報交換ができたと考える。しかし、女子学生ゆえの問題や悩みは全教員に伝えることができない場合があり、教員内の学生理解や支援に不行き届きな点が生じてしまった。守秘義務を守りつつ全教員でいかに学生を支えるか、さらに工夫が必要であると考える。

３．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

実習巡回指導時の現場教職員との情報交換に加え、英明幼稚園諫早の研究発表ややまだこども園の研修会、さらに環境教育や保育実習の研修会で指導助言や講師を務める機会を得ることができた。その際見聞きした現場の様子を学生に伝えることで授業内容のより深い理解につなげるよう意識した。また、現場の保育者と学生指導について情報交換ができ、学外実習や就職後を見通した学内での学生指導について示唆を得ることができた。今後、学外実習の事前事後指導の改善に活かしていきたい。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．授業内容及び方法の改善、定期試験・課題の結果のフィードバックなど、 配慮の必要な学生や学力が低い学生への対応を工夫する。

２．会議や連絡ツールにより教員間で密に連携を取り、学科教員全員で一貫性のある教育活動を行えるようにする

３．　保育現場や保育者養成校との連携を取り、よりよい保育者養成方法・内容を模索する。

令和４年度　「中村　浩美」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．コロナ過でのマスク着用によって表情が乏しく声も小さくなってきている事が音楽表現の在り方や笑顔での挨拶と反応に影響するため、マスク着用、またはマウスシールド着用においても意識してその重要性を指導していく。

２．学生の人前で歌う羞恥心を少しずつ緩和しながら保育現場で必要とされる歌唱を意欲的に楽しんで歌えることに重点をおく指導を行う。

３．発声法や地声からファルセットへのチェンジ音域の悩みや疑問を解決できるための技術面を指導するために、学生各々の声質を早く把握して不安を軽減できるようにする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．体幹を意識した姿勢での腹筋と腰筋、背筋の使い方、口角や表情筋アップによって出しにくかった声や、初めて出せた声を発見し、その上に楽曲のイメージや歌詞の解釈と歌詞読みの大切さを理解しながら、自身に繋げて多種多様な歌に取り組めるよう確認していく。

２．子どもが大好きな手遊びのレパートリーを増やしながら、学生のパフォーマンスへの興味と引き出しを多く持てるために、学生からのアイデアや流行りの手遊びを共に研究する授業とする。

３．自身の声を受け入れずコンプレックスを持っている学生が多いため、どんな声でも個性であり受け入れられるメンタル面の強化や、受け入れる勇気とトライする意欲を高めるレッスンを行う。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
コロナ渦中でマスクやマウスシールドを使用しての歌唱指導で難しかったが体の使い方や表情筋肉アップの重要性を繰り返し指導できた。当初は口角アップや表情筋アップからの笑顔がどのような意味を成しているのか理解していても自分の表情とどう違うかを認識する事も毎回の授業で確認していた。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
楽曲がどんな意味をもたらすのか、どんなイメージが湧いてくるかをみんなや一人ずつでも絵本の読み聞かせのように読んでみる事によってそれまで考えた事もなかった楽曲の歌詞の意味や思いが理解でき、イメージも浮かび声の出し方歌い方に良い変化が生まれた。このイメージ力が手遊びうたなどのパフォーマンスにも影響をもたらした。学生から発信するパフォーマンスも興味湧く授業取り組み、展開となった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
みんなと一緒に歌う事で、かえって自身の声や音程に問題があるのかと言う不安でしっかりと声を出せなかったようだが、一人ずつ距離を置いてマスクを外して歌わせると、羞恥心は少しあっても楽しく歌声や声量にも想像を超えた良い印象があった。さらに良くなるための改善方法を指導してみんなで認め合う事は自信に繋がったと考えられる。手遊び歌も同様であった。授業外で個別にレッスンを希望する学生もおり、個人に見合った指導によって改善できた事も多く、学生自身も改善できつつある事、改善できた事に満足していた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．コロナ渦中での声楽授業のため、感染対策に一層の気を配ばりながら行う。新１年生は初めての声楽授業となるため、初めて知る発声方法・表情・筋肉の使い方を実践しながら理解し、子どもの歌に興味を持って積極的に歌えるよう、羞恥心を持たないための工夫ある授業にする。 また、マスクをしていても表情豊かに歌える楽しさとその表現が出せるための工夫をする。

２．歌詞が持つ大きな意味に音楽が乗っていく事。それによってイメージ力が湧いて心を育む音楽になる事がおもしろいと思える授業内容を研究する。また、イメージ力ある歌唱表現・手遊び表現を指導する事が子どもの気持ちをどれだけ引き寄せるかをグループ発表で気付ける取り組みをする。

３．自身のどんな声でも素晴らしい個性である事を受け入れさせ、改善方法の指導は勇気をもって受けられる事、改善後の声・歌唱・表情との違いを理解させながら、成長できるための継続できる授業や、授業外でのレッスンも強化しながら、歌の素晴らしさ、子どもと歌う楽しさ、喜びに通じる事をその学生に見合った方法を

考えて指導する。

令和４年度　「太田　美代」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース	職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．（授業）栄養士実力認定試験における「給食経営管理論」での正答率６０%以上を目指す。
２．（学務）栄養士コースの職員が一丸となって短大の目標達成に努めることができるよう支援して、食を通して社会に貢献し、自らも夢の実現に向けて前向きに努力することのできる学生を育てる。(就職率並びに学生アンケート等を指標とする)
３．（研究）「小学生の食育」をテーマに小学校や関係機関と連携した食事マナー向上や食の選択能力の育成を図る方法を探る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　１年生の授業ではスライドとワークシートを活用し、まとめで過去問にもあたらせて知識の定着を図る。またリアクションペーパーを使って個別対応を行い、学習への意欲を喚起する。２年生は「チャレンジタイム」で修得度別グループを作って少人数指導を実施する。学力に関してかなり心配な学生もいるので、授業や「スタートアップセミナー」での教育サポートスタッフの運用に加え、きめ細かな対応で支援する。
２．　定期的な会議で報告・連絡・相談を密にし、職員の同僚性を育成する。TS、PS の円滑な運用に努め、学生の主体的な学びを支援するとともに、学生の活躍の場を設けて自己肯定感を高め、本学での学びが将来に活きると考える学生９０%以上を目指す。
３．ゼミナール活動で小学校や学童保育と連携をし、児童の食生活の改善に向けて、食事マナーの指導や食の自己管理能力を育成するための指導を工夫し実践して、より良い食生活をしようとする児童を増やす。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
栄養士実力認定試験における「給食経営管理論」の正答率は 74.0%と目標を達成することができた。しかし、個別にみると正答率が 50%に満たない学生が 22 名中３名いた。実務に直結する科目なので、継続して丁寧な指導に当たりたい。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」
毎週コース会議を開催し、円滑な意思の疎通に務めた。２名が新メンバーとなってのスタートだったが、率先して協働できる良い職員集団となっている。実績としては、就職率 89.5%。本学での学びが将来に活きると考える学生は卒業時アンケートで 86.9%であった。目標まであと一歩のところであるが、コース職員の取組の姿勢は大変良かった。

３．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
近隣の小学校２校の協力を得て、食事マナーの指導と給食が無い日の昼食についての指導を実施することができた。新型コロナの影響で日程変更や訪問回数の減はあったが、計画を修正しながら取り組むことができた。ほとんどの児童が正しい箸の持ち方をしようと心掛けたいと回答し、コンビニで購入する昼食にトマトを買い足す姿が見られるようになるなど意識の向上が見られた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　チャレンジタイムと並行してｅラーニングを実施するための環境整備を行い、主体的な学習を促す。

２．就職率100%を達成するため、キャリア教育を充実させ、早い段階から就職を意識して学生生活を送るよう働きかける。
３．次年度のゼミのメンバーには、特別な支援を要する学生が複数名所属することとなった。学生のニーズをとらえてじっくり取り組むため、卓袱料理試食会は年１回に戻し、ゼミの時間を確保する。

令和４年度　「古賀　克彦」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース　　職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 栄養士養成施設協会が実施する栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上【授業】。
2. 学外実習の円滑な運営（実習先評価がＡ評価の学生が80%以上）【学務】
3. 紀要の執筆【研究】

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上【授業】
   - 毎回授業前に栄養士実力認定試験問題出題し解説を実施。また、授業において頻出分野の解説強化
   - 定期試験に栄養士実力認定試験を一部採用
   - スキルアップ特講の内容充実
2. 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱにおいて、実習先の評価向上【学務】
   - 学外実習総合演習での指導強化
   - 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱの直前指導および事後指導強化
3. 紀要執筆【研究】
   - 計画的に準備を行い執筆する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」

令和４年度栄養士実力認定試験の結果は昨年度より低下した。臨床栄養学は短大平均と同じ点数、栄養指導論は短大平均を上回る結果となった。成績が昨年度より向上した理由として普段の授業や定期試験において栄養士実力認定試験に取り組む機会を増やし、多くの問題を溶かしたためだと思われる。次年度は全国平均を超える成績を目指し、今年度の対策に加え、栄養士実力認定試験対策講座の内容をさらに充実させていきたい。

科目名	全国平均(正答率)	短大平均(正答率)	本学(正答率)
臨床栄養学（6 点満点）	3.6 点（53.3%）	3.1 点（45.0%）	3.4 点（45.0%）
栄養指導論（6 点満点）	4.2 点（78.7%）	4.1 点（58.3%）	3.9 点（63.3%）
全体（85 点満点）	50.9 点（55.5%）	47.0 点（49.6%）	40.2 点（49.8%）

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・[Ｃ]・Ｄ 」

令和４年度の学外実習Ⅰ及び学外実習Ⅱの評価は以下のとおりとなった。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響の為学外実習Ⅰは学内で実施した。受講態度が全体的に悪く S、A 評価はともに減少した。学外で実習を行った学外実習Ⅱにおいても S、A 評価が減少し、B、C 評価が増加した。来年度は B･C 評価の学生を減らし、S 評価、A 評価を増やせるように、評価が低くなりそうな学生の指導にも注力していきたい。

	S	A	B	C
学外実習総合演習	4 名(18.18%)	7 名(31.82%)	3 名(13.64%)	8 名(36.36%)
学外実習Ⅰ	1 名(4.55%)	7 名(31.82%)	8 名(36.36%)	6 名(27.27%)
学外実習Ⅱ	4 名(18.18%)	4 名(18.18%)	9 名(40.91%)	5 名(22.73%)

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」

令和４年度の紀要は必ずしも計画的に執筆されたとは言えない状況であった。令和５年度は改善したい。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 栄養士実力認定試験において令和５年度は担当科目の得点を全国平均上回るために、授業内容の見直しを行うと同時に、教えている内容の取捨選択を行い、重要な部分は確実に修得させていきたい。また過去問を用いた試験対策に合わせて、授業内容の理解度を上げていきたい。
2. 学外実習に関しては令和５年度も学外実習Ⅰも学外実習Ⅱも学外で実施する予定である。ま令和４年度は今年度減少したＳ・Ａ評価が増加するように指導を行っていきたい。また、評価が低くなりそうな学生の成績向上の為、個々の特性に応じた指導を行っていきたい。
3. 令和５年度の紀要執筆は計画的に準備し、執筆を行いたい。

令和４年度　「荒木　正平」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：幼児教育学科	職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．担当授業の内容充実と、学習成果の向上。

２．新たに担当する「学生相談室」業務体制の確立と、「キャリア支援」における業務の充実化に向けた体制の整備。

３．学会・研究会に向けて研究成果をまとめ、報告を行う（論文掲載、または学会での発表）

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．講義形式の科目では、教科書を中心に知識の定着を図る。あわせて、学生が興味を持って取り組めるよう保育現場での支援を具体的に想定した資料の配付のほか、DVD などの教材も活用する。演習系の授業では、新型コロナの感染拡大の影響を踏まえながら、グループ演習を再度取り入れて実施できた。

２．「学生相談室」については、担当教職員や他の委員会とも連携し、適切な支援を実施した。「キャリア支援」については、センター長とも連携し、体制整備を進めた。

３．「特別な支援が必要な幼児の教育・保育」に関する研究に必要な聞き取り調査の中断により、予定の紀要論文の投稿準備が進められていない。関連テーマでは、研究の成果をテキスト作成にいかすことができた。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　コロナの状況に応じて対応しつつ、本年度は個人演習だけでなく一部グループ演習形式での実践を再開できた。予定通りとはいかず別対応を余儀なくされたグループ演習もあったが、テーマを設定してのレポート学習により、学生の意欲を引き出す取り組みが実施出来た。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　「学生相談室」業務においては、各担当教職員間で情報共有しながら学生支援を進めることができた。「キャリア支援」として実施してきた私立幼稚園連合会と連携しての県内就職に関する事業については、今年度の実施の打診はなかったが、その他の支援については計画通り進めることができ、学生評価もやや改善された。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
　前述の通り聞き取り調査の中断により、予定論文の執筆が保留となったものもあった。一方、別テーマにおいては、テキストの作成という、新たな形でこれまでの研究を活かす機会をいただくことができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．担当授業の内容充実と、学習成果の向上。保育実習Ⅲの実施体制の強化。

２．「学生相談室」に関する連携体制の確立と、「キャリア支援」における業務の充実化。

３．学会・研究会に向けて研究成果をまとめ、報告を行う（論文掲載、または学会での発表）

令和４年度　「江頭　万里子」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　授業：担当科目で、学びの質の向上を図る
２．　研究：演習科目における効果的な授業法を検討する
３．　学生支援（検定）：秘書検定の合格率が上がるよう、学生支援を行う。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　演習科目で、予習または復習のための動画を作成する
２．　演習科目で反転授業を実施し、効果を検証する
３．　自己調整学習に併せて声掛けを行い、希望者には個別指導を行う。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
秘書実務１（22L）で３本、秘書実務２（21L）で１本、事前学習用の動画教材を作成し、YouTube で限定配信した。その結果、22L のこの授業の授業外学習時間の平均が昨年度より 34 分増加した。また、動画による事前学習により、「対面授業の学びが円滑に進んだ」、「動画で復習もできる」「今後も動画配信を続けて欲しい」という感想を得たことから、学びの質の向上に効果があったものと考える。

２．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
秘書実務２（対象 21L）で１回、秘書実務１（対象 22L）３回、反転授業を行い、21L を対象とした結果を本学紀要第 48 号で報告した。

３．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
個別指導を希望した 21L（４人）に対して、２人ずつ分けて、４月から６月の検定まで基本的に毎週 90 分個別指導を行った。内２名は６月の検定で２級に合格することができたが、１人は不合格、１人は受験しなかった。２級未取得者で２年次に受験しなかったのは２名 8.3%であった。入学後卒業までに２級または準１級に合格したのは 20 名、最終取得率は 83.3%であった。前年度の 20L は、16 名 69.6%であり、取得率は 13.7%向上した。22L は、１年生終了時点で、取得率 88.2%であり、21L に比べ取得率が向上した。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　授業：動画の内容やワークシートを見直し、学びの質の向上を目指す。
２．　研究　：反転授業の回数を増やし、その効果を検証する。
３．　学生支援（検定）：秘書検定の取得率が向上したので、引き続き本年度の取り組みを継続する。

令和４年度　「南條　恵」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：講師
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
４．担当科目において、学生が理解しやすい授業の方法、教材の提供等についての検討を行い、学生の知識・技術習得の向上をはかる。また授業内容の量の調整を適宜おこない、学生の理解面において負担にならないよう留意する。 ５．紀要・図書委員長として、各委員と連携をとりながら図書館利用者数の増加、紀要の質の向上にむけて周知をおこなう。 ３．査読有の論文を執筆する。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
２．リアクションペーパー等を活用しながら学生の習熟度をはかりつつ、授業内容のねらいへの到達、理解の促進をすすめていく。 ２．積極的な図書館の利用のため、授業の中での参考文献の紹介や調べ学習を取り入れた授業の展開等、各教員の方への協力を呼び掛ける。 ３．　学会誌等への論文投稿を目指す。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」 学生の理解状況をつかむのに苦労した。想像以上に学生が理解していないことが多かった。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」 授業の中で図書館利用につながる課題等を示したが、思うように図書館利用につながらなかった。図書館を利用しようとする意識も薄かったようだ。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」 全くすすまなかった。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．より易しく難易度を下げた授業が必要である。 ２．本を読むことへの習慣づけがないので、図書館を利用する楽しさというところから知らせる必要がある。 ３．今後も努力を要する。	

令和４年度　「船勢　肇」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．講義では、学生が考える機会を用意する。原理の講義では、学生が苦手とする抽象的かつ高尚なテーマについても避けることなくあつかう。ゼミナールでは学生が高度な理解に到達できるよう取り組む。

２．学生支援委員会では、学生が主体性を生成できるよう取り組む。

３．科学には人類全体への奉仕が課せられていることを念頭におき、単著出版の足がかりを構築する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．発問・自由記述・グループディスカッションを取り入れる。高尚なテーマについては、学生からの質問に対応する機会をつくることで理解の定着を図る。ゼミナールでは、個人面談を重視しながら、適宜助言を与えていく。

２．学生には、問いかけのスタイルをとりながら、他の委員と連携を深めつつおこなっていく。

３．南原繁について論文の投稿を目指す。理論書を精読し、論点の整理をおこなう。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
概ね理解の定着を図ることはできたようだが、水準を上げることができなかった。初年次セミナーについては、なじみがないテーマについて、学生が考える機会を提供できたと思われる。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学生間の連携・早い段階からの準備に課題があったが、例年よりは依存心がなくなったように思われた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
投稿には至らなかった。紀要論文を執筆した。
なお、前年度出版した『学問の自由の国際比較』については、『朝日新聞』・『図書新聞』にて紹介され好評を得た。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．個々のテーマの教材研究に取り組む。学問的観点から意義や水準を考え、取り組む。

２．早い段階から、学生のペースを確認し、関わる。

３．より多くの時間を研究に費やし、科学には人類全体への奉仕が課せられていることを念頭におきながら、単著出版の足がかりを構築する。

令和４年度　「大徳　朋子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．担当科目において学生が習得しやすい授業内容や進め方を検討する。

２．配布資料等についての研究、検討をおこない、学生の理解、知識習得の向上、振り返り易さにつなげる。

３．個人研究を充実させる（乳幼児の描画と心理に関する研究）

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　リアクションペーパー等を活用して学生の授業内容への習熟度を把握し、講義目標への理解の促進をすすめていく。

２．具体性のある講義を心掛け、自ら考え主体的に受講できるような資料を提供する。

３．　研究を進め結果を保育者へフィードバックすることを目標とする。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

リアクションペーパーなどから学生の理解度を知るように心掛け、机間巡視をする際に声をかけて授業へ意欲的に参加できるように配慮した。成績から分析すると大半の学生は理解できたと思われたが、C 評価の学生一定数いたことからさらに理解度をあげることが課題である。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

教科書を進めていくだけでなく、より具体的な子どもの様子や現場をイメージできるように話を進めた。また現場で実際にされているような事例を検討するといったことを取り入れ、自ら考える工夫をした。グループ討議は有意義であるが、消極的な態度の学生に対してどのように主体性をもたせるかは課題であり、配慮が必要だと思われた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

データを収集し、まとめ始めたところであり、計画通りには進まなかった。今年度はまとめたものを現場にフィードバックすることを目標とする。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学生の授業内容への習熟度を把握するためのリアクションペーパーなどの利用を継続する。授業内容を工夫し、理解が進むように改善していく。

２．具体性のある講義を心掛け、自ら考え主体的に受講できるようすすめる。グループでの討議に際しては役割を持たせるなど主体的に取り組めるように配慮する。

３．研究結果をまとめ保育者へフィードバックすることを目標とする。

令和４年度　「桑原　倫子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：助教

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．授業について
講義や実習において使用する資料を見直し、より理解度の高まるものにする。

２．　研究活動について
長崎県立大学でデータを取得し、昨年度分と合わせて再び解析・分析し、まとめる。

３．学務について
料理レッスンや公開講座などで自分の強みを生かし、本学の魅力を外部に発信する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．授業について
講義においては、一部配布資料やスライドを穴埋め形式やワークシート形式などに改良し、より理解度の高まるものにする。実習においては、配布資料(レシピ)を書き込み形式のものに変更する。また、料理や食材、調理法などについての資料部分も増やし、中身を充実させる

２．研究活動について
長崎県立大学でのデータ取得は夏前に実行し、夏頃は昨年度分と合わせて解析・分析し、まとめる。

３．学務について
料理レッスンと公開講座では最低１回ずつ主担当を務め、参加したくなる魅力的な講座を行う。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
講義においては、配布資料を穴埋め式にしたりスライドや写真を増やしたことにより、学生の理解度の向上に役立ったと考える。実習においても、配布資料(レシピ)を書き込み式にしたことは、学生の理解度の向上に繋がり、かつ無駄のない方法で好評であった(授業評価アンケート自由記述より)。しかし、調理学実習Ⅲにおいて、授業の全体的満足度の調査項目で、「授業に満足できなかった・やや満足できなかった」が 14%いたことは、改善点がまだまだ存在したことを示すと考える。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
『若年女性の生活習慣と体格に関する研究』のために、長崎県立大学女子学生 32 名のデータを収集した。昨年度収集した 28 名分のデータと合わせて、解析・論文作成中である。

３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
料理レッスン、公開講座ともに１回ずつ主担当を務め、講座を行った。特に公開講座では、募集後１週間ほどで定員に達し、興味関心の高さが感じられた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

特記事項なし

令和４年度　「桑原　真美」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース	職名：助教

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．講義科目の授業評価における全体的な満足度について、平均 4.3 以上を目指す。

２．　栄養士実力認定試験対策担当として、コースで掲げた目標である「短期大学平均を上回る者 60%以上、A 判定 50 %以上」の達成へ向けて対策の強化を図る。

３．　紀要を最低１本執筆する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　理解度および意欲向上のため、毎回の授業終了時に提出する出席カードへ質問または学んだことを必ず記載するように指導する。授業時に練習問題を解く時間を設け、自身の理解度を把握させることで小テストおよび定期試験に向けた意欲向上を図る。

２．前期よりゼミナールの時間に試験対策の時間を設け、学生に試験へ向けた学習の習慣を身に付けさせる。また、前期の対策を通して実力認定試験受験に対しての動機づけを早い段階で行う。

３．　今年度はゼミナールで SDGs が掲げる食品ロス削減のためのレシピを開発し Web 上で動画等を公開する「予定である。その公開方法および効果についての考察をまとめる。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 [S]・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
講義科目の授業評価における全体的な満足度は前期の栄養学Ⅰ・食品衛生学の平均が 4.6、後期の栄養学Ⅱ・公衆栄養学の平均が 4.55 であり、目標を達成することができた。学生の理解度および意欲に対する評価も大幅に改善していた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」
ゼミナールの時間にチャレンジタイムと称した学習の時間を設けることができ、意欲的に学習を行う学生も見られた。しかしながら、短大平均を上回った者は 50%であり、コースで掲げた目標である 60%は達成できなかった。A 判定の者は 54%であり、コースの目標である 50%以上は達成できた。

3. 自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
紀要１本執筆の目標は達成できたが、当初の計画であった SDGs 関連の内容ではなく、栄養士コース独自の e-ラーニング導入へ向けての研究報告を行った。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　講義科目の全体的な満足度、理解度、意欲の評価は昨年度より改善していた。令和４年度生は出席カードに学んだ事を毎回記入させるようにしており、身についたことやわからないことを明確にすることが学習意欲の向上に少なからず寄与するものと考えられる。次年度も継続していきたい。

２．　学生によっては実力認定試験本番まで自発的に取り組んでいない者も見受けられた。次年度もゼミナール時に学習の時間を設けるが、より早い時期から学生が自発的に学習に取り組むようコース教員全員で支援をしていく。

３．　e-ラーニングシステムの導入に向けて、令和４年度はユーザビリティテストを実施した。令和５年度４月から５月にかけての導入を目指している。導入後の学生の学習行動の変化や成績に与える効果についての検証を実施し、報告する。

令和４年度　「山中　慶子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：助教

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．学生が現場で活かすことができる知識・技術の習得を図る。授業評価 4.0 以上を目指す。

２．オープンキャンパスや公開講座など学外への広報活動や、SNS を用いた授業動画配信を行う。

３．学生の学外実習における造形での困難事項を調査し、研究する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．今年度から選択科目となる授業では、より専門性が身につく授業内容を講じ、学生の知識・技術の習得を図る。

２．高校生に焦点を当てた造形授業や、公開講座を行う。また、SNS を用いた授業動画の配信を実施し、学生募集につなげる。

３．実習で幼児の造形活動を行う際、学生の困難となっている事項は何かについて調査し、論文にまとめる。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
選択科目「子どもと造形表現（応用）」「子どもの絵と製作Ｉ」は、約 40 名の学生が受講した。意欲のある学生が多く、製作への取り組み、理解が早く、必修科目に比べてより専門的な知識・技術の習得が図られたのではないかと考える。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
長崎女子高校２年生を対象にした体験授業や、一般の方向けの公開講座を行い、アンケートから満足度は高かったように思う。しかし、SNS での授業動画配信は、前期のみの配信となってしまった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
実習後の省察から、学生の造形活動に関する困難事項を抽出し、グループワークによって解決策を考えるという授業を行った。実習での実践からの意見を調査することで、学生が直面している問題を把握することができたため、今後の授業構成に活かしていきたい。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．シラバスに沿いながらも、 受講人数と授業内容の進度のバランスを図り、より有意義な授業内容になるよう毎回の授業計画を立てる。

２．対象の年齢や嗜好に合わせた造形について、幅広い活動ストックを増やし、実践する。

３．幼児期の造形に対する内発的動機や、その後の学びにつながる造形環境について研究を進める。

令和４年度　「髙橋　秀樹」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：助教

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　担当科目にて学生の学びの質の向上を図ると共に、ダンスセラピー論にてダンスセラピー・リーダー資格の資格認定者 20 名を目標とする

２．　科学的根拠に基づいた研究を実施、執筆し、impact factor 1.0 以上の海外誌への投稿を 1 本以上目指す

３．新型コロナウイルス感染拡大の中、学生支援委員会の行事の実施を目指す

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　ICT、電子機材、動画などを活用し、保育学生が子どもに指導を行える力を身に付けられるよう学びの環境を整える

２．妥当性と信頼性のある研究デザインの立案・実施後、執筆する

３．学生が主体的に企画した行事への指導をおこなう

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに（囲み線）を付ける。

１．　自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
該当科目の受講生は 57 名、資格申請者は 55 名と目標を達成した。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
科学的根拠に基づいた研究を実施し、impact factor1.0 以上の海外誌へ投稿をし、目標を達成した。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
コロナ感染予防対策を行いスポーツフェスタ及び弥生祭の実施をし、目標を達成した。しかし、規模を縮小したため、今後は以前の様な形態にて実施が可能か検討する必要がある。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　次年度は開講されないため、特記事項なし。

２．　投稿誌の査読等への対応を丁寧に行い、採択を目指す。

３．以前の様な形態にて実施が可能か検討する。

令和４年度　「一瀬　優美」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース	職名：実習助手

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　実習助手間や教員との情報共有を密に行う（報告・連絡・相談の徹底）

２．　授業及び担当業務（料理レッスン、各種ガイダンス、各種会計等）について記録を残し、担当が変更になってもスムーズに対応できるようにする。

３．　料理レッスンや公開講座等のイベント開催に際し、より魅力的なイベントになるようサポートをする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．気になる事柄については該当教員およびコース会議等で情報共有を行う。実習助手は他２名が新年度の為、声掛けを行いながら業務が滞りなくスムーズに行えるよう必要に応じてサポートを行う。

２．実習助手間での授業及び業務の担当変更等に備え、前任者からの引き継ぎ書をより充実させる。引継ぎがない新しいものについては新しく作成を行う。

３．Instagram の活用やコースの学生への呼びかけを行う他、進路ガイダンス等で高校生へ直接声掛けを行い参加者増加に努める。料理レッスンでは参加者の満足度が向上し学生獲得につながるよう、より細やかなサポートに努める。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 S・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　コース会議が週に１回と頻繁に行われていたため情報共有においては密にできた。他助手とも声かけを行いながら業務にあたることができた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・B・Ｃ・Ｄ 」
　担当教員やその年度で業務内容が異なるため引き継ぎ書としての作成が難しい部分もあるため、臨機応変に対応することが必要となる。概ねの業務内容については作成できた。

３．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　昨年に引き続き参加してくれる生徒も数名みられ、イベントを継続する大切さを実感できた。またガイダンス等でも直接呼びかけを行い、その場で直接申込を取るなど積極的に参加者増に努めた。参加者のアンケートでも 100%の生徒が「満足」という回答であった。また参加した３年生のうち 12 名中 4 名の入学が決まっており学生獲得へつなげることができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　次年度もコース会議が週一と密に行われる為、気になる事項については引き続き情報共有を行いながら、業務にあたる。新体制となる為、報告・連絡・相談の徹底を心掛ける。

２．　授業以外の業務において、担当助手のみが理解している部分もある為、互いに共通理解を図りながら助手全員が対応できるような体制を目指す。

３．　料理レッスンにおいては本学ホームページの他、ガイダンスや進学説明会でのチラシを見て申し込みをした生徒が多かったため、引き続き進路ガイダンス等での呼びかけを行う。本年度より更に Instagram を更新し、更に情報を発信していく。

令和４年度　「石橋　花琳」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：実習助手

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　教員や助手間での、報告・連絡・相談の徹底。

２．　調理実習がスムーズに進むよう準備を行う。

３．　学生の調理技術、作業効率の向上。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．授業内容や学生に関して気になる点は、報告・連絡・相談を行い、情報を共有する。
　業務中に生じた疑問点は、その都度相談し解決する。

２．担当教員と事前に打ち合わせを行い、授業内容を把握する。
　授業中は、調理実習の流れや使用した器具を記録し、次年度を見越した行動をとる。

３．時間内に調理実習が終えられるよう、学生の様子を見回り、声掛けを行う。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　報告・連絡・相談についてほぼ徹底できていたが、助手間で情報の共有ができていなかった場面もあった。大きなミスに繋がらないよう、些細な内容まで報告・連絡・相談をしていくことが必要である。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　担当教員と事前に打ち合わせを行うことで、授業内容をある程度把握し、事前準備等行うことができた。授業終了後には、実際に使用した器具や食材等を記録し、次年度の授業をよりスムーズに実施できるよう行動できた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　前期の授業では、自身のことに精一杯となり学生の様子を見回ることがあまりできていなかったが、後期の授業では少し余裕が出てきて、学生の見回りや声掛け等を行い、時間内に終了できるよう促すことができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　引き続き、助手・教員間での報告・連絡・相談を徹底し、情報を共有する。

２．　次年度は調理学実習担当教員が変更になり、授業内容も大幅に変更となること考えられる。打ち合わせを密に行い、授業がスムーズに実施できるようサポートする。

３．　次年度は、入学生の数が現在と比べ10人ほど多くなる。より一層学生の様子を見回り、声掛けを行い、時間内に授業が終了できるよう工夫する。

令和４年度　「有得　結」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース	職名：実習助手

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．授業がスムーズに行えるように準備を行う。

２．教授や他助手との報告・連絡・相談を密に行う。

３．「栄養士実力認定試験の短大平均を上回る者 60%以上およびＡ認定 50%以上」というコースの目標を達成できるよう、主に資料準備・分析でサポートする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．昨年の記録を基に、授業日から逆算し計画的に行動する。また、新しい内容の実験や昨年度から変更になった点については、記録を確実にしておく。

２．日頃から目配りを心掛け、授業に関することや学生の様子など気になった点は報告・連絡・相談する。

３．実力認定試験前に開講される栄養士スキルアップ特講において、模擬試験準備等でサポートにあたる。また各自の得意分野・苦手分野を把握できるようなデータを作成する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」

授業がスムーズに行われるよう、昨年の記録を基に事前に担当教員との打ち合わせや実験試料・試薬の準備を計画的に行った。しかし道具等の準備不足もありスムーズに授業を進めることができないこともあった。１年生の実験においてＴＡ（ティーチングアシスタント）の学生に対する実験操作等の補助があり、授業をスムーズに進めることができたかと思う。昨年度から変更になった実験については変更内容について記録に残すことに努めた。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

２年生に関してはレポート等の提出遅れが多く感じた。個人的に声掛けをしないようしていたが、期限内に提出できていない学生には主体性を尊重しつつ声掛けを行った。他助手との報告・連絡・相談に関しては、意識して行うことができたと思う。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」

栄養士実力認定試験の結果、短大平均を上回る者は 48%（11 名／22 名）、Ａ認定は 55%（12 名／22 名）と短大平均を上回る目標は達成できなかったが、Ａ認定は目標を 5%上回ることができた。「栄養士スキルアップ特講」では、問題毎に正答率を算出しまとめた資料を毎試験ごとに作成した。コース教員全員に配布することができなかったことが反省である。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．今年度の授業記録を基に、授業の準備を行う。また、学生の学びを減らすことがないよう程合いを考慮し丁寧な作業を心がけたい。

２．報告・連絡・相談は引き続き意識して行い、学生への支援・声掛けは必要であれば行う。

３．正答率の分析は今後も続けていきたい。分析結果や学生の話から「生化学」に苦手意識がある学生が多いことが分かった。栄養士実力認定試験において問題数も多く重要な教科である。現在、同授業の実験において担当助手をさせていただいているため、分析結果をお伝えし今後どのように対策を行うか考える。

令和４年度　「前田　功」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：事務局	職名：事務局長

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　今年度も円滑な事務局運営のために各種取り組みの推進を図っていく。新型コロナ感染症防止の観点から対策の徹底は引き続き行っていく。事務局内の業務分担については、一人二役の徹底を行っていく。

２．　教務としての業務を円滑に遂行するために、学務システムの完成を目指すとともに、Gmail の導入についても事務局職員や業者との連携を深めていく。

３．　ＳＤ研修会の計画的な実施と事務局業務の効率化をめざしてできるところから手を付けていき少しでも前進できるようにしていく。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　新型コロナ感染症拡大防止のために手指の消毒や検温の徹底を図るとともに各種コロナ関係備品など必要なものがあれば購入して対策とする。業務分担の一環としての兼務者の業務状況を見極め、アドバイスを行う。

２．　学務システムについてはかなり完成に近づいている。さらに業者との連携を深める。Gmail については教務担当者との連携を図り円滑な導入を目指す。

３．　課題解決に向けた SD 研修会を実施するために、朝礼時や教授会終了後の時間などを活用し実施していく。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　新型コロナ感染症対策としてあらゆる方策を実施した。その結果、クラスターの発生はなく、延べ 80 人ほどの感染者が出たが、その多くが家庭内感染であり、学内感染の発生は十分抑えることができた。事務局内業務の一人二役体制の徹底を図り一人が欠勤してもスムーズに対応できる体制を築いていくことができた。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　教務システムの完成やＧメールの導入など懸案の解決に向けて現時点でできることは実施できたと思われる。学務システムはＧメールの活用などあって、学生への連絡システムとしてはほとんど使用しなかった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・[Ｃ]・Ｄ 」
　課題解決に向けた SD 研修会の実施がなかなかできなかった。朝礼時や教授会終了後の時間などを活用し実施することを目指したが日々の忙しさに紛れてなかなかできなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．新型コロナウィルス感染症対策については今後も徹底していく。検温機の追加や消毒設備の充実については勿論であるが、感染症としての２類から５類指定への変更を受けてマスクの着用義務化をどうするかなど今後検討していくことが多いと思われるので機動的に対処していく。

２．学内環境に目を光らせておいて、不備なところがあったら迅速に対応していく。その整備について、本部との連携を図っていくことで学生の顧客満足度を上げていくようにしていきたい。

３．事務局員の練度を挙げていくためのＳＤ研修会の実施に向けて、自己点検評価室と今後とも連携をとってその実施を目指していく。朝礼時の連絡を重視し、課題の共有を図ると同時に学生へのサービス提供の視点から学生に対する丁寧な対応に心がけていく。３．

令和４年度　「髙井　達司」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：事務局	職名：入試広報室長

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．２回目を迎える「大学入学共通テスト利用選抜」は、活水女子大を会場に実施される。全ての業務を正確且つ円滑に遂行するため、昨年度の経験を活かしながら万全な準備体制で臨みたい。
２．プロジェクトメンバーの一員としての意識を日常より維持する。前年の繰り返しに終わることなく、新たな取組みや変革を日常意識し、これを表面化することが、自身の役割と認識する。
３．兼務者を含めた入試広報室の業務分担を再構築することで、業務量の平準化と各職員の特性や能力を効率的に発揮させる。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．膨大な関係書類の読込みと正確な理解に努めるとともに、関係機関（活水女子大学、大学入試センター、長崎県連絡会）や県内他大との連携を密に実施する。

２．ビジネス・医療秘書コースの改革は待ったなしの状況に直面しており、本学が取組むべき最重要課題と捉える。これに特化した実質的提言を行うこととしたい。プロジェクト会議において、実現可能でより実質的な提案を発信する。

３．年度途中の担当者替えが控えている。業務に支障なきよう計画的指導を実行する。本学の特色や実態を、事務職の誰もが共有できるよう準備する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
要員派遣については、試験監督を務めた９名の協力により、事故無く万事業務を完遂した。特に当大においては、前年とは違い派遣職員全員が監督業務に当たった。また大学入試センターとの事務処理は、全てがWebシステム上で行われたため、その知識習熟には本年も困難を来した。取り分け成績請求の業務は複雑さを極め、システム上における理解度を求められたので、IT技術に明るい教務課職員の協力を得ながら対応した。このことにより、特に問題なく順調に業務遂行できた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・[C]・Ｄ 」
具体的提言に至らず、入学予定者も20名に終わった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」
中途採用者への指導は、優秀な人材であったことに加え、繁忙期ではなかったので順調に推移した。
また兼務職員の指導が効果的に機能したので、例年通り順調な業務遂行に繋がった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．単独による業務担当は業務重要度の高さより大きなリスクを伴うため、副担当者を決め業務遂行に当たりたい。次年度の会場校は長崎総合科学大学。活水女子大学との業務量に相当の差異があるため、これを是正するよう求めたい。
２．愈々、事務局スタッフの分析力、提案力が試される。若手職員の力を借りながら本学の強みを高めていきたい。
３．事務局が抱える課題は少なくない。若手職員の能力を最大限引き出し、強固な事務局体制を構築したい。

令和４年度　「原田　実輝」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：キャリア支援センター	職名：キャリア支援センター長

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．兼務担当者や他部署との連携を深め、業務の効率化を図る。

２．引き続き新型コロナウイルス対策を徹底し、学生が安心して利用できるように環境を整備する。

３．学生のニーズに合ったキャリア支援に努め、センター利用の活性化を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．業務の分類、見直しを行い、基本的なマニュアルを作成する。

２．こまめな換気、消毒を徹底し、三密にならないよう配慮する。

３．学生が知りたい情報を得られるよう、過去の資料をまとめて見やすい閲覧ファイルを作成する。
限られた時間で的確な情報提供、アドバイスができるよう、できるだけ事前に学生の状況を把握しておく。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
業務分類、業務マニュアルに関しては、派遣職員に担当してもらうごく一部の業務しか作成できなかった。
次年度も引き続き取り組んでいきたい。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
毎朝の消毒、こまめな換気を徹底し、学生が複数名で入室する際には三密にならないよう気を配った。
来客後も消毒、換気を必ず行い、考えられる新型コロナウイルス対策は全て行った。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学科・コース別、地域、職種別求人情報等、学生が知りたいであろう情報はあらかじめ資料を準備しておいた。また、個々のニーズに合わせた資料も準備し、学生が自分でも調べられるようにアドバイスし、必要に応じて適宜資料の提供も行った。

ACT（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．引き続き業務の分類、見直しを行い、効率化を図る。

２．キャリアセンター内の古い資料を処分すると共に新しい資料のファイリングを工夫し、学生が利用しやすい環境づくりに努める。

３．学生の就活意識を高め、早めに行動できるよう、ガイダンスの内容や就職支援法を工夫する。

令和４年度　「宮崎　伸一郎」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務主任
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．会計課業務の効率的かつ正確な遂行。 ２．事務局全体において業務分担や連携ができるよう情報共有の体制強化。 ３．修学支援等の学生支援に係る業務の理解、遂行	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．計画的かつ早期の対応・処理。補助資料の作成・活用。 ２．連絡・報告、および協力体制の確立。 ３．修学支援制度の的確な運用・各部署との連携。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 会計業務については、スムーズかつ合理的に処理を行えたと感じている。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・C・Ｄ 」 事務局内の情報共有が不十分と感じられ業務分担や連携が難しく感じられ今後の検討課題である。 ３．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 大きな不具合なく執り行われたと感じている。規定が変更されている事の理解不足で混乱した。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．会計業務については特に問題はないと思うが、業務執行について補助的資料の作成、充実。 ２．事務局会議（SD 研修）を行い各自のスキルアップに努める。 ３．事務局職員全員が理解し、対応ができるような体制づくりが必要。	

令和４年度　「一瀬　章子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（会計）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．学費等納入状況は、監査ごとに追記しているものを常時反映させるようにする ２．会計システムについて学ぶ 　また現在使用の補助科目の見直しを行うため状況等整理する ３．業務を把握し、よりよく進められるよう努力する	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．学費等納入状況に追加し元帳に連動させることにした ２．監査資料作成を簡素化するために補助科目を作成したが、再度整理する ３．都度メモを残す	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 　照合しやすくなった ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・B・Ｃ・Ｄ 」 　見直しまで手が回らなかった ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・B・Ｃ・Ｄ 」 　要領作成までいたらなかった	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．会計課業務について見直し(提案) 　(ア) 高校生寮生の食費･業務委託費 　　登録　(年１回) 　　退寮など聞き取り･引落し手続き･引落し結果手続き･引落しできなかった生徒の 　　納付書作成･寮監、高校事務室とのやりとり(督促依頼)、伝票入力　(毎月) 　　監査資料、決算資料作成 　(イ) 学園全体の電気・ガス・水道代(エクセルに入力) 　　毎月の伝票作成、一覧表への入力、決算 ２．些細なことではあるが、様々な業務が重なることで片手間になり集中できないことがあること、 　高校生の寮では退寮等の連絡行き違いが生じることがある 　このような業務を少しでも相当の部署へ移行できればと考えている	

令和４年度　「森口　和美」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：事務局	職名：事務（教務）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　コロナ感染対策を講じ、時間割・教室等の調整を行い、様々な状況に応じ柔軟に対応していく。事務局内の情報を共有し、円滑に事務対応できるように心がける。授業担当者との連携強化。

２．　募集要項をより見やすく分かりやすく見直しを行う。また、入試広報室の業務内容把握・フォローアップ体制の更なる構築を図る。

３．特色化推進ＰＴ会議メンバーとして、学生募集・学生の満足度向上に繋がるような要望の提案・実現に向けた検討を行う。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．状況に応じ、学科・コースとの連携を図り、時間割や教室等調整する。課内の情報共有を密にする。また、授業担当者と連携を密にし、迅速に柔軟な対応を心がける。

２．昨年度の改善点を踏まえ、他大学の募集要項等を参照しながら進める。昨年１年間の流れを参考にしつつ、円滑に業務が遂行できるように努める。

３．学生からの要望も踏まえながら、まずは実現可能な要望の提案をおこなう。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　時間割や教室等柔軟な対応をすることができた。新型コロナ感染者も落ち着きつつあるが、次年度についても感染対策を講じながら対応していきたい。課内の情報共有については十分連携を図りながら進めることができた。引き続き、課内の情報共有・連携を密にしながら業務遂行にあたりたい。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　昨年度よりは、入試スケジュール等受験者に分かりやすく仕上げることができた。入試広報室の業務内容の把握についてもおおむね把握できた。今年度途中より、募集広報委員会にも参加し１年間の流れの把握やフォローアップを図ることができた。

３．　自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・[Ｃ]・Ｄ 」
　特色化推進ＰＴ会議がなく、要望等提案の場がなかった。別の機会に、学生からの要望を踏まえながら、学生募集につなげられる魅力ある短大づくりができるよう意見を出したいと思う。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　事務局内業務の把握及び他の職員への担当業務の共有を図る。（担当者不在時でも他職員が対応可能となるような体制づくり）

２．　次年度より Web 出願が開始することから、事前準備等しっかり行い、滞りなく受験生が出願できるようなシステムの環境づくり（手順ガイド等の整備）に努めたい。

３．　入試広報室の業務分担を再度見直し、業務の効率化を図る。

令和４年度　「林田　翔太郎」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（教務）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．Google Workspace for Education の導入による新しい教学システムの構築

２．Google Workspace for Education の活用による業務の効率化

３．教学マネジメントシステム構築に向けた学務システムの開発への着手等

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．Google Classroom を中心とした学習支援体制の構築に向けたツールの活用方法の提案等の支援を行う。

２．Google Workspace for Education の各種ツールの紹介や研修会、利用マニュアルの作成等を行い、教職員の業務効率化の一助とする。

３．令和５年度試験運用予定の教学マネジメントシステムに対応した学務システムの開発を行う。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

本年度前期中に専任教職員を対象として、「Google Classroom 利用状況調査」（調査期間：令和４年７月 13 日から同年８月１日まで。回答 13 名。うち教員９名、職員４名）を行った。その結果の一部から考察できる点について、以下に述べる。もっとも、本調査の回答件数が少数であるため、これらは推測の域を出ないのが正直なところである。

第一に、回答時点での Google Classroom（以下「Classroom」という。）利用の有無についての回答結果は、「利用あり」が２名（教員１名。職員１名）のみであった。これは、Google Workspace の導入が本年度５月からであったこと、教職員への活用方法の周知が不十分注であったことが要因ではないかと考える。この結果を受け、今後の Classroom 利活用方法の周知の強化や利用希望者への対応が求められると考える。

第二に、今後の Classroom 利用についての質問については、11 名の回答中「機会があれば利用したい」が９名、「利用したいが、どのように利用したらいいかわからない（利用方法を十分に理解できていないので利用に踏み切れない）」が２名であった。「今後も利用するつもりはない」と回答した件数が０であったのは幸いである。この結果から、Classroom の利用には、ある程度好意的な考えを持っている教職員がいるのではないかと考える。しかしながら、利用方法の理解が不十分であり利用に踏み切れていない教職員もいることも事実である。繰り返しとなるが、今後の Classroom 利用希望者への対応強化が求められる。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

Google Workspace for Education 導入により、Gmail を利用した教職員と学生間の相互連絡が可能となった。利便性が格段に向上したと考える。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

令和５年度から新しい教学マネジメントシステム導入に当たり、新しいシラバス様式の検討及びこれに伴う学務システムの改修に寄与することができた。具体的には、令和５年度入学生から適用される新様式シラバスの作成に当たり、教員を対象とした臨時 FD 研修会を自身主導により開催した。研修会資料（シラバス作成要領等）の作成に当たっては、事前の研究に取り組んだ。業務としての負担は大きかったが、学ぶことが多く、大変有意義なものであった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．Google の各種ツールの利活用方法を研究及び提案を行う。

２．必要に応じて教務に関わる各種業務の効率化及び合理化並びに規程整備等の提案を行う。

３．本学に存在する不文律の明文化を提案し、業務の合理性を担保する。

令和４年度　「櫻井　縁」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（学生）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　国の修学支援制度に関する書類を正確に作成する

２．　奨学金事務の簡素化

３．　来客・学生対応の質の向上

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　データの引用元を明確にした上で、複数人でのチェック体制を作る

２．　奨学金システムの変更に柔軟に対応する。
　　また、学生への配布資料を工夫して説明会を短時間で終了できるようにする。

３．　マスク越しでも好印象となるよう、声のトーン・表情に気を付けて対応する

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　実際に複数人でのチェックが必要な業務において、ほかの人が見てもわかりやすい資料を事前に作成し、それをもとにしてチェックをしていただくようにした。この工夫により、チェックに要する時間が短縮されたことに加え、資料の作成を通して自分自身の理解も深まり、ほかの人に説明を求められた際に苦労することが減ったので良かったと思う。

２．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
奨学金担当者 HP の内容を読み込み、理解した上で「進学届」「継続願」「適格認定」等、学生が行う重要な作業の配布資料のすべてをブラッシュアップした。結果、説明会自体の時間に関してはかなり短縮することができた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・[C]・Ｄ 」
窓口に立つ際には意識をして対応するよう心がけていたが、忙しい時などは気持ちの良い対応が出来ていたとは言えなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．今年度に作成したチェック用の資料の多くは、以前までに比較すると非常にわかりやすくなったと思う。資料のひな形は出来たので、今後運用していく中で改善点が出てきた場合は即座に対応していきたい。

２．資料を分かりやすくし、説明会をスムーズに終了できるようになった反面、説明会があっさり終わることで、その重要性を理解できない学生が微増したように感じた。作業を行う前の説明会においては、その重要性をしっかり理解させられるよう話し方に気を付け、学生へのこまめなメール連絡等も絡めて、確実に実行させられるような工夫が必要。

３．最終的には忙しい状況であったとしても、意識せずとも常に一定の対応ができるようになりたい。事務局内には、窓口や電話での対応がとても気持ちの良い方がたくさんいらっしゃるので、そのような方々を参考にしつつ、自分の物にしていきたい。

令和４年度　「牧島　愛実」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：事務局	職名：事務（入試広報・庶務）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．業務内容を早く理解し、不明点があれば周囲に相談する。

２．学生と高校生と年齢が近いこともあるため、学生との距離感を大切にして信頼関係を築きたい。

３．高校生がさらに本学に興味を持てるような情報を発信する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．業務引継書を確認しながら、事前準備のスケジュールを立てる。不明点は引継書を確認後に、入試広報・庶務関係の方に相談する。

２．まずは学生アンバサダーとコミュニケーションをとり、学生との信頼関係を高める。
協力依頼をする際には学生が不明点などを解消できるよう、積極的に声がけ等を行う。

３．本学の特色について知識をつける。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
初めて行う業務ばかりで、不明点や準備不足なことが多く、様々な方のサポートでなんとか業務を遂行することができた。次年度の前半はまだ経験していない業務があるが、事前準備を欠かさずに取り組む。
また今年度の経験をもとにスケジュールを立てて、余裕をもって業務を行う。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学生アンバサダーとの笑顔でコミュニケーションをとるように努め、すこしずつ信頼関係を築けたと感じている。今後もアンバサダーのみならず、その他の学生が接しやすい、相談しやすいと感じることのできる職員になれるように努める。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
学科・コースや入試、奨学金制度について、まだまだ勉強不足で説明が難しいと感じることが多々あった。
進学説明会等で出会う高校生とは短時間しか接することがないため、高校生がさらに本学に興味をもてるように説明内容を工夫する。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　何事も早めに取り掛かれるように業務引継書を確認して、事前準備を行う。
「報告・連絡・相談」を徹底し、不明点は確実に確認する。

２．今年度に引き続き、学生が接しやすいと感じられるように笑顔で対応する。
学生に協力依頼を行う際は、学生の授業やアルバイト等を考えて早めに依頼する。

３．　本学の様々な情報を分かりやすく伝えられるよう、説明方法を工夫する。
またSNSを活用し、高校生が情報を得やすいようにする。

令和４年度　「伊藤　理恵子」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：図書館	職名：司書

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．安心・快適に図書館を利用してもらえるよう、新型コロナウイルス感染症予防対策を取りながら 経年劣化図書の除籍・電子書籍導入などを含め、館内の環境整備を行う

２．　新型コロナウイルス感染症の感染動向に注視しながら、学生・教職員のニーズに合わせて臨機応変に業務やサービス内容を改善していき、図書館利用の活性化を図る。

３．新型コロナウイルス感染症の感染動向に注視しながら、以前行っていた保育園などでの絵本読み聞かせボランティアを再開し、地域貢献活動を行う。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．引き続き　３密回避、ｱﾙｺｰﾙ消毒など新型コロナウイルス感染症予防対策を行いながら、閲覧室・書庫のスペース確保のため古い蔵書の除籍を行う。

２．学外実習や長期休暇の際の貸出冊数を増やす、教職員の要望にそって長崎県立図書館をはじめ公共図書館及び県内他大学の協力貸出・相互貸借システムなどを利用する。電子書籍の導入検討、アクティブラーニング、イベント開催、学生選定図書を実施する。

３．長崎市立図書館　読み聞かせボランティア活動への参加

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
館内では新型コロナウイルス感染症予防対策を取りながら、来館者対応・ｶｳﾝﾀｰ業務を行った。受け入れが 10 年前の消耗図書 75 冊の除籍や書庫内にある不要な寄贈本やバーコード添付なしの取り置き雑誌などを廃棄し、書庫の整理を行った。ただ、

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
図書館サービスの一環として、NTT ドコモのｄマガジン forBiz を契約し 学内の WiFi エリア内においてｄマガジンアプリ対象の雑誌約 200 冊を閲覧できるようにした。学生選定図書は、昨年と同様 7 月に行った。

３．自己評価「 $\boxed{\text{S}}$・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
コロナ禍以降中止されていた長崎市立図書館の絵本読み聞かせボランティア活動が再開となった。今年度は 6/10 レデンプトール幼稚園･11/16 ﾆﾁｲｷｯｽﾞ 長崎新地保育園･12/16 長崎みらい保育園の 3 か所に訪問し、絵本を通して地域貢献活動を行うことができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．安全・快適に図書館を利用してもらうため、閲覧室および書庫のスペース確保・整理整頓に努める。

２．学生・教職員のニーズに合わせて臨機応変に業務やサービス内容を改善していく。
図書館でできる新しい企画を考え、図書館利用の促進・活性化を図る。

３．絵本の読み聞かせボランティアに参加し、地域貢献活動を行う。

令和４年度

「研究活動報告書」

専任教員の研究活動状況表（職位順）								FD・SD研修会参加状況		
平成30年度（2018）～令和4年度（2022）（過去5年間）								令和2年度（2020）～令和4年度（2022）		
氏名	職位	過去5年間の研究業績				国際的活動の有無	社会的活動の有無	過去3年間のFD・SD研修会参加実績		報告書掲載ページ
		著作数	論文数	学会等発表数	その他			学内定例会（6回実施中）	学外主催（Webを含む）	
森　弘行（L）	教授	0	8	2	0	有	有	6	0	84
織田　芳人（Y）	教授	0	6	2	0	無	有	6	0	85
福井　昭史（Y）	教授	16	4	0	0	無	有	6	0	86
武藤　玲路（L）	教授	0	13	3	0	無	有	6	27	87
中澤　伸元（Y）	教授	0	1	10	2	無	有	0	0	88
松尾　公則（Y）	教授	4	7	5	0	無	有	5	0	89
濵口　なぎさ（L）	准教授	0	6	0	0	無	有	6	0	90
本村　弥寿子（Y）	准教授	0	5	0	0	無	有	5	0	91
中村　浩美（Y）	准教授	0	6	1	25	無	有	4	0	92
太田　美代（S）	准教授	0	6	0	0	無	有	6	1	93
古賀　克彦（S）	講師	0	6	0	0	無	有	6	0	94
荒木　正平（Y）	講師	0	4	3	3	無	有	5	0	95
江頭　万里子（L）	講師	0	7	0	0	無	有	6	0	96
南條　恵（Y）	講師	0	6	0	2	無	有	4	0	97
船勢　　肇（Y）	講師	2	5	0	4	無	有	5	0	98
大徳　朋子（Y）	講師									99
桑原　倫子（S）	助教	0	1	0	0	無	有	6	0	100
桑原　真美（S）	助教	0	7	0	0	無	無	6	0	101
山中　慶子（Y）	助教	0	7	1	0	無	有	5	0	102
髙橋　秀樹（Y）	助教	1	11	4	2	有	有	5	0	103

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】ビジネス・医療秘書コース　【職名】教授　【氏名】森　弘行

【研究の題目】On pitfalls in statistical analysis for assessing workplace-specific risk of severe Covid-19
Tomomi Yamada, Hiroyuki Mori, Todd Saunders and Tsuyoshi Nakamura
・The 9th International Conference on Risk Analysis（http://icra9.unipg.it/）
・Springer volume of ICRA9.　（投稿中）

【研究の概要】

本研究の目的は、疫学的な検証を行う際の誤った統計解析を指摘することである。偏ったデータは、偏った結果を導くのと同様に、誤った分析方法は誤った解釈を生み出す。

本研究では大阪府の COVID-19 感染者データおよびシミュレーションを用い、感染リスク要因の分析を行い、職業との関連を調査した。また、同様に職業との関連を調査した他の論文について、統計手法、結果の解釈の仕方など、様々な角度から誤りの検証を行った。

一部の有力誌には COVID-19 の疫学研究に誤った統計手法が用いられた報告が掲載されており、これらの研究には疫学の専門家が参加することが望まれる。また査読者に疫学統計の専門家が加わることで誤った解釈を予防することを期待する。

【研究の題目】Cause-specific hazard or cause-specific incidence, that is the question.
Tomomi Yamada, Tsuyoshi Nakamura, Hiroyuki Mori, Todd Saunders and Yoshiaki Nose
Australasian Applied Statistics Conference.

【研究の概要】

Gray (1988) は、死因別のハザードから累積発生率を推測できない競合リスクのモデルを示している。

ハザードの最も基本的な要件は、打ち切り分布と独立していることである。しかし、Fine-Gray ハザードは独立打ち切りの分布に依存することがシミュレーションにより判明した。

筆者らの知見では、Fine-Gray ハザードが打ち切り分布に依存することは、文献には記載されていない。

Gray の例によれば、累積発生率は治療効果を表すことができない。一方、特定死因のハザードは治療効果を適切に示すことができ、こちらを用いる方が望ましい。

Fine-Gray ハザードは、数学的には明確に定義されていない。従って、より現実的なモデルの下での累積発生率の効果を調査し、Fine-Gray ハザードに対する実際的な修正が必要である。

【研究の題目】SAS OnDemand for Academics による総計シミュレーションプログラムの開発

【研究の概要】

総計シミュレーションでは多量の乱数を用い、様々なパラメータを変化させて計算を実行する。シミュレーションの実行は Excel でも可能であるが、パラメータの違いによる結果のグラフ化や比較には手間がかかる。

SAS（Statistical Analysis System）は統計処理向きのプログラミング言語であるが、パラメータを変化させて繰り返し処理が行えるマクロ機能がある。また 2015 年に開発された更に強力なプロシージャ LUA により、SAS コードをプログラムにより生成でき、シミュレーション結果のグラフ化まで自動化することができた。

上記研究のハザードやインシデンスのシミュレーションは、この成果を活用している。次年度以降も継続予定。

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　　【職名】　教授　　【氏名】　織田芳人

【研究の題目】
(1) 保育で使われる漢字の分析に関する研究
(2) 保育学生に対するプログラミング教材としての知育玩具の活用に関する研究
(3) Microsoft Word 学修の動機付けに関する研究

【研究の概要】
(1) 保育学生における基礎学力としての漢字力を向上させる方策を検討するため、『幼稚園教育要領』、及び、教育実習（幼稚園）で学生が記述した実習日誌に出現する漢字を中心として、その分析を試みてきた。昨年度（令和3年度）に『保育所保育指針』の全文、及び、本学学生6名が保育所における20日間の実習で記録した実習日誌から「今日の課題と反省」及び「今日学んだこと・感想・反省など」の全文をExcelデータ化したが、ソフトを利用して分析するまでには至らなかった。そこで本年度は、計量テキスト分析ソフトを利用して、『保育所保育指針』の全文において、どのような語が頻出しているか、どのような語と語の組み合わせが多いか等を分析し、『幼稚園教育要領』と比較検討した。また、「乳児保育」「1歳以上3歳未満児の保育」「3歳以上児の保育」に大別された各保育の「ねらい及び内容」を互いに比較検討した。その結果、保育の対象年齢が「乳児」「1歳以上3歳未満児」「3歳以上児」へと上がるに従い、「保育士」の援助を減少させ、「子ども」の主体的活動を中心に据えていく保育が求められていると推測され、このような視点が保育所実習における実習日誌に反映されているかは、実習日誌を計量テキスト分析することで確認できると考えられた。本学紀要に掲載された。しかし、本学学生6名が保育所における20日間の実習で記録した実習日誌から「今日の課題と反省」及び「今日学んだこと・感想・反省など」の全文のExcelデータを分析してまとめるまでには至らなかった。
(2) 保育学生を対象とする知育玩具を活用したヴィジュアル・プログラミング学修に関する研究として、令和元年度と令和2年度に、知育玩具（ロジカルルートパズル）の体験とヴィジュアル・プログラミングの体験（文部科学省提供ツール「プログラミン」）について、ARCSモデルを参照したアンケート調査を行った。令和元年度については本学紀要にまとめたが、令和2年度についてはまとめるまでに至っていない。本年度は、Adobe Flash Playerのサポート終了により利用できなくなった「プログラミン」に代えて、国際的に利用されているヴィジュアル・プログラミング・ツール「スクラッチ」を用いることにし、その「スクラッチ」体験に対するアンケート調査を行った。令和2年度の調査結果と本年度の調査結果を合わせてまとめる予定ではあったが、まとめるまでに至らなかった。
(3) 本学幼児教育学科１年生を対象とする情報教育科目「情報科学」において、Microsoft Word による文書作成等の演習を行ってきている。しかし、パソコンを個人的に所有する学生が少ないこともあって、パソコン習熟度が低い傾向にある。しかも、パソコンの操作に抵抗感を抱いている学生も少なくない。そこでMicrosoft Word を学ぶ際に、文書に挿入できる幾何学的図形を組み合わせて動物キャラクターを制作するという演習を取り入れ、それがMicrosoft Word の学修の動機付けとして効果的かどうかをアンケートによって確認することにした。動物キャラクターとした理由は、保育で読み聞かせる絵本の主人公に動物が多いことや、幼稚園のクラス名に植物とともに動物も用いられていること等から、受講生にとって親しみやすいと判断したためである。Microsoft Word による幾何学的図形を組み合わせたキャラクター制作の演習を、受講生の多くが、はじめは「面白そうだ」「やればできそうだ」とは思わなかったが、実際に取り組んでみて「やってよかった」と思ったという結果を得たので、このような演習がMicrosoft Word を学修する際の動機付けの一つとして有効であると推測された。これまでの教育経験から、「美術嫌い」の多くは「形を描く」ことや「色を塗る」ことに対する苦手意識に起因していると推測されるので、Microsoft Word 等の描画ツールは、幾何学的図形の組み合わせではあるが、「形を描く」ことや「色を塗る」ことを容易に実現するので、そうした造形活動に対する苦手意識の軽減に有効かもしれない。本年８月末に日本基礎造形学会福岡大会で口頭発表し、一部修正等を行って、同学会誌に論文「保育者養成における Microsoft Word 学修の動機付けとしての幾何学的図形を組み合わせた動物キャラクター制作の有効性」として掲載された。

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　　【職名】教授　　【氏名】福井　昭史

【研究の題目】

音楽教育の教育方法と教材の研究

【研究の概要】

令和４年度の音楽教育の方法と教材に関する研究は、初心者用ピアノテキストの作成と活用に関するもの、学生の技能の実態に合ったピアノ連弾曲の創作に関するものである。

（1）初心者用ピアノテキストの作成と活用

初心者用ピアノテキストの作成と活用についての研究は次のような経緯で実施した。

音楽実技に関する授業「保育と音楽表現」「子どもの歌と伴奏法」で使用しているテキスト『こどものうた２００』『続こどものうた２００』（チャイルド本社刊）の掲載曲の伴奏は難易度の高いものも多く、年間数回実施している弾き歌いの実技試験では、満足できる成績の者は全体の２割にも満たなかった。そこで、学生のピアノ演奏技能の向上を目的として、平成４年度入学生を対象とする「保育と音楽表現」で使用する初心者用『子どもの歌によるピアノテキスト』を作成した。ピアノテキストの作成にあたっては、バイエルやハノンなどのピアノ教則本と同様の初心者教育のメソードの機能を持つものであることを条件とし、最終的には子どもの歌の伴奏と弾き歌いができるようになることを目標とするものとした。

また、初めてピアノを演奏する者が１年間で習得できる質と量を想定した。

テキストの構成は以下の表のとおりである。

レッスンⅠ	左右の指の基礎練習	指の練習曲、伴奏パターンの練習曲
レッスンⅡ	５音の旋律の歌（ド～ソ）	『ちょうちょう』など４曲をハ長調とヘ長調で
レッスンⅢ	６音の旋律の歌（ド～ラ）	『きらきら星』など５曲をハ長調とヘ長調で
レッスンⅣ	ト長調、ニ長調に移調	レッスンⅠ、Ⅱの中の６曲を２つの調に移調
レッスンⅤ	広い音域の歌（ド～ド、レ）	『こぎつね』など 12 曲、調はハ長調とヘ長調
子ども達の生活の歌	難易度の高くない生活の歌	『ごあいさつのうた』など４曲

令和４年度はこのテキストを用いてピアノ実技の指導を実践した。担当した学生は、初めてピアノを学習する 12 名で、その状況は次のようであった。前期末までに掲載の 25 曲中９曲を、12 月末までには大部分の楽曲を演奏できるようになった。はじめの約１ヵ月間に取組ませた学生達のよく知る歌４曲での演奏の成功体験がその後の学習に影響しているといえる。年度末までには全ての学生が掲載されている楽曲のほとんどを演奏できるようになった。実技試験では、学生が満足できる演奏をしており、テキストが初心者の学習に有効であることが実証された。実践の詳細については、本年度の紀要に報告している。

（2）ピアノ連弾曲の創作

ピアノ連弾曲の創作の経緯は、２年生を対象とする「保育と音楽表現」での課題の一つピアノ連弾を課していることにある。多数のピアノ連弾曲集等が出版されてはいるが、学生の好みとする楽曲で技能のレベルに合った難易度の高くないものが少ないことから、選曲に苦労していたことである。そこで、演奏が容易で学生が満足できる楽曲を目標としてピアノ連弾曲を創作することにした。

創作した楽曲には、メドレーのような数曲を組み合わせたものと単独のものとがあり、演奏を通して音楽のさまざまな様式の面白さを体験できることをねらいとした。

曲目は、知名度が高く親しまれているものとした。ディズニーの映画音楽から『星に願いを』や『美女と野獣』など、宮崎駿の映画音楽から『もののけ姫』や『いつも何度でも』など、その他には『翼をください』や『そりすべり』など、数曲を組み合わせたものでは『「ドレミの歌」と「森の熊さん」』『「犬のおまわりさん」と「猫ふんじゃった」』『春や秋の歌のメドレー』などである。このうちの数曲を学生がピアノ連弾に取り組んだ。

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】ビジネス・医療秘書コース　　【職名】教授　　【氏名】武藤　玲路

【研究の題目】

過去 20 年間の JCCK 調査からの知見

【研究の概要】

１.背景と目的

「短期大学の将来構想に関する研究会（略称 CC（Community College）研)」は、2002（平成 14）年９月に「地域の魅力ある短期高等教育機関として短期大学が再生するには、各々の短期大学の努力に加えて、地域の短期大学が連携して取組む必要がある。」という志の下に発足した。その後、2009（平成 21）年 10 月に「短期大学コンソーシアム九州（略称 JCCK（Junior College Consortium Kyusyu))」の設立へと発展し、今日まで短期大学のステークホルダーに関する調査研究を継続的に行ってきた（安部、2014)。

本稿は、JCCK 調査の 20 年間の節目の年として、これまでの調査研究を振り返り、その成果と課題をまとめることで、今後「教学マネジメント指針」に示されるような「主体的で自律的な学修者」を育成していく取組の参考資料とすることを目的とした。

２.JCCK 調査の結果からの知見

１）１年次調査からの知見

①「募集・広報」改善の参考資料として：　短大への入学を希望した理由は、「就職・資格取得・興味ある授業を受ける」が最も多く、「経済的理由」も多い。

②「教授法」改善の参考資料として：　高校時代の授業期間中の学習時間は、「週１～２時間程度」が最も多く、「試験前にだけ勉強する」学生も多い。

２）卒業時調査からの知見

①「カリキュラム・学修プログラム」改善の参考資料として：　修得した能力の自己評価は、「最後までやりぬく力」「一般的な」は高いが、「リーダーシップ」「自分に対する自信」は低い。

②「カリキュラム・学修プログラム」改善の参考資料として：　１年次と卒業時を比べて、２年間で大きな伸びがある能力は、「自分に対する自信」「ひとつの問題を深く探究する態度」である。

３）卒業生調査からの知見

①「就職支援・カリキュラム」改善の参考資料として：　アンケート調査より、短大の「就職支援」は高く評価しているが、卒後年数が増すにつれ「知識修得の授業」の有用性は下がっている。

②「就職支援・学修プログラム」改善の参考資料として：　インタビュー調査より、短大の評価を左右する要因は、１番目が「就職支援」、２番目が「友人・教員との関係」である。また、「ゼミ活動などでの思考力や創造性、問題発見・解決能力」の有用性が年々高まっている。

４）就職先調査からの知見

①「カリキュラム・学修プログラム」改善の参考資料として：　アンケート調査より、職場が短大卒の従業員に求める能力として、「専門的知識・技能」をある程度重視しているが、「人間性」「コミュニケーション能力」を含む「人間関係形成能力」をより強く求めている。

②「カリキュラム・学修プログラム」改善の参考資料として：　インタビュー調査より、短大卒の従業員の誠実で明るく素直な人柄を高く評価している。一方、職場で特に求めている点は、基本的な挨拶、礼儀・マナー、コミュニケーション能力、それと基礎学力である。

５）高校生・進路担当者調査からの知見

①「募集・広報、カリキュラム」改善の参考資料として：　高校生アンケート調査より、就職に役立つ資格や授業への関心、地元志向、四大志向の傾向が強くなっている。

②「募集・広報、学生支援全般」改善の参考資料として：　進路担当者インタビュー調査より、短大の PR が専門学校よりも弱いため、短大の特色や魅力が分かりにくい。

３.総括

以上の結果から、JCCK 調査に関する成果と課題が明確になり、今後の調査研究の方向性を検討する貴重な資料を得ることができたと思う。今後は、「学修成果の到達度と学生支援の満足度、短大教育の総合評価」や「IR データの可視化と活用法」に着目して、学修意欲の規定要因を明確にする取組に着手していく

必要があると思う。また、制度設計に関するコンソーシアム・スタンダードを構築し、新たな「JCCK オリジナルの共同教学 IR システム」の開発を目指していきたい。

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】　教授　【氏名】中澤　伸元

【研究の題目】音楽授業によるコミュニケーションの方法、テクニックの研究

保育者としてのコミニュケーション力を音楽を通して育てる研究

1.聴くことの技術　2.言葉表現技術　3.伝え届ける為の技術

【研究の概要】教員と学生の間で、人間は生まれながらにして 100 点満点、完全からのスタートだということ共感したうえで、授業をすることが重要だ。左脳は「良いか？悪いか？」を考えるために、ほとんどの学生は、問題が起きると過去思考になり、自分を過小評価してしまう傾向にある。学生たちは、いつだって瞬間瞬間を選択できるのだから、出来事は関係ない。学生たちがその出来事をどう解釈し、行動したかで結果が決まってしまうのだ。叶わなかったという結果がでたときは、潜在意識が選択してくれなかったということになる。なぜ選択されなかったのかそれは、臨場感リアリティに原因がある。そのためにはセルフトークで自己イメージを高め、コンフォートゾーンをゴールに移行設定をしておく必要がある。また自分自身を信じる力を習慣化し、パワーある言葉をイメージし結果につながるためのツールにアファメーションを使う。アファメーションによって自分のなりたい姿を表現できるようになることが学生には、絶対必要条件であると考え、そのための条件として五つあげた。

①自分自身のことの表現に徹底する　②「○○が上手になりつつある。と常に肯定的であること。
③臨場感を感じリアルであること。　④感情を表す言葉を使うこと。　⑤絶対に他人と比較しないこと。

他人には他人の価値があり、自分には、自分の価値があることを知り、他人との違いを認め、そのうえで自分の興味関心あることに情熱を向け、日々自分らしく、楽しんで夢を叶える。幸福感を感じることのできる幸せな学生を目指し助言を与えた.

課題を行うのに必要なこと

①現状把握とゴール設定
ここをしっかり取り組んだ学生と取り組まない学生では大きな差が生まれる。今の自分のレベル状態の把握と課題。きちんと設定できている学生は、これからの自分の目的と可能性をどんどん広げ自信を持って行動するようになる

②コミュニケーション力
うなずき訓練や、オウム返し訓練を取り入れた授業であり学生の食いつきも良く、楽しんで信頼関係を生むことができる。 自分の心の状態、動き、顔表情や姿勢態度などすべてが相手に感情として伝わる表情訓練などこの信頼関係テクニックを身に付けることができれば、曲を表現することだって楽しくなる。緊張から解放されて常にリラックスしたニュートラル状態で演奏ができ、楽しさ、素晴らしさに気づき始めるはずだ。お互いの目の輝きが一気に変わり、次々に課題を見つけ良きライバルになるようになる。

③感情には臨場感とリアリティ
感情を使わずに 1 日過ごせる人間は一人もいない。現在、過去、未来は今の 1 点にある。学生たちは今どれを選択しているか？ 過去現在を選択した学生は進歩なく、現状のままで進歩は望めない。成長するためには、やはり未来思考にしか答えはない。マイナスプラスの選択も自分自身にある。つまり未来思考が夢を叶えていくのだ。意識イメージと潜在意識さえ繋がれば、現実として働くのだ。叶えたい願望が現実化しないのは、臨場感、リアリティが弱いからだ。そんな臨場感を増すテクニックや、リアリティーを増すテクニックを身に付けば潜在意識とつながるようになる。脳は現実と妄想の区別がつかないから、臨場感リアリティーがある方を選択してくれるのだ。

④聴くと聴いてもらう学び
「聴く」という字は、プラス(＋)の目と心で耳を使って聴くということだ。保育者にとって最も重要な点で、「聞き」上手ではなく、「聴き」上手になるためのテクニックを学ぶのだ。聴いてもらえる大切なテクニックだ。自分の演奏を聴いてもらうわけだから、相手の反応が大きな自信となる。演奏者は、強弱、音程、リズム、発声などの感情表現を身につけることで、プラス(＋)の目と心で耳を使って聞いてもらうことができるのだ。

学生の学びの考え方
AI 登場で急速に教育内容が変わっている。教育は教員主体ではなく、「学生を信じ任せる」学生主体の時代になった。「良いか」「悪いか」の時代は終わり左脳と右脳の一体化の時代になったのだ。大切なことは、学生の言葉が学生自身の人生を決めると言うことだ。学生の思いや考えはすべて言葉で成り立っている。学生たちがどんな言葉を選択し、どんな言葉で行動しているかが全てである。教員は学生たちの好奇心をいかに引き出してやるか、教

員も学生たちの好奇心を満たしてやることで満たされるのだ。まずやるべきは、アファーメーションの力を借りて、ルールに基づいて作った自分への言葉を自分に語りかけること。これを身に付けることによって学生たちの脳にプログラミングされ、思い通りの人生に学生たちを導いてくれるだろう。

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】　特別専任教授　　【氏名】松尾公則

【研究の題目】

①ゼミ活動の充実を図る。

②「カエル先生のいきもの交遊録」という著書を出版する。

③五島列島産タゴガエルの新種記載について協力する。

【研究の概要】

①ゼミ活動の充実を図る。

ゼミ活動が週 1 コマになって 2 年目である。2 コマの時と異なり時間数が少なくなったので、昨年度の反省から充実した 90 分になるよう努めた。前期からゼミの時間に多くの自然体験を実施し、まずは自然との触れ合い方を学び、学生自らが自然を楽しめるように工夫した。長崎特別支援学校でのカエルの授業は、ゼミの最大イベントであり、今年も小学部 4 年生 7 名に対して、ミュージカル仕立ての劇、本物との触れ合いを実施することができた。学生たちの演技力も向上しており、子どもたちに生き物の持つ楽しさを学ばせることができた。と同時に、学生たちも重度の障害を持つ子どもたちと接することで大きく成長することがでた。私自身の「本物と触れ合う」という考えは、十分に達成したのではないだろうか。後期は、報告集作成とゼミナール発表会の準備を重点的に行った。特に、ゼミナール発表会では、各自でスライドを作成し、全員で発表した。ゼミ活動の集大成として、緊張の中で 25 分の発表を終えることができた。短大で学んだ学生として、自分がゼミ活動の中で学んだことをみんなの前で発表するという経験は大変大きいものだと思う。発表内容を暗記し原稿を見ることなく話すことの大切さも経験させることができたことがよかったと思っている。。

②「カエル先生のいきもの交遊録」という著書を出版する。

今までに 2 冊の本を自費出版している。「長崎県の両生・爬虫類」と「長崎県の哺乳類」である。両方とも図鑑形式のものである。今年度、図鑑とは異なる長崎県の動植物をやさしく紹介する随筆集を自費出版した。タイトルは、「カエル先生のいきもの交遊録」である。両生類 35 編、爬虫類 27 編、哺乳類 33 編、それ以外の動物 28 編、植物 9 編の合計 132 編の話を 1 ページで解説したものである。それ以外にも、「長崎から世界に紹介されたいきものたち」「五島列島から未記載種のタゴガエルが」「ヤモリ調査の旅」「轟の森のヤマネ調査」「カエルグッズのあれこれ」など数ページにわたる文章を加えている。全体で 158 ページとなっている。長崎県で両生類・爬虫類・哺乳類の調査を開始してから約 50 年、長崎県の動物に関する本を 3 冊出版したことで、30 歳の頃から目指していた目標を完結したことになる。

③五島列島産タゴガエルの新種記載について協力する。

今年度、新種記載の予定であったが、発表者の都合により延期されることになった。まだまだ調査の不備があったためである。今年度も、昨年度同様調査に協力している。

タゴガエルは九州、四国、本州に広く分布する山地性のカエルである。長崎県では、県本土と五島列島平戸に生息し、壱岐、対馬には分布していない。五島列島のタゴガエルは、県本土の個体とは鳴き声や形態、産卵時期が異なっている。2003 年から調査を開始し次のようなことが分かってきた。①県本土の産卵時期が 3 月なのに対し、五島列島産は 10 月と 3 月の複数回であること。②県本土産の鳴き声が低音で断続的であるのに対し、五島列島産では高音で連続すること。③県本土産に対し、五島列島産がやや小型であること。などである。タゴガエルの研究に関しては、北九州にあるいのちの旅博物館の学芸員である江頭幸士郎氏が第一人者である。現在の所、県本土から五島列島の各島嶼の調査がほぼ終了し、ＤＮＡ分析も終わっている。まもなく、五島列島産のタゴガエルは、新種として発表される予定であるが、最終的な詰めの調査も継続している。新種記載は、江頭氏の方で論文として行われる予定であるが、補完的な調査は、地元に住む松尾の方でも協力していきたいと思っている。今年度も調査を実施したが、完璧な論文として発表してもらうために、次年度も地元の調査員として頑張っていきたい。

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　ビジネス・医療秘書コース　【職名】　准教授　【氏名】　濵　口　なぎさ
【研究の題目】能動的学修の実践に関する研究
【研究の概要】
(1) 目的
　担当する授業において、学生が受け身ではなく能動的に参加し、学んだ知識を実践できるための教材と指導法を研究している。

(2) 方法
①タッチタイピング習熟度向上のための指導法の研究
②日商 PC 検定合格のための補助教材の開発
③「登録販売者試験」受験対策講座への能動的な参加を促す研究

(3) 結果
①1 年次前期の「ビジネス文書作成１」で取り組んでいる、タッチタイピングの習熟度向上のための指導法に関する研究に取り組んでいる。特に初心者クラスに配属された学生たちにとっては、タッチタイピングのスキルを早い段階で身に付けることで、経験者クラスとの差を縮める効果が期待できると考えている。また、全ての学生たちがタッチタイピングの習熟度を上げることで、短大在学中はもちろんのこと、就職後においても作業効率の向上や時短につながり、余裕をもって仕事に取り組むことが可能となり、仕事の質の向上も期待できる。昨年度に引き続き、「ビジネス文書作成１」の授業において、学生たちが能動的にタッチタイピングの習熟度向上に取り組むように工夫した教材及び指導内容について、その効果を検証した。
また、後期の「ビジネス文書作成２」においてもタッチタイピングの習熟度を確認するための小テストを行うことで、前期に身に付けたタッチタイピングの技能の定着度合いを確認することができた。

②卒業までに日商 PC 検定（文書作成）3 級に全員合格することをコースの目標と掲げており、今年度も受験者全員が合格したが、一度も受験しないまま卒業する学生が一定程度存在する。就職活動において、Word や Excel の基本的なスキルを持っていることが当たり前となっている。特に毎年一定数の希望者がいる医療事務の求人票には、PC スキルが具体的に明記されることが多くなっている。短大での学びの客観的指標として活用するためにもクラス全員が受験し、全員が合格して卒業することが望ましいと感じている。受験をしなかった学生たちの理由はさまざまであるが、知識科目の共通分野に対する苦手意識もあると感じている。そこで、今年度は授業では細かく指導することができない「知識科目」について、自学自習を促すための補助教材を Google Form で作成した。教材の内容は学生たちが購入している模擬問題集の内容を採用した。次年度は、試験的に学生に提供し、その効果を確認したい。

③一昨年度から栄養士コースの古賀先生、桑原真美先生と協力して、「登録販売者試験」受験希望者を対象とした対策講座を実施している。今年度は 1S が 3 名、2L が 5 名受験したが、1S は 3 名全員合格、2L は 1 名合格であった。
今年度の対策講座が始まる直前に、厚生労働省の「試験問題の作成に関する手引き」が改訂されたことから、これまでの「試験問題の作成に関する手引き」との相違点を細かく確認するとともに、過去問を分析して出題傾向を確認し、対策講座の際に学生たちに紹介した。
しかし、2L の学生たちは後期の対策講座への出席率が低く、実践型教育プログラムの期間にできた空き時間を活用した自学自習もうまくできなかったようで、合格者が 1 名という結果に終わっている。
一方、1S の学生たちも後期の対策講座への出席率は非常に低かったが、前期に学んだ事を自主的に応用し、忙しい授業時間の合間を縫って、能動的にかつ効果的に自学自習ができていたために全員合格という結果に結びついたと感じている。

次年度は、特にＬの学生に対して能動的な自学自習のための指導と、計画的に受験勉強を行うための補助的な教材開発に取り組みたい。

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】准教授　　【氏名】本村　弥寿子

【研究の題目】

保育者養成校と保育施設が協働する教育・保育実習　－保育施設教職員研修会の取り組みから考える－

【研究の概要】

１）目的

社会の保育や子育てに関する課題が表面化し、乳幼児教育・保育が注目を浴びるようになった。それと共に保育の量のみならず、質への関心が高まり、保育施設での教育・保育実習の在り方も見直す動きが生まれている。筆者も、昨年度から学外実習に向けての事前・事後指導の見直しに着手し、充実を図っているところであるが、保育施設での実習内容の充実も図ることが重要である。そこで、保育者養成校と保育施設が連携して学外実習を充実させる方策を考えることとした。

２）方法

筆者は、保育現場の教職員を対象とした、大村市主催の保育・教育実習についての研修会を担当する機会を得た。そこで、保育者養成校での実習指導の状況や学生の姿を伝えつつ、現場教職員の実習に対する考えや状況について情報を得るようにした。

３）内容

初めに、筆者の講義において、保育者養成校と保育施設が共通理解すべき事項である、教育・保育実習の“目的”と“流れ”“内容”について確認をした。学生の学びの段階によって学外実習の目的が変わり、指導内容も変わる。それぞれの段階で指導すべきことと、養成校から保育施設に要請したいことや提案等を伝えた。また、近年、急激に学生の気質が変わっていることを実感している旨を伝え、現在の学生に応じた実習指導を模索してほしい旨も加えた。そして、学外実習は、養成校と保育施設が連携を取りながら取り組むことで指導に一貫性が生まれ、学生の成長が促されることを確認し、今後、密に情報交換して取り組むことを要望として伝えた。

講義のあとはグループディスカッションを行った。現場の教職員が 4～5 名ずつグループを作り、講義内容や自園の実習について次週に情報交換を行う場とした。

４）結果・今後の課題

研修会終了後の 26 名の参加者アンケートの結果は以下のとおりである。

①今後の保育に役立ちますか

非常に	まあまあ	ふつう	あまりない	全くない
10 名	15 名	1 名	0	0

②満足する内容でしたか

非常に	まあまあ	ふつう	あまりない	全くない
9 名	15 名	2 名	0	0

アンケートより、研修会の内容が現場の保育者にとって有意義なものであったことが分かる。また、グループディスカッションや自由記述欄の記載事項から、学外実習の目的や流れ、内容に関して、現場に十分理解されていないことが判明した。各園独自に実習の内容や流れを考え、それを毎年繰り返して行っている状況であった。今後の学外実習を一層充実したものにするためにも、今回のような研修の場を増やすなどして、多くの保育者が受講するようにすることが重要であると考える。

今回、目的や内容を確認したことで、改めて各園の実習を見直したいという感想が多かった。養成校と保育施設が連携を密に取ることは難しいと考えられるが、学生一人一人に応じた指導を行うためにも、学外実習期間中に行う養成校教員の巡回指導の機会を活用し、双方向で意見交換や情報交換が行えるようにすることが大切であると思われる。加えて、学外実習前後で内容や流れの確認を養成校と実習生を受け入れている保育施設で行い、それぞれの立場で学生に向き合うも、一貫性のある指導がなされ

るような体制づくりが今後の課題であると考える。研修会、保育者養成校教員の巡回指導、学外実習前後の情報・意見交換等の機会づくりを養成校側から保育施設に発信を、質の高い、そして学生の実態に即した実習内容となるよう取り組みを模索し、試行していきたいと考える。

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】　准教授　【氏名】中村浩美

【研究の題目】

1. ソプラノ音域からメゾ・ソプラノへの移行のもととした発声法と、それに伴う歌曲やオペラアリアを含むクラシック楽曲の音楽表現、演奏法、と演技法。また、ミュージカルにおけるミックスヴォイス等の発声法と歌唱法、演技法について。
2. 保育者養成校の音楽教育における授業内容、指導法、教材研究について。

【研究の概要】

1. コロナ感染の影響で今年度も上京してのレッスンを受講できず、技術の習得・表現の習得を達成できず残念であった。しかしながら、ミックスヴォイスに於いてはクラシックやミュージカルとは別の分野で活躍されている男性歌手・アーティストから学ぶべき点が多く、僅かではあるが実践に至るまでの音域や楽曲を身に付けられたように感じる。今までは女性の声・発声・表現から得る事を考え、その考えに沿って研究、演奏活動（アリア等以外）する事が当然と思っていた。理由として、女性はファルセットで統一、メゾソプラノやアルト、音域や楽曲によってはソプラノの低音域では胸声発声、地声も使い、男性は地声で統一していき、カウンターテナーやミュージカルでの役によってはファルセットを使う形が殆どである。女性の声質と発声ばかりに気が向かなかったが、クラシックやミュージカル外の男性歌手から今まで以上にミックスヴォイスや地声を出すための体の使い方を得られたように思う。ＣＤ、ＤＶＤ、本、楽譜からある意味新鮮で斬新な出会いとなり、間地かでその歌唱力たる歌唱法と表現力を聴いて、そして観て確認できたら自身の演奏活動で使う楽曲にどのように使うかのヒントが得られると考える。また、言葉の表現力、つまり言葉の伝え方、言葉をどのように重んじどのように自身の言葉として操られるか、声に魅力があっても、発声によどみがなくても、言葉がメロディーにのって人の心に入っていかないとそれは音楽ではないといっても過言ではない。勿論、歌ではない楽曲も、言葉ではない表現の仕方で言葉があると考えて良い事で、言葉のない音楽はないと考えている。今年度は意外な歌手・アーティストからミックスヴォイスで必要な腹筋の使い方、ビブラートを使わない歌唱法を自らの勝手な解釈ではあるが研究できた。また、心に届く言葉の表現法や日頃学生にも指導している言葉からのイメージ力を改めて感銘を受けながら研究できたと思う。次年度も引き続き今年度のような研究をし、クラシックでのストレートではない息に声が乗っているような、声帯を押し付けない発声ができるよう研究していきたい。

2. 2 班制になっての授業は隔週でピアノ・声楽(2 年生)、ピアノ・声楽とコード(1 年生)の授業をどのように進めていけば学生がピアノならピアノ、声楽なら声楽の授業を毎週受講している事になるか試行錯誤した。学生は隔週であると怠けてしまうためか前回指導した授業内容を忘れており、課題もしていない学生が残念ながら多かった。逆に学生から授業がないと緊迫感がないため、毎週ピアノレッスンも声楽・手遊び・コードもして欲しいとの事だった。1 年生はピアノ初心が多かったが、初心者レッスンや個人的にもレッスンを申し出る学生もいたため各々に上達したと思う。ピアノに抵抗がある事を考え、その緊張度を配慮するために弾き歌いのテスト、またはレッスンも含め少なかったのは改善したい。しかしながら、1 年生は次年度の実習を後期になって教員からの声掛けも関連して、自ら弾き歌いの練習を始めたりレッスンを希望したりしていた事はとても良かった事であった。声楽はコロナ過でマスクもしくはマウスシールドでの授業のため心おきなく声を出す事が出来ず、口角から表情筋にかけてアップする大切さや、口の開け方、歌詞読みの習得がなされなかったと考える。しかし学生からは歌う事がさらに好きになった、子どもと歌う事が楽しみ、出なかった声(音域)が出るようになった、知らない子どもの曲を知る事ができた、との感想が殆どであった。楽曲の言葉の意味やイメージに対する意識はかなり足りない面であるため、次年度はイメージ力、楽曲の理解度にも演奏技術同様に指導の在り方を新た

に研究した実践したい。

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】栄養士コース　【職名】准教授　【氏名】 太田　美代
【研究の題目】　女子短大生の生活活動調査を基にした食事内容の検討

【研究の概要】

昨年度実施した「女子短大生の生活活動調査を基にした昼食内容の検討―スマホ写真を用いた昼食調査を利用して―」の研究で、生活活動時間調査の結果、学生の身体活動レベルが「低い」に該当し、昼食として「主食のみ」又は「主食と飲み物や汁物のみ」の食事をとっている学生が一定数いることを報告し、主食・主菜・副菜が揃った弁当や学食の定食を食べる学生に比べて、「その他」の学生の摂取エネルギーが低く、平均で必要量の７割程度しかとれていないことを明らかにした。

前報では、昼食のみを調査対象としたため、一日の食事としての評価を行うことができなかった。そこで今年度は、生活活動調査と一日分の食事調査を同時に行い、学生の食事内容の分析を実施することとした。対象とする学生は、本学生活創造学科栄養士コースの１年生 25 名である。

今回、学生の生活活動時間調査をもとに身体活動レベルを求めた結果、２割の学生が「ふつう」、8 割の学生が「低い」に該当する 1.5 以下に相当した。座位が中心の生活で、家事に携わる時間も短く、運動をする学生もあまりいなかったことから、身体活動レベルが全般に低かった。消費エネルギーは平均で約 1，658kcal と推計された。これは、日本人の食事摂取基準（2020 年版）の参照体位における 18～19 歳女性身体活動レベルⅠ（低い）の推定エネルギー必要量 1,700kcal/日とほぼ等しい数値である。

食事調査では、スマホで撮影した写真データを収集する方法で摂取栄養量の見積もりを行った。前回の昼食調査の反省を踏まえ、食事内容がわかるようなメモも添えたり、コンビニ等での購入物は栄養成分表示がわかるような撮影をしたりする協力を求めて調査を行った。

本調査では、72 件のデータのうち、12 件が主食のみ又は主食と飲み物や汁物のみの食事だった。義務教育から食に関する指導を受け、食と健康について専門的に学ぶ栄養士コースの学生であっても、菓子パンだけ、おにぎりだけの食事をしているということから、学んだ知識や技術が自分自身の暮らしと結びつかず、実生活に生かされていない現状にあるものと考えられる。一方で、コンビニで購入する一品も鶏肉を使ったパスタサラダなど、一応栄養のバランスに配慮した選択を心掛けていると思われる学生もいた。今後の学修では、今回の調査結果を教材として、短大で学ぶ内容が自分の生活と深く関わっていることを自覚させながら指導を行う必要があると考える。また、自らも食の専門家である栄養士として社会に出ていく立場であることを改めて考えさせ、不足しがちな栄養素を含む食品を加えて食事を整えることを意識させたい。

今回の調査では、推定エネルギー必要量を満たした食事をとっていた学生はわずか 3 割しかいなかった。1 日だけの調査であったため、日常的な食習慣を反映したものとは言い難いが、食事量（特に炭水化物）を控えて摂取エネルギー量を抑えた食事をとる傾向にあることがうかがえる。その反面、脂肪エネルギー比が高い食事となっていたことには注意を要する。

ただし、体格指数 BMI の判定で低体重に分類される学生は１名しかいなかったので、日常的に摂取エネルギーが不足しているわけではないと考えられる。

摂取エネルギーが低い食事は他の栄養素も不足しがちであることから、身体活動レベルを上げてエネルギー必要量を増やすことも重要である。

青年期から成人期へ移行する年代の健康は、その後の生涯を通しての健康に大きくかかわり、特に女性は次世代の健康にも大きくかかわる可能性があることから、日頃から自身の食生活に関心を持ち、自らの食の課題を意識して日常の食を営むことが重要である。学生たちは、ライフステージ別の栄養管理で、「妊娠前からはじめる妊産婦のための食生活指針」を学んでいる。授業では「今、あなたたちのこ

と」であると語りかけたが、今回の調査を見る限り、実生活への応用は十分とは言えない。
今回の調査結果をもとに、個々の食生活を振り返る活動を仕組み、若い世代の食生活改善の一端を担っていきたいと考える。

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　栄養士コース　【職名】　講師　【氏名】　古賀　克彦

【研究の題目】　西洋から長崎に伝わった加工食品

【研究の概要】

１．　調査の目的

ポルトガル船が 1550 年に平戸、その後 1571 年に長崎港に来航して以来、長崎には様々な加工食品や食品を加工する技術が伝来した。加工食品の種類は肉加工品、乳加工品、菓子類、嗜好食品等多岐にわたるが、その技術の一部は開港直後や鎖国中の長崎にもたらされ全国各地に広まった。今回、この時期のポルトガルやオランダ等、主に西洋から長崎にもたらされた加工食品や食品加工技術について調査を行った。

２．長崎に伝来した加工食品

●アルヘイト：アルヘイトはポルトガル語でキャンディ等の砂糖菓子を意味するアルフェロアが訛ったもので、有平糖、とも記載される●カステラ：ルーツとなる菓子は、1550 年に平戸にポルトガルの船が初めて来航した際にもたらされた南蛮菓子の一つであるパン・デ・ローとされている。●カセイタ・マルメロ：砂糖漬けのマルメロを箱状にした菓子で、日本語では加勢以多と表記されることもある。熊本の銘菓として幕府への献上品としても用いられた。●カルメイラ：赤銅の鍋に砂糖を煮たぎらせ重曹を加えて冷やし固めた菓子で、ポルトガル語でカラメルを意味する「caramelo」が訛って日本語になったもの。●缶詰：日本で最初の缶詰製造については明治二年、広運館の教師が同じく取締りである松田雅典に缶詰製造法の口授をし缶詰を製造したとされている。●コーヒー：日本で最初にコーヒーが伝わった時期を正確に示す資料はないが、オランダ商館が平戸から出島移転してきた 1640 年頃ではないかとされている。●コンペイト：　16 世紀後半に日本にもたらされたとされており、元禄の頃にはコンペイトの製法が長崎の街中で販売されていた。●タマゴソウメン：ポルトガルから伝わった南蛮菓子の一つで、現在のポルトガルでも同様の菓子が作られている。鶏卵素麺の名称で福岡市の銘菓となっている。●タルト：南蛮菓子の一つ。名前の由来としてポルトガル語でケーキを意味する「torta」が由来とする説と、オランダ語でケーキを意味する「taart」が由来とする説がある。●炭酸飲料：日本で初めて製造販売したのは長崎の藤瀬半兵衛で、1865 年に外国人からレモネードの製法を習いレモン水と名付けて売り出した。●チョコレート：日本で最初にチョコレートを食べたのは長崎丸山の遊女とされている。●チンダ（赤葡萄酒）：日本に初めて伝えたのは 1549 年に布教のため日本を訪れたフランシスコ・ザビエルとされている。●パスタ：日本で最初にパスタの生産が始まったのは 1880 年頃の長崎外海地区とされており、フランス人宣教師のドロ神父は生産した小麦を用いマカロニやパン、ソーメンの製造を行った。●ハム：日本で初めてハムを食べたのは出島に出入りする人だったと考えられている。●パン：平戸イギリス商館の館長コックスの 1615 年 6 月 16 日の日記には、平戸の街にパンを製造する職人がいたことが記載されている。●ビスカウト：長崎には 1550 年にポルトガルの船が平戸に来航した際に食料として船に積まれていたものが伝わったのが最初と考えられている。●ビール：日本に初めてビールを伝えたのは 1613 年に平戸に来航したイギリス国王使節セーリス、日本で初めてビールを醸造したのは長崎出島でオランダ商館長を務めたドゥーフとされている。●ボウル：ポルトガル語でケーキを意味する「bolo」が訛ったもので、日本では小麦粉や砂糖、鶏卵を使用する菓子のことである。

３．考察

西洋や中国から多くの食文化がもたらされ、日本の食文化は大きく変化した。鎖国の影響もあり最新の技術や文化は長崎に集中して伝えられ当時の長崎は食文化においても日本で最先端の地域でもあった。当時、長崎と主に交流があったのは中国とオランダ、ポルトガルであったため、日本の食文化はこれらの国の影響を強く受けており、食品の名称等でその影響を見ることが出来た。当時の長崎には日本の加工食品の基礎となる技術や人材が集まったため、明治時代の食品産業の著しい発展にも長崎は大きくかかわっていた。また、

海外からの食文化の集中は、長崎独自の料理形式である卓袱料理等に洋風の料理が取り入れられるなど、長崎独自の食文化形成にも影響を与えている。海外から長崎に伝わった加工食品は、日本人の嗜好に合わせ改善され日本各地に伝えられた。この痕跡は現在でも各地で見つけることができ、愛媛県のタルト、福岡県の鶏卵素麺、佐賀県の丸ぼうろ、熊本県の加勢以多、沖縄県の花ボウル等は、長崎に伝えられた南蛮菓子がルーツとなっている。海外から長崎に伝えられた食文化は長崎の食文化のみならず、日本の食文化にも大きな影響を与えており、今後も海外と長崎の食文化のつながりについて調査を行っていきたい。

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　　【職名】　講師　　【氏名】　荒木正平

【研究の題目】
対人ケア場面におけるコミュニケーションに関する研究

【研究の概要】
（1）3 年前から開始したものの、コロナ禍の影響で昨年度より保留となっていた、「障害のある子ども、気になる子ども、特別の支援を必要とする子どもの、教育・保育場面における“育ちあい”の支援に向けて」の研究・調査については、研究協力施設と協議を継続しているものの直接の聞きとりがやはり難しい状況である。コロナ対応に関する状況も変化しつつあり、次年度は、引き続き文献研究を継続しながら、民間の児童福祉サービス提供施設における参与観察と、職員等への聞き取り調査の再開が見込まれるため、準備を進めたい。

この研究・調査については、既に報告の通り教育・保育現場においてその対応の重要性がますます高まっている「(発達障害を含む）障害のある子ども、気になる子ども、特別な配慮を必要とする子ども」とのかかわりと支援の方法を、実践現場の観察記録や支援関係者の語りを通して、より具体的に検討していくことを目的に実施しているものであり、本研究を通して、支援を要する子どもとその保護者・支援者を取り巻く環境の整備・改善に向けた方策の検討を進めたいと考えている。

これに加えて、本年度はまとまった形での報告は出来ていないものの、キーワードとしての「いじめ」や「不登校」といった二次的障害との関連が指摘される論文・文献に関する調査を進めている。この観点からは、一昨年度までの研究において浮上した、障害を抱える子（障害当事者）の支援のみならず、家族支援・家庭支援の意識がより重要性に関する研究とさらに深くかかわることが考えられる。障害を抱える子のみならず、障害を抱える子を支援する「もう一方の当事者」としてあり家族（親・保護者・きょうだいを中心とする）の思いやその支援の在り方についての理解を促すことが可能となるような成果報告に向けて準備を進めている。研究手法としては、①当事者としての子ども、②当事者としての家族（親・保護者・きょうだいなど)、③支援者（専門職・非専門職問わず）へのインタビュー調査と、前述の参与観察から得られるデータを活用することとなる。

さらにもう一つのテーマとして、こちらも特別な支援を要する子どもとの関わりについて、「遊び」を重要なキーワードとして、幼児教育・保育現場のスタッフの思いについて実施した個別のインタビュー調査等の結果も踏まえる形でまとめたものがある。これについても参与観察から自らデータを収集し、検証を進める予定であったが、すでに記載の通り調査が中断となっている。こちらも次年度の調査再開に向けて先行研究の再検討と調査準備を進めたい。

（2）広義のケアをめぐる関連研究として、「子ども」「障害」関連研究と並行して進めている「認知症高齢者」のケアをテーマとしたものについては、テキスト作成という新たな形で成果をまとめることができた（出版準備中)。筆者は現在、児童・障害関連の研究をメインテーマに設定しているが、長く継続して関わってきた認知症高齢者ケアの場面に関する研究についても、「対人ケア場面におけるコミュニケーション」としての重要性は増し続けている社会状況もあり、今後も研究を継続したいと考えている。

広く対人ケアをめぐる思想史的背景やその語られ方が、現実のケアを必要とする人々やその支援者にどのような形で作用しているのかを考えることは、分野を問わず大きな意味を持つ。これまでに集積した各分野の成果・課題を集約しつつ、広義のケア実践に関する考察を引き続き進めていきたいと考えている。

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　ビジネス・医療秘書コース【職名】講師【氏名】江頭万里子
【研究の題目】秘書実務の演習に反転授業を用いた試みについて
【研究の概要】

1. 背景と目的

これまで、秘書実務１・２では、初めに講義形式でその単元に必要な知識習得のための授業を行い、続いてその知識を活用して演習を行う授業を行ってきた。学生の技能の向上のためには、できるだけ多くの演習の時間を確保したいが、この授業法では、90 分全てを演習に充てることはできない。学生の技能向上のためには、より多くの演習時間の確保が望ましい。この問題点を改善する方法として、90 分全ての時間を演習に充てることができる反転授業*を実施し、その結果を分析することで、効果的な授業法の検討のための資料とすることとした。

2. 方法

①対象者	21LA（24 人）
②授業科目	秘書実務１、秘書実務２
③対面授業の実施日	秘書実務１　2021 年 10 月 20 日、27 日
	秘書実務２　2022 年 4 月 14 日、20 日
④授業内容	秘書実務１：秘書のコミュニケーション（敬語）
	秘書実務２：電話応対（応用）

3. 結果と考察

今回、澁川（2014）[1] を参考に授業設計し反転授業を２回行った。

秘書実務１（2021 年）の反転授業後に学生に対して行ったアンケートの結果から、①自宅で動画教材を使って事前学習する方法を概ね受け入れたこと、②全員事前学習を行ったこと（一人は動画が見れなかったのでテキストで学習）、③単元の授業内容を 80%が理解できたこと、④動画教材で事前学習し、対面授業で敬語の仕組みを学生が説明し、その後、活用の演習を行う授業法について、数名を除き好感を持ったことがわかった。

秘書実務２（2022 年）の反転授業後に学生に対して行ったアンケートの結果からは、全員が動画を視聴し事前学習をしたこと、反転授業に対して、①授業が効率よく進む。②動画による事前学習が対面授業の理解と演習に役立つ。③既習の内容について忘れかけた部分を思い出すことに有効。④自分の好きな時間に視聴できる。⑤動画は自分のよいところで止めることもできるし、繰り返し視聴することもできる。⑥動画で何回も練習できる。⑦自分のペースで演習ができる。などという理由でこの授業法に好感を持ったことが分かった。

電話応対応用の実技試験の平均点は、反転授業を行わなかった 2021 年度の平均点より 7.78 点高く、2021 年度に秘書実務２を受講した学生より高い技能を身に付けたものと考える。この差は、ｔ検定の結果、１％水準で有意差が見られた。

今回の試みから、学生は、反転授業には好意的な感想を持ち、動画教材を使った予習は、学生の主体的な取り組みを促し、対面授業での授業内容の理解を深めると同時に、演習の時間を創り出す手助けとなることが分かった。今回は、秘書実務１で１回、秘書実務２で１回、復習の動画教材を用いた反転授業を行った。今後は、教材の内容の充実を図りながら、未学習の分野や総合演習などその他の単元でも反転授業を適用し、より多くの演習の機会を創出し、授業内容の定着と学生の学びの質を向上させ、学生の「できる」ことを増やしていきたい。

＊反転授業とは，授業と宿題の役割を「反転」させ，授業時間外にデジタル教材等により知識習

得を済ませ，教室では知識確認や問題解決学習を行う授業形態のことを指す（重田、2014）。

4. 引用・参考文献

重田勝介、反転授業　ICT による教育改革の進展、情報管理 vol.56、no.10、2014
https://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/56/10/56_677/_pdf（2023.1.22 取得）
澁川幸加：深い学びを促す反転授業の作り方、日本ビジネス実務学会第 40 回全国大会分科会 A 資料、日本ビジネス実務学会（2021）

研究の詳細は、本学紀要第 48 号に記載。

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】　講師　　【氏名】　南條　恵

【研究の題目】

領域「健康」の指導法における子どもの主体的な運動遊びについて

【研究の概要】

現代社会における子どもの生活環境は、子どもの心身の発達にどのような影響を与えているのだろうか。豊かで便利な日々の生活は、それまで子どもの成長発達過程の中で、身に付けるべきこと、自然とうまくなっていくことのいくつかを「特に必要のないもの」にした。例えば、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、それまでより多くの回数行うことになった「手を洗う」という行為は、蛇口をひねって水を出す、石鹸を泡立てる、タオルで手を拭いて、元にあった場所に戻す、といった一連の動作、作業を必要としなくなった。

また、都市化や少子化の進行は子どもが群れで遊ぶという姿も失くしていった。戸外でのびのびと遊ぶことができる場所、そこへ行くと仲間がいて何らかのやり取りが始まる。そのような子どもたちの姿を地域の大人たちが自然に見守るというような光景はもはやほとんど見ることができなくなっている。

このような子どもの遊びや生活環境の変化は体力や運動能力にも影響を及ぼしている。スポーツ庁による「令和４年度　全国体力・運動能力、運動習慣等調査」によると、小・中学校の男女の「体力合計点」は、令和元年度の調査から連続して低下している。その要因として、運動時間の減少、肥満である子どもの増加、朝食の欠食、睡眠不足、スクリーンタイムの増加などの生活習慣の変化を挙げている。スクリーンタイムとは、
平日一日当たりの学習以外のテレビ、スマートフォン、ゲーム機等による映像の視聴時間であるが、
「４時間以上」と回答した児童生徒の割合が小学校男子で 27.1%、小学校女子で 22%、中学校男子で 28.3%、中学校女子で 26.1%となっている。

また、新型コロナウイルス感染症の影響によりマスク着用による激しい運動の自粛や学校の活動が制限されてことで、体育以外での体力向上の取り組みが減少したなども考えられるとしている。

生活環境の変化による体力や運動能力への影響は乳幼児においても同様であり、人生の基盤づくりの時期において、体力、運動能力の獲得のための機会の保障は、その後の心身の発達に大きな影響を及ぼすものと考える。乳幼児が体を動かす楽しさや心地よさを味わいながら、主体的にさまざまな遊びを経験することで、乳幼児期における多様な動きを身に付けることにつながるであろう。

乳幼児期の子どもが「運動あそび」をおこなうことによって、体力や多様な動きを身に付けることは、その後の運動に親しむ資質につながるだけでなく、意欲や気力の　　、対人関係の構築などにもつながるであろう。乳幼児期の“体を動かす機会”の保障のためには、保育所、幼稚園等の保育施設での乳幼児期の学びの特性を十分理解した上での保育実践が求められる。

『保育所保育指針』は、2008（平成 20）年に告示されたことによって、国による正式な指針文書となった。その後、2017 年の『幼稚園教育要領』改訂にあわせて『保育所保育指針』と『幼保連携型認定こども園』も改定された。これらの保育施設では、それぞれの特性を踏まえながらも、保育内容の方向性の整合性が図られている。

各保育施設では、それぞれ『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』『幼稚園教育要領』に基づき、「全体的な計画」を立てることとなっている。これは日ごろの実践の計画、振り返りの指標となるものである。つまり、「全体的な計画」は子どもたちとの関りをどのようにおこない、子どもの育ちをどのように考えるのかといった保育観の表れにもなる。

また、『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』では、それぞれの保育施設の特性を踏まえながらも保育内容における方向性の整合を図ろうとしている。つまり「幼児教育を行う施設」として、幼児期に育みたい「資質・能力」、および「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の共有である。

このように今回の研究では、乳幼児期の保育施設において、子どもが主体のとなった、子どもが自発的に体を動かして運動遊びを楽しむとはどのようなものかということを、保育実践記録を用いながら考察をおこなった。

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　　【職名】　講師　　【氏名】　船勢　肇

【研究の題目】

①領域「言葉」の指導法と教育行政

②大学自治批判の思想

【研究の概要】

①領域「言葉」の指導法につては、多くの実践的な取り組みが報告されているが、その意義づけについてはほとんど正面から取り組まれていないため、これを課題とした。

分析として、現行の教科書、倉橋惣三、田中耕太郎、日本国憲法と教育基本法を対象とした。これによって、あまり意識的に論じられていないが、民主主義の成熟と密接不可分にあることを示した（立ち入って論じなかったが、現行の教育基本法と日本国憲法の不一致は、もっと問題視されて良い）。結論からいえば、こうした法体系への関心が希薄なまま、実践的な保育者養成がおこなわれているおそれがある。

さらに、保育者養成機関における教養教育の現状、「コミュニケーション能力」の問題性を確認し、現状が厳しい者であることを述べた。コミュニケーションそれ自体はデモクラシーの成熟の必要条件に違いない。しかし、大学教育においては、経済産業省のかかげる社会人基礎力の一部を形成する「コミュニケーション能力」が重視されている。ここには最終的には産業力によって貢献する人材の育成が想定されやすく、民主主義の成熟は視野に入りづらいおそれがある。

言葉とは、人と人との関係性の大きなツールの１つであるが、それは公共空間を全ての人に望ましい形で実現できるか否か、といった根源的な課題と関わる。たとえば藤原保信のように言語共同体が成立するという一点にその可能性を求める主張もある。そもそも、コミュニケーションとは大きな論点を内包するものである。こうした人類史上の難題と領域「言葉」の指導法が同居していることを念頭におくべきであろう。

民主主義の担い手を育成する教養教育は、短期大学を含む高等教育に求められ、国際的にも、日本国憲法からもそれは要請されている。「現場で役に立たない」という一言をもって、看過されてよいはずのものではない。幼児に対しては、計画で計算しつくせない可能性をもつ遊びが重要される。それと同様に、保育者を目指す学生に対しても、一見無駄に思えるような広く教養を培う機会を提供することが重要と考えるべきであろう。幼児教育が、幼児の可能性を広げるものでなければならないなら、保育者養成教員もかかる一見無関係な領域を含めた考察をより深め（保育者養成に“遊び”を取り入れる）、保育者養成に反映させられる回路を広く考究していくべきとの問題を指摘した。

②戦前日本において、もっとも辛辣に大学自治を批判した蓑田胸喜を研究対象とした。

資料として全集が刊行されているものの、購入は困難であり、他大の図書館を利用しつつ、膨大な資料を収集・分析している。とはいえ、研究費も少ない中で研究を進めることはかなり困難である。大学教員として社会から付託されている責任を思えば、良心の呵責に苦しむ。蓑田は、極端な観念右翼といわれたため、研究対象として正面からあつかわれにくかった。そのため著名でありながら研究する余地を多分に残している。

投稿予定の論文につき、詳細な内容をここで公表することは出来ないが、より広い背景として 20 世紀の行政国家化を念頭におきながら、大学の意義づけとの関連について考察する。

さらに、これまでの研究（著名な滝川事件のきっかけとなった瀧川幸辰・同じく京都大学法学部に在籍し戦後は立命館大学学長となった末川博・教育基本法を起草した田中耕太郎・戦後大学行政の象徴的な存在である南原繁など）を大きな視点からまとめ、単著出版の道筋を具体的なものにしていく。

以上

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】　講師　【氏名】　大徳　朋子
【研究の題目】描画（ぐるぐる描き）における心理面の発達

【研究の概要】
１目的
保育場面において描画は日常的に利用される表現方法である。遊びの１つとして子どもが自主的に描画をおこなうこともあれば、保育の内容として保育士側から子どもへ提案され実施される場合もある。描画は年齢に伴い変化成長していくことが知られているが、子どもが描いた絵を深く知る中で、子どもの心理面などの変化や発達が見られるとすると、こどもの内面理解につながり、保育場面での関わりへ反映することができるのではないかと思われ、研究を進めることとした。今年度はデータがそろった段階で完成までは至らなかったが、次年度には結果をまとめて、実際に現場の保育士へのフォードバックを行いたいと考えている。

２方法
筆者が保育所等の施設を訪問し、保育者へ方法を説明し実施してもらった。保護者については実施について事前に知らせ子どもが描いた描画作品は研究以外には利用しないことなどを伝え、参加するかどうかは自由とした。参加したくないと思われた方への実施は行わなかった。なるべく保育者と子ども１対１での実施をお願いした。さらに、描画と同時に子どもの行動についての行動評価尺度の記入をお願いし、描画作品と合わせて評価をすることとした。その後、描いた子どもをよく知る保育士に、描画から得られた子どもの内面理解についての情報が日ごろの子どもの印象と合っているかどうかを尋ね、アセスメントとして利用できるかについての検証をおこなった。

３内容
Ａ４の画用紙とクレパスを準備し、「今一番好きな色を選んでね」などと声をかけて、画用紙に２０秒程度ぐるぐると描いてもらう。その後、他の色を選び同様に描く。これを全部で５回繰り返し描画を完成させる。完成後、こどもには、「きれいだね」「楽しかったかな」などと声をかける。上手、下手などの評価を伴う声かけは避け、ともに作品を味わい認める時間にする。実施中、指示に従いにくい子どもには細かく声をかけるなど配慮しながら実施してもらう。

４結果
現在、まだ分析途中ではあるが、描かれた丸の大きさや形状、使用されたクレパスの色、などを計測しデータ化した。描かれた丸の大きさや筆圧からは内面のエネルギーの強さや弱さがわかるようである。丸を複数描く、１つの丸として描く、といった形状の違いからは、自己への没頭性または、周囲へ意識を向けているのかといった特徴が表れているのではないかと考えられる。さらに、クレパスの色であるが、先行研究からは男性が好む色、女性が好む色の違いが述べられている。大きくわけると、男性は青、黒、緑のような寒色を、女性は赤、オレンジ、黄色といった暖色を選ぶという結果があり、そこからは、色と子どもの性役割への意識が見えるのではないかと考えられる。このようにみていくと、寒色で大きな丸を筆圧強く描いた作品からは、「内面エネルギーの高さ、自己没頭性、男の子らしさ」などが印象として上がってくる。反対に、暖色でいくつかの丸を描き、筆圧はさほど強くないという作品からは、「エネルギーの弱さ、周囲への意識が高い、女の子らしさ」などが上げられる。実際の現場の保育士からの印象と照らしてみると、８割程度が作品からの印象と合っているようである。
　よって、子どもの身近な表現方法の１つである描画から子どもの内面の理解をすることができることはある程度立証できるといえる。
今後は、さらに細かな部分や別の項目についても分析を深め、現場の先生方へ有益な情報をお伝えできるようにまとめを進めていきたいと考えている

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　栄養士コース　【職名】　助教　　【氏名】桑原　倫子

【研究の題目】　若年女性の生活習慣と体格に関する研究

【研究の概要】

（研究の目的・意義）

本研究では、若年女性の体組成および筋力を測定し、運動習慣や食生活などの生活習慣との関連を調べ、低体重、筋肉量低下、筋力低下の有無とその危険因子を検討する。

現在平均寿命の増加とともに、健康寿命が問題となってきている。健康寿命に影響を及ぼす因子として身体活動量の低下があげられる。近年サルコペニアという老化による筋肉量と筋力の低下及びそれに伴う身体機能の低下状態が定義された。サルコペニアは日常生活の質（QOL）の低下、転倒やフレイル（老化に伴う筋力や活力が衰えた状態）、骨折のリスクが高く、観察研究でも身体機能の低下、歩行速度低下、入院、死亡のリスクを高めるとされる。

若年時の筋肉量の低下や骨密度の低下は中高年以降のサルコペニアや骨粗鬆症の危険因子とされ、若年時の運動習慣、食習慣と筋肉量の関連を調べることで、将来的なサルコペニア予防につながる可能性がある。

（方法）

対象者

長崎県立大学女子学生　32 名

測定項目

(a) 筋肉量・筋力の測定　体組成計：生体インピーダンス法（InBody）を用いて正確な四肢骨格筋量・体脂肪量・体重、BMI を測定する。筋力は握力を左右それぞれ 2 回ずつ測定し、最大値を採用する。

(b) 食習慣関連調査　BDHQ（食事歴法・食物摂取頻度調査法質問紙）を用いた食事調査を実施する

(c) 栄養、成長、運動習慣に関するアンケート調査
若年時の運動習慣（小中高時の部活やスイミングなどの習い事）、現在の運動習慣（1 回 30 分程度の運動を週 2 日以上、1 年以上継続）、出生体重、月経の状態、喫煙歴、飲酒歴、サプリメント服用の有無を調査する

(d) 骨密度（超音波）、内臓脂肪（Dual scan）の測定

(e) 栄養・代謝関連マーカー（インスリン、C-ペプチド、レプチン、アデイポネクチン、血糖、血糖、Alb、CPK、中性脂肪、コレステロールなど）の測定

10 時間以上の絶食下（空腹時）で対象者の採血を行い測定する。

（結果）

対象者 32 名の身体的特徴の平均については、年齢 20.6 歳、身長 157.2（cm）、体重 52.5（kg）、BMI21.1 であり、日本肥満学会が定めた BMI における肥満度分類でみた、やせ（BMI＜18.5）の者は 1 人（3.1%）、肥満（BMI≧25.0）の者は 1 人（3.1%）、残りの 30 人（93.8%）は正常（18.5≦BMI＜25.0）であった。また、最大握力＜18.0 の筋力低下をきたしている者はおらず、サルコペニアに該当するものはいなかったが、SMI＜5.7 のプレサルコペニアに相当するものは 11 人（34.4%）存在した。隠れ肥満に相当するものは 10 人（31.3%）で、このうち 4 人は SMI＜5.7 であり、サルコペニア状態と考えられた。

対象者 32 人を SMI≧5.7 の正常群（21 人）と SMI＜5.7 のプレサルコペニア群（11 人）との 2 群に分け比較したところ、プレサルコペニア群では身長 154.5（p=0.016）、体重 48.2（p=0.001）、BMI20.2（p=0.008）、筋肉量 31.8（p=0.002）、最大握力 25.9（p=0.011）と、正常群よりも有意に低値であった。また、現在の運動習慣の有無及び過去の継続的な運動習慣の有無と SMI との関連をみたところ、現在の運動習慣のある 9 名の SMI が有意に高く（p=0.004）、小中高と過去に継続的に運動習慣のあった 18 人も SMI が有意に高値であった（p=0.014）。栄養素摂取量において、炭水化物、たんぱく質、脂質、カルシウム、鉄、ビタミン D では、2 群間有意差はみられなかったが、総エネルギー摂取量（kcal/日）がプレサルコペ

ニア群で1295と、正常群1503と比べ低い傾向（p=0.057）であった。
この他、まだ検討できていない項目においては、現在考察中である。

令和４年度（2022年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】栄養士コース　　【職名】助教　【氏名】桑原　真美
【研究の題目】栄養士養成のためのe-ラーニングシステム導入へ向けて
Webアプリケーション概要とユーザビリティテスト結果報告
【研究の概要】
1.背景
(1)栄養士実力認定試験と本学の成績
栄養士実力認定試験とは栄養士養成施設校の学生の資質向上と資質均一化を図り、その結果を栄養士養成教育に反映させるために全国栄養士養成施設協会により毎年実施される試験である。本学の成績は平成26年度までは認定Aの者の割合が60～70%台を推移していたが、その後は40～50%台前半を推移し、令和3年度は31.8%とここ10年間で最も低い値となった。本学では栄養士実力認定試験の受験対策として令和2年度より栄養士スキルアップ特講を専門科目として設けている。科目を新設した令和2年度に認定Aが50%台となり、平均得点率が全国平均を超えたものの令和3年度の成績は落ち込んだ。この結果は、本学の学生が栄養士としての必要な知識・技能を十分に修得できていないことを示しており、栄養士実力認定試験への対策のみならず、日頃の学習方法を見直す必要があると考えられる。
(2)本学栄養士コースにおけるe-ラーニングの現状
本学栄養士コースの学生は紙媒体での教材提供がなされており、電子媒体での教材提供はほとんどなされていない。そのため、学生が学習するためには多くの紙媒体を持ち歩かなくてはならない現状にあり、手軽に勉強できる学習環境であるとはいいがたい。また、栄養士コースが学生に提供する自身の数量的実力把握の機会は定期テストまたは小テストのみに限られている。さらに、教員が学生ひとりひとりの実力を評価しフィードバックする仕組みは紙資料の採点/集計/分析に終始しており、これに係る時間は相当なものである。そのため、今まで以上に学生の学習と評価の機会を創出・提供するためには紙媒体だけではなく、人・時間・労力の面でより柔軟な電子的手法を用いることが効率的である。学生の理解度や習熟度に合わせた教育を行う上では対面での授業や紙媒体を用いた教育が前提であり、その補助的な役割として電子的媒体を用いた教育を取り入れるべきであると筆者は考えている。電子的な手法による栄養士コースの学生に特化した学習環境は本学では未導入であり、e-ラーニングシステムを導入することで学生のさらなる実力向上を期待できる。
2.目的
本報告書では栄養士養成課程の学習補助ツールとして開発されたWebアプリケーションKnowledge Enhancement of Nutrition Students（略称: KENS 以下KENSと呼ぶ)を用いた学生に対するユーザビリティテストの結果を報告する。KENSは栄養士実力認定試験対策を想定し、反復学習を行うことができるWebアプリケーションである。KENSの導入へ向け、ユーザビリティテストにおいて得られた結果からKENSに搭載している機能の改善点の把握および学生のKENSへの期待度を考察する。
3.ユーザビリティテストの方法
被験者は任意に実験に参加した本学栄養士コース1年生22名、2年生8名の計30名である。実験期間は2022年11月28日から12月9日までの2週間とした。被験者には自身のスマートフォンにてKENSを使用してもらった後、使用感および今後KENSを活用したいかを問うアンケートに回答してもらった。アンケートは自記式とし、その場で回収した。
4. 結果および考察
ユーザビリティテストのアンケート結果より、小テスト機能およびトレーニング機能の問題の解きやすさ、解答結果および解説のページの見やすさについては特に問題はなかったことが伺えた。しかしながら、マイデータ機能における成績を示すグラフおよび表の見やすさについては改善点が見つかった。スマートフォンでは表示がわかりにくく見にくいといった意見があがったため、導入までに改善を行う予定である。また、アンケートにて「KENSが自身の学習に役立つか」「導入されたら使ってみたいか」の問いに

ついて「そう思う」と回答した者が大多数を占めたことから、KENS に対する学生の期待感は高いことが伺えた。

今後はKENS の令和５年度の導入を目指し、今回実施したユーザビリティテストの結果を基に搭載機能について改善していく予定である。また、導入後はKENS の使用が学生の成績に与える効果について調査したいと考えている。

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】助教　【氏名】山中　慶子

【研究の題目】　保育学生の実習における造形活動の課題

【研究の概要】

◆研究の背景

学生にとって、実習は養成校での理論的な学びが実際とつながる経験であり、その後の保育方法や内容の授業において、子どもたちの姿と重ねて理解することが出来るようになる大きな機会である。実習生は、幼児の年齢や興味関心、これまでの経験などを考慮して事前に指導案を作成し、自身が指導者となり保育を行う。特に身の回りの素材を使用した造形活動は、材料準備の点からも実習での設定保育に適しており、多くの学生が計画する活動の一つである。しかし、予想しない展開や困難にぶつかり、解決策を得ないまま実習が終了してしまうことも少なくはない。

◆目的

本稿の目的は、授業におけるグループワークによって抽出された造形活動の際の困難や問題点を整理し、造形分野における実習前指導について示唆を得ることである。また、グループワークを通しての学習効果について検討する。

◆方法

実習を終えた２年生を対象に、実習で造形活動を実践した際の困難事項をグループで出し合い、自分たちで解決策を考えるというワークを実施した。

◆実践

教育・保育実習の設定保育で実施した造形活動の中で、「上手くいかなかったこと」「困ったこと」について簡潔に記すよう伝え、グループ内で共有し、その事例から「子どもの気持ちを想像する」ワークを行った。また、その気持ちがプラスに向かうための具体的な方法（環境構成・援助・声掛け）などを検討した。

◆結果・考察

実習での造形活動において、学生が最も困難であったことは、「子どもの意欲や行動による困難」であった。次に、「活動の説明に伴なう困難」「製作時間差による困難」と続く。学生は、造形授業の中で、造形遊びの計画や模擬保育を経験しているが、子ども役は同年代の学生のため、保育者役が進めたい通りに集中して製作を行い、言葉が足らずとも説明の意図を組んでもらえる状況であった。今回、初めて幼児を相手に活動を実施し、幼児の興味関心をひく保育技術や幼児の目線に立った環境設定の重要さを実感したと考えられた。

記述式質問紙調査結果からは、「自分一人では思いつかなかった対応の仕方を知ることができた」「自分の考えだけでは上手くいかないときもあるので、人の意見を聞く大切さを改めて感じた」など、他者の意見を保育に取り入れることで、柔軟に対応できるのではないかという省察がみられた。グループワークを通して、他者の考えに触れることは、同僚性を基盤とした相互支援が必要な保育者を目指す学生にとって、有益であると考えられた。

◆まとめ

（１）　実習での造形活動において、学生が最も困難だと感じたことは、「子どもの意欲や行動による困難」であった。次いで「活動の説明に伴う困難」「製作時間差による困難」であった。子どもの行動予測や、子ども理解が不十分であることから、適時適切な対応ができていないことが推測された。

（２）　困難事項の中には、事前の準備や計画を入念に行うことで解決に向かう事柄も多く、授業の中で、より幼児の目線に立った活動の実施について、細部にわたり考察する機会を設ける必要があると考えられた。

（３）　実習で活動を進める際、計画した通りに、時間通りに進めることばかりを気にした保育をしがちで

ある。「子どもの気持ち」を意識したグループワークを行うことで、子ども主体の造形活動について考察を深めることができることが、学生の記述より考えられた。

（4） 適切な援助を行うためには、多角的な視点で物事を観察し、他者の考えを聞き何かに気づいたり、支援について討議したりする経験が重要である。グループワークを通して他者の考えに触れることは、同僚性を基盤とした相互支援が必要な保育者を目指す学生にとって、有益であると考えられた。

令和４年度（2022 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】 幼児教育学科 【職名】 助教 【氏名】 髙橋 秀樹

【研究の題目】

A scoping review of adapted physical activity interventions for children and youth with disabilities using international classification of functioning, disability and health: children and youth version as a reference

【研究の概要】

適応型身体活動（APA）は、障害のある子どもや若者に身体活動をする機会を提供する。しかしながら、様々なサービスにおける APA の実施が彼らにどのような利益をもたらしているかはよく知られていない。本研究では、APA の介入に関する既存の文献をレビューし、障害児・者の特徴やプログラム内容を明らかにし、主に目標に関連する情報を統合する。

文献検索は、(1) 電子データベース Scopus と EBSCO ALL、(2) APA の主要 4 誌のマニュアルと個別精査で行った。特徴やプログラムを叙述的にまとめ、アウトカム項目は確立された国際機能・障害・健康分類を用いて抽出した。ICF-CY（International Classification of Function, Disability and Health: Children and Youth version）のリンクルールを用いて、アウトカム項目を抽出した。

1987 年から 2020 年の間に発表された APA の介入研究 35 件（北米では 2000 年以降が大半）を対象とした。自閉症児が最大の対象群である。実施された豊富で多様なプログラムが効果的であることが証明された。ICF-CY のカテゴリーに分類された 184 のアウトカム項目のうち、48%が身体機能、52%が活動・参加に焦点を当てた。

本スコープレビューは、APA の専門家や非専門家（保護者など）に対して、障害を持つ子どもや若者に対する既存の APA の介入について、より広範かつ体系的な概要を提供するものである。

【研究の題目】

Effectiveness of dance/movement therapy in individuals with intellectual disability: a systematic review

【研究の概要】

本システマティックレビューは、PRISMA ガイドラインを用いた分析の質を検証し、知的障害者に対するダンス／ムーブメントセラピー（DMT）の介入の有効性を評価することを目的とした。検索エンジンとして、Medline、PubMed、Web of Science を使用し、特定の条件のもとで研究を選択した。また、追加検索として American Journal of Dance Therapy を使用した。最終スクリーニングの結果，5 件の研究が選定された．エビデンスレベル（LOE）については，2 研究が LOE3，3 研究が LOE4 であり，統制介入研究の質評価によるバイアスリスク（ROB）は，選択したすべての研究で高い ROB が示された．LOE は低く、ROB は高いという結果であったが、選択された研究は、若年成人から中年成人までの中等度から重度の IQ の人において、DMT の介入が運動技能、身体知識、感情的幸福、指の皮膚温度、筋弛緩を改善したと報告されている。

【研究の題目】

ダンスセラピー -国内外の比較・国内の臨床と教育状況・可能性・そして未来へ-

【研究の概要】

Narrative Review にてダンスセラピーにおける国内外の研究・教育的比較、国内の臨床と教育の現状状況、及び今後の可能性について報告をした。

【研究の題目】

新産婆養成（完全ナル教育ヲ受ケシ者）にむけて -賀川一郎の論説「産科ノ発達及産婆ノ養成ニ就テ」とその背景-

【研究の概要】
賀川一郎の論説「産科ノ発達及産婆ノ養成二就テ」に関して助産の歴史を調査し、報告した。

KAKUMEI
GAKUEN

SINCE 1896